

---

# 帰るための言葉

深村夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帰るための言葉

### 【Nコード】

N6876W

### 【作者名】

深村夕

### 【あらすじ】

事故によって記憶を失い幼なじみと一緒に入院生活を送るレオンは、ある時から不思議な夢を見ていた。懐かしくも悲しい夢を何とか忘れようとしていたレオンだったが、退院間近になったときに夢に出てくる猫とそっくりな黒猫と不思議な力を持つ青年と出会い、彼らとともに欠けた記憶を探していく。夢の正体を知ったとき、レオンは悲しい決断を迫られる――。

## 始まりの言葉

真夏の太陽の光を包みこむように葉をいっぱいに繁らせた樹々が、目の前の建物へとまっすぐ伸びる小道の上にまだらな濃い影を落としている。土の道を守るように並んだそれらはまるでやって来た人間を導くように時折梢を揺らして、黙々と歩いていく3人に光の網を投げかける。

大樹の発する生命の息吹のおかげか、今朝までいた本館よりもここは息がしやすい気がして、レオンは甘く澄んだ空気を深く吸いこんだ。何回かそれを繰り返すともやがかった頭が少しだけはつきりしたような気がする。

緑のトンネルの出口付近に差しかかると、淡い金色の髪をしばって肩に垂らした男性——カイシドが足を止めて振り返った。

「あれが森の館だ。君たちの荷物は2階の部屋に運んであるから、着いたらゆっくりできるよ」

彼が一步下がって指差した先には、薄茶色の建物が陽射しに照らされてひっそりと佇んでいた。長方形をした2階建ての館の中央には洒落た玄関ポーチがあり、左側にも段差が上がったところに部屋一面にはめられたガラス戸が見える。開け放たれているところを見るとどうやらそこから出入りできるらしい。

カイシドの言葉に、並んで歩いているピンク色の猫のぬいぐるみを抱えた少女——メルは眩しそうに目を細めて建物を見つめる。レオンも同じように館に顔を向けたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべて2人を見守っているカイシドに視線を戻した。おうむ返しに尋ねる。

「今日からあそこで過ごすのか」

「そうだよ。僕とシオンも一緒に住むからこれからもよろしく」

「もう元のお部屋にはもどらないの？」

「うん、ここは静かだからあっちに比べるとちょっと寂しくなるね。でも、昼間は本館のみんなやリン先生が遊びに来てくれるよ」

メルは質問に少しだけ声のトーンを上げて答えたカイシドは、ふと思いついたように腕を組んでそんなに背丈の変わらない2人を見下ろすと、白い歯を見せてにやりと笑った。顔を向けた2人にやや低い声を作って喋りだす。

「あそこは昔宿泊所として作られた古ぼけた館なんだけどなあ、得たいの知れない言葉を話すロボットどもがずっと住みついてて、見たこともねえ料理をたらふく食わせようとしたり、館中の部屋に押し入ってしばらくごそごそやったりするんだ。んでもって、森にはたまーに――」

ここで急に素の表情に戻って「あれ、なんだったっけな」と呟いたのでレオンは肩をすくめた。ちらりと隣を見やると、メルは何かを見つけたのか森の奥をじっと見つめている。顔を戻すとしばらく考え込んでいたカイシドは照れくさそうに笑ってまとめた。

「……ごめん、忘れちゃったよ。今のはシヴェルツ先生に聞いた話で、実は僕もここに来るのは初めてなんだ。まあ、僕たち以外誰もいないし、迷惑にならなければ好きなようにしていいよ。ああ、そうそう、館にはクロミツ君とクロミちゃんがいるんだ。会うのは初めてかな？」

レオンが軽くなずくと、ふいに館のほうから3人の名前を呼ぶ声が聞こえた。見ると左側のガラス戸のところで黒髪をショートカットにした背の高い女性が、満面の笑みを浮かべてこちらに向かっ

て両手を振りまわしている。

カイシドとレオンはそれに応えて手を振ったが、メルは相変わらず森の奥へと視線をさまよわせたまま答えない。声をかけようとしたレオンは真剣なまなざしを見て口を閉ざした。

救いを求めてカイシドを見上げると、彼も彼女が見ている方へと視線を向けていた。何かあったのだろうか。不安の色を濃く宿したレオンと目が合うと彼は新緑の色の瞳を柔らかく細めた。

「僕は先に行っているから、メルちゃんと一緒にゆっくりおいで」

そして、何を思ったのか、戸惑うレオンにそっと耳打ちすると、2人を置いてさっさと歩き出してしまう。

「あ……、カイシド！」

レオンも慌てて数歩踏み出したが、それでもメルは抱えたぬいぐるみの頭に隠れるようにしながらも森の奥を見つめたまま動かない。いったい何が気になるのだろう。レオンは諦めて足を止めた。とりあえずしばらく待つことにする。

どこからか吹いてきた風が葉を揺らし、遠ざかるカイシドとの間に線のような模様を浮かべる。レオンは泳ぐようにゆったりと歩いていく彼を見送っていたが、小柄な背中が館の中に消えると覚悟を決めて心をどこかに飛ばしてしまったメルに言った。

「……行かないのか？」

その声にメルは大きく肩を震わせた。やっとこちらを向いたが、目が合うと逃げるように素早く視線をそらして小さく首を横に振る。続いて聞こえた声は、辛うじて聞こえる程度の音量だった。

「リムがいた気がしたの」

「リム？」

「……レオンは、見た？」

その言葉にレオンはそつと首を傾げる。ここに来てからの1週間のことはあまり覚えていないが、リムという名前の人には会ったことはないはずだ。森のどこかにいたのだろうか。

首を横に振ると、メルは何か言いたそうに口を動かしたが、結局うつむいてまた黙りこんでしまう。それを見たレオンは軽く右手を握るとそつと心臓の上に置いた。しかし、淡々とした鼓動は時を刻んでいることを伝えてきても、相変わらず望む答えは返してくれない。

あの日“ヒズミ病”にかかって記憶をなくしてから、時々自分は本当に“レオン”なのだろうかと不安になる。特にメルと話していると、こういう時過去の自分ならどうしていたのだろう、とたびたび考えこんで動けなくなってしまう。

この時もどうしたらいいかわからずただ見ていると、ふいに夏空の色の瞳が鮮やかに飛びこんできた。吸い込まれるように見とれていると、まるでその色を映したような澄んだ声が聞こえてくる。

「レオンはどこかに行かないよね」

「……………わからない」

思いがけない言葉に、ふいに胸がぎゅっと掴まれたように苦しくなる。その痛みから逃れるようにレオンは視線をそらした。

忘れてしまった過去に関する話はまだ辛くて苦手だ。特に相手がメルだと。こんな思いつめたような悲しい顔をする少女ではなかったのに、そうさせている今の自分が恨めしい。

だが、その言葉に突然メルがくしゃりと顔を歪めた。どこかで生まれた不快感がじんわりと心を焼いてきて、無意識に強ばったレオ

ンの顔がかすかに歪む。

「泣いてるのか？」

「泣いてないよ」

でも、その顔はそうだ。すると、それが聞こえたかのようにメルが謝る。

「ごめんね、レオン」

「……なんでおまえが謝るんだよ」

反射的に出てきた怒ったような声に、ピンク色の猫のぬいぐるみを抱きしめる腕に力が入る。ばかな自分をのしるがもう遅い。

そういえば、このぬいぐるみの名前は何だっただろうか。

渦を巻きはじめた頭の中をどうにか整理しようとする、ふいに1つの言葉がはっきりと浮かんできた。記憶がバラバラになった自分にもできること、これなら約束できる。レオンは急いで口を開いた。

「“ヒズミ病”が治ったら、もう一度今日の話を話そう」

「……どうして？」

「記憶を取り戻したら、今の質問にも答えられる。……今は、まだ、どうしたらいいのかわからないんだ」

驚いたように見上げたメルを抱えたぬいぐるみに視線を落とすと、彼女もつられて視線を落とす。また、傷けたのではないかと心配したが、再びレオンを見上げた顔はなぜか笑顔だった。夏の空のように眩しい、自分が大事にしていた記憶の一欠片。

「ありがとう」

その顔を見て、また1つ記憶が蘇る。  
ぬいぐるみの名前は、モモ。メルの大らかな宝物だ――。



ぼよん、いや、ぶるんだろうか。そんなかわいい音で表現できそうもないそれがレオンを呑みこもうとしたとき、突然不気味な巨体が消し飛んだ。勢いよく跳ね起きると何かが滑り落ちる感触がして、照明が下がった天井が見えた。

一通り見まわして夢だとわかるとレオンは長いため息をついた。渴いた口の中にはまだクリームの甘ったるい匂いが残っている気がする。

定位置の2人がけソファの下を見ると、誰かがかけてくれたらしい薄手のタオルケットと読みかけの本と悪夢の主——今朝メルにもらったばかりのプリン形クッションが転がっていた。もしこれに意思があつたなら、あと1歩のところでレオンを逃がした恨みをぶつけてきただろうが、幸いつまんでひっくり返しても大人しくしている。フェルトで作られたそれは、微妙に右に傾いているところや、てっぺんにカaramelソースの代わりにクリームがのっかっているところまで夢とそっくりだ。

見ているうちにふと目覚める直前に聞こえた声を思い出してレオンはくすりと笑った。口に出してつぶやく。

「カaramelソースがないプリンなんてただの黄色い塊だ、か。あいつが聞いたら怒るだろうな」

左手にはめた腕時計を見ると銀色の短針は4時を指していた。最後に時計を見てから3時間も経っている。

大きく伸びをすると、開け放たれたガラス戸から森を渡った風が吹きこんできて、細い栗色の髪をふわりと持ち上げる。その一筋が猫のようなくっきりとした藍色の目にかかり、無意識に右手で払いのける。

「いつの間に寝たんだろう」

胸の中のもやもやを言葉にすると余計不安になって、レオンはプリンクッションを強く抱きしめた。

こんなに眠いのは、朝からずっと1人でいて退屈だったからだろうか。

ここに入院してからもうすぐ2ヶ月になる。今は記憶も取り戻して普通に過ごしているが、それでも1人でいるといろいろと考えてしまう。例えば、今の変な夢も“ヒズミ病”が見せる悪夢と関係があるのかもしれない、と。

そこでまた暗い考えに沈みそうになったことに気づくと、レオンは頭を振って眠気の残りカスを払って立ち上がった。クッションを置いて壁際のミニキッチンへ移動すると、どこからかコーヒーの香りが漂ってきた。

香りを辿るとミニキッチンの隅にコーヒーが入った緑色のマグカップと透明なコップが並んで置かれていた。興味を惹かれてマグカップに顔を近づけると苦味のある香りが鼻をかすめる。この暑いのにホットコーヒーらしい。と、隣のコップを見てレオンは目を見開いた。

「なんだ、これ……」

小さな水滴に彩られたガラスの中は、下半分がとろりとしたミルクの白、上半分が氷を浮かべたコーヒーの黒にきれいに分かれていた。ゼリーのようにも見えるが境目は2色が混じった淡い茶色になっていて、真ん中にはストローがさしてある。

まるで、時々母が買ってきてくれるカフェの飲み物みたいだ。初めて見るそれをまじまじと眺めていると、浮かんだ氷がカランと音を立ててひっくり返る。作ってからそんなに経っていないようだが、

作り主はどこへ行ったのだろう。

隣のマグカップに視線を戻すとゆるんだ顔で微笑む猫がレオンを見返してくる。見覚えのないそれとにらめっこしていると、ふと声が聞こえた気がした。

「え？」

どこか懐かしい声に一瞬頭の中に何かがよぎる。そっと振り返ると、ソファの上のプリンクッションの隣に真っ黒な猫が前足を揃えて行儀よく座っていた。

驚くレオンと目が合うと、見知らぬ黒猫は「ふにゃあん」と間のぬけた声で鳴いた。やっと気づいたことを喜ぶように使い古したほろろのようなぼさぼさのしっぽを揺らす。

「おまえ、いつからいたんだ？」

まさかおまえが呼んだのか、とは辛うじて呑みこむ。賢そうな猫だが、寝ているうちにどこから勝手に入りこんでしまったのだろうか。

外へ出してやらないと。怖がらせないようにゆっくりと近づくと、猫はしっぽを振るのをやめて澄んだ目でじっと見つめてくる。まるで夜空をのぞきこんでいるような藍色の目は誰かに似ているような気がする。なぜかそんなことを思うと、ふいに伸ばした指の先で猫が身を翻した。

空気を掴んだレオンを背に、黒猫はまるで風に乗るように軽やかにホールを走りぬけ、白い壁に挟まれた階段へと消えていってしまふ。

「こら、待て！」

急いで追いかけて階段にたどり着くと、しっぽが踊り場の左に消えるのが見えた。それと入れ違いに黒い髪をした人がひよいと顔をのぞかせたのに気づいて、レオンは慌てて手すりをつかんで勢いがついた足を止めた。

「よお、レオン！ やっと起きたのか」

それには気づかなかったのか、人影は階段の上からのぞきこむレオンに明るく声をかけてくる。知らない男の人の声だった。

「……誰ですか？」

「今、そっち行くから。ちょっと待ってて」

首をかしげながらも言われたとおりホールで待っていると、間もなくして声の主が軽快に階段を上ってきた。

明るいホールで改めて見るとやはり初めて会う人だった。新しく入ったスタッフだろうか。

警戒心丸出しのレオンを人懐っこくのぞきこむ藍色の目は生き生きと輝いていて、鍛えられた体と同じく日に焼けた顔全体で“興味津々”と訴えてきている。まるで幼い子どものような遠慮のない視線に、年齢的には子どもであるレオンの方が気まづくなる。その割には、190センチ近くある父と同じぐらい背が高い彼を間近で見上げるのは、首と背中がかなり後ろに傾いて辛い。

視線を元の位置に戻すと、いつの間にか戻ってきた黒猫が弾かれたように階段を駆け下りていくのが見えて「あ」と呟く。振り返った男性も面白がるように言った。

「あの黒猫、ずーっとここをちよろちよろしてたぜ。もしかして、あんたがあいつのお友だち？」

「まさか！ 初めて見たよ。まったく、どこから入ってきたんだか」

力いっぱい否定すると、男性は不思議そうに小さく首をかしげた。が、レオンが再び寝癖のついた栗色の頭を目一杯傾けて見上げると、笑いをかみ殺しながらゆっくりと体を折り曲げた。頭数個分下のレオンの目線までかがむと、何を思ったのかいきなり「よっ、これで見えるか？」と右手を上げる。

目の前でぱっと広げられた大きな手のひらに、レオンはぎょっとして1歩後ろに下がった。

「な、なに？」

「やっぱそっちからすると、オレはでかすぎて見えないよな。気がつかなくてごめんな。オレはアキっていうんだ。あんたは何ていうんだ？」

「レオン。そういえば、さっき呼んでなかった？」

「ああ。言っただけど、あいさつはきちんとしないと。……あ、やば」

どうにも噛みあわない会話にレオンが戸惑っていると男性――アキは、突然体を伸ばして突進した。長い足をせっせと動かしてあつという間にキッチンの前に移動すると、マグカップと2色のコーヒーが入ったコップを持ってレオンの方を振り返る。

「すっかり忘れてたけど、お土産作ってたんだった。コーヒー飲む？」

「飲めるけど、お土産ってなに？」

「うん、それなんだけどさ、けっこう長い話なんだ。だから、その前にちよつとそこに座ってこれ飲もう。レオンも昼寝してて喉かわいたろ？」

相変わらずテンポの掴めない口調で答えると、アキは返事を待たずにさっきまで寝ていたソファの正面に座った。仕方なくレオンも

座るとテーブルの上にあの2色に分かれたコーヒーのコップを置いてくる。どうも“お土産”とはこれのことらしい。

札を言って受け取ると、入っていたストローが揺れて中で氷がぶつかる小さな音がした。慎重に持ちあげて2色の層の無事を確認するレオンを尻目に、アキはさっそくマグカップに口をつけて勢いよく飲みはじめた。

その豪快な飲みっぷりにレオンもつられてそっと吸いあげると、意外にもとろりとした甘みが口いっぱいに広がった。暑さでバテていた体に染みいり自然と笑みが浮かぶ。

「甘い……」

「好みがわかんないから、牛乳にはちみつ入れてみたんだけど、甘すぎた？」

反応を伺っていたのだろう。小声の独りごとを聞きつけて心配そうに尋ねたアキに、レオンは慌てて首を横に振った。口ごもりながら答える。

「いや、いつも飲んでるのよりずっとおいしい。それに色が分かれててすごくきれい……ですね」

「それな、最初にミルクと氷を入れておいて、スプーンとか使って上からそーっとコーヒーを注いでくんだ。友達に教わったのを家で試しに作ってみたら、弟といとこたちが喜んでやってなあ。それ以来、うちの人気メニューなんだ」

そう言って「おかげで2kgも太った」とTシャツの上からありもしない腹の肉をつまんでみせたアキにレオンは小さく吹きだした。それを見た彼は咎めるように大げさなしかめっ面を作ったが、レオンと同じ藍色の目は笑っている。

「それからは、フルーツシェイクを飲みたいだの、星のゼリーを作ってくれたの、今日はアイスサンドの気分だの、おやつの時間になると家中追いかけまわされてなあ。お兄ちゃんはどうもへとへとですよ」

「おいしそうだね、それ」

「すっげえ大変だぞ？」

怪談話よろしくわざと怖い声を出したアキに、レオンもつい苦笑する。

「料理を作るの好きなんだ。食べるのはおれじゃなくて弟やメル……幼なじみだけ」

「ああ、オレも同じだな、作ってる方が多かった。……まあ、楽しいからいいけど」

微妙に間を挟みつつも懐かしそうに目を細めたアキを、レオンは初めて興味をこめて見上げた。迷った末におそろおそろ口を開く。

「そのゼリーとかサンドって、どうやって作るんだ？」

「ゼリーは適当に砕いてそこらへんのカップに詰めこんで、時々星型に切り抜いた寒天とかナタデココとかフルーツとか放りこむ。サンドは適当に焼いたクッキーにアイス挟んで凍らせる」

「……………」

「だから言っただろ。ものすごく大変だって。買出しとか腹ペコのいとこたちをどうやって待たせるかとか、いろいろと、な」

真面目くさった顔で答えたアキに、きょとんとしたレオンは一応うなづく。すると、微妙な表情になってマグカップを傾けて一気に飲み干し始める。どうやら冗談だったらしい。ちらりと目をやったレオンは小さく首をかしげた。

なんだか1人でよく喋るヘンテコな人だ。メルやヴァンとは気が合いそうだけど。

そういえば、ここ最近はまだあまりおやつを作っていないし、明日はメルのご機嫌とりを兼ねて久しぶりに新作にチャレンジしてみようか。そんなことを考えながら再びアイスコーヒーのとりりとした甘さを楽しんでいると、アキが一足先に空になったマグカップをテーブルに置いた。少しずつ味わって飲んでいるレオンを見ると、どこかうれしそうに尋ねてくる。

「それ、そんなに気に入った？」

「うん、ありがとう」

「あはは、そんなにおいしそうに飲んでくれるとうれしいなあ。うちの弟もそれ好きなんだ。なんならまた作ってやろうか？」

思いがけない提案にレオンはぱっと顔を輝かせた。その揺れで慎重に飲んでいたコーヒーの層が崩れて薄い茶色のまだらになってしまったが、それにも気づかずにくましくしたてる。

「ほんとか！？ あ、でも、作ってるとこ見せてくれないか。自分でも作りたいんだ」

「ああ、いいぞ。時間あるなら明日教えようか？ オレ、しばらくここににいるから」

「ここにいてって？」

「シヴェルツ先生に言われて、急だけど今日からここに泊まることになったんだ。短い間だけどよろしくな」

その名前に、興奮していたレオンは大粒の水を呑みこみそうになり息を詰まらせた。むせこんでいると、どこからか金髪のおっさんの高笑いが聞こえた気がした。

主治医のシヴェルツは何かと忙しいらしく、普段のレオンの世話



は部下のカイシドに任せていて滅多に口を挟んでこない。その彼がいきなり新入りのスタッフをそれも住みこみで寄こすなんて嫌な予感しかしない。何しろ、優秀だが何を考えているのか誰にもわからない変人なのだ。

「アキはシヴァのところの研修生なのか？ ……カイシド、このことちゃんと知ってるんだよね」

思わず疑っている口調で聞き返すと、アキは一瞬まずいといった顔をしたが「まあ、そんなもん」とあいまいにうなずいた。

やはり何か事情がありそうだが、レオンは深くはつつこまずに口をつぐんだ。責任者のカイシドが知っているならレオンが関わることではないし、自分も聞かれたくないことはたくさんある。

“ヒズミ病”。世界と世界の間を吹き荒れ、時には異世界への扉“ゲート”や世界を渡る船に襲いかかる膨大なエネルギーの嵐“ヒズミ”から名付けられたそれは、運悪く巻きこまれた人間の精神を歪ませる奇妙な病だ。その大半は記憶喪失に陥り、レオンもその1人だ。

幸い、今は治療法が確立したことから、世界と世界を繋ぐ“ゲート”を管理する管理局が設立したこの療養施設に入院して治療を受ければ、早い者は1週間、長くて1ヶ月もあれば退院できる。

レオンと幼なじみのメルは1週間が過ぎた頃、本館から離れたこの建物に移って過ごしていた。理由はわからないが、大勢の人がいるところが苦手なレオンにとってはありがたかった。

そうして、最初は毎日、最近では数日置きに治療を受けるうちに、基本的なこと——自分はどういう人物だったのかや、生きてきた環境や周りの人物のことは大体思い出した。ここ最近の診察は様子見になっているし、たぶん、来週にでも退院できるはずだ。

そう思っていたのに、今頃になって新しくスタッフを寄こすなんて。シヴェルツは何を考えているのだろう。単なる気まぐれか、も

しくは研修生の教育のためだろうか。それとも――。  
黙りこんでしまったレオンを見て、アキは明るい口調で話を変える。

「あー、やっぱり聞いてなかったのか。カイシドさん、今日休みだしな」

「ううん。たぶん、シヴァがおれを驚かせようとしてわざと黙ってたんだと思う。でも、よりにもよって今日なんて、運が悪いな」

「は？ ああ、そういや、今日は人が集まってるって言ってたな。むしろちようど良かったよ」

「……うちの母さんには近づかない方がいいぞ。絶対ろくな目に合わないから」

能天気なアキに、レオンはぎりぎり聞こえる程度の音量でささやいた。

あまりにも悲壮な顔をしていたのか、それまで機嫌よく喋っていたアキはここでふと顔を曇らせた。

「あのさ、ここってやっぱあんまり人がいないのか？」

「本館に比べれば少ないけど、昼間は交代で何人か来るよ。たまに暇つぶしに来る人もいるし、シヴァなんかはこのところ毎日来てるし」

「でも、こうだっ広くて静かだと昼間でもなんとなく怖くないか？」

首を傾げながらも丁寧に答えたレオンに、アキはなぜか声を潜めてしつこく尋ねてくる。真剣な顔のところを見ると何かあったのだろうか。レオンは気になりながらも正直に答える。

「別に、何にも怖いことなんか何にもないよ。おれは本館よりこっ

ちの方が好きだけだな。……あっちと違ってうるさくないから」

つい本音をこぼしてしまっただが、それを聞いたアキはほっとしたようにため息をついた。

「そうなのか、良かった。実は、ここには昼でもユーレイが出るって先生に散々脅されてさ。来たらすぐえ静かだし、誰もいないし、んでもってレオンがここであんなながら寝てるの見たときは心臓止まるかと思ったよ」

「……変な夢見てたんだよ」

からかうように笑って顔をのぞきこんだアキに、レオンは口を尖らせて悪態をついた。

しかし、せっかくやって来たのにこのまま変な心配させておくのも何だか悪い気もする。少し考えた末にいつも母やカイシドに言われていることをそっくりそのまま伝える。

「あいつは仕事のことでは嘘つかないんだって。その代わり、それ以外で喋ったことは80%が嘘で、残りは寝言だから無視したほうがいいって、古なじみたちが言ってた」

「マジかよ。あーあ、また先生にからかわれちゃった。あの人、嘘がうまいんだよなあ」

アキのぼやきにくすりと笑うと手首にはめた腕時計が見えた。時計の針は5時近くを指している。思わずまじまじと見つめるとアキがのぞきこむ。

「お、もう5時か。長話しちゃって悪かったな」

「あ、ううん。おれも暇だったんだ。……あ、そうだ、ヴァンに電話しないと。めんどくさい」

額にしわを刻んで呟いたレオンに、アキは軽く笑ってマグカップを持って立ち上がった。そこでレオンは大事なことを言っていないことに気づいて慌てて彼を呼びとめた。

「あ、あのさ、さっきのコーヒーなんだけど」

何がそんなに楽しいのか。途端に満面の笑みを浮かべたアキにレオンは口ごもりながら言った。

「メルも一緒にいい？ あ、メルは一緒にここにいる子だけど、シヴァに聞いている？」

「いつも一緒にいる女の子だろ。もちろんいいよ。ついでにプリンも作るか？ シャーベットとかゼリーでもいいけど」

レオンの隣に置かれたプリンのクッションに目をやりながら尋ねるアキに、耳まで真っ赤になったレオンはこくりとうなずく。シヴァエルツはお喋りがすぎる。

それを見たアキは軽くなずくと「じゃ、お先に」とマグカップを持ったまま、あっさりと1階へと降りていってしまう。それを名残惜しげに見送ったレオンはコーヒーを飲みほすと空になったコップをそっと両手で包みこんだ。

「……約束、な」

その言葉を口にするとなぜか懐かしさとうれしさがないまぜになって込みあがってきて、久しぶりに心が弾んだ。

しかし、顔がにやけているのに気がつくとう慌ててメルのことを考える。いつも一緒にいるの微妙なニュアンスが気になったが、こんなにきれいで甘いコーヒーなら彼女も飲みたがるだろう。それに、

大好物のプリンがあるならきつと喜ぶ。

深呼吸をして気持ちを静めるとレオンものろのろと立ち上がった。めんどくさがり屋な弟は今ごろ夕飯作りでてんてこまいになっているだろう。気は進まないが、このまま電話をしなかったら、後で罵詈雑言の嵐と夕飯と称する大量の物体Xの画像の最凶ペアが電波に乗って襲い掛かってくる。

コップを洗い終わると、クッションを持ったレオンも足取り軽く自分の部屋へと向かった――。

夢から覚めるように、ぼんやりとした意識が徐々にはっきりする。両手を上へやってのろのろとヘッドギアを外すと美しい海の世界は消えて、代わりに蛍光灯の光に照らされた天井が目飛び込んだ。た。

額を手で覆って何回か目をしばたたかせると、プリンタが紙を吐き出す軽い音に混じって足元の方から穏やかな声が聞えてきた。

「おはよう。気分はどうだい？」

「もう眠くて眠くて、もう少し寝ていたい気分です。カイシド先生」  
「あははは、それだけしっかり答えられれば大丈夫だね」

両手をついてリクライニングベッドの上に起き上がると、レオンは大きくのびをした。ついで首をほぐしていると、目の前のデスクの上に置かれた黒光りするパソコンたちが一斉にグラフや画像や文字群を映し出した。

古代の文字にしか見えないそれらを眺めていると、声の主——カイシドがくつくつと肩を震わせながらやってきた。優しい緑色の瞳と同じ色のゴムで束ねた淡い金色のしっぽが、それに合わせて肩の上でふるふると揺れている。レオンはわざと呆れた顔で言った。

「今のなにがツボったんだ？」

「いや、ごめん。水浴びする猫を思い出して、つい」

予想通りの返事に、レオンはやれやれと首を振った。

いつも笑みを絶やさない彼は、レオンの主治医の下で研修を積んでいる“ヒズミ病”の医者だ。その真面目で優しい性格とついでに若さがかわれて、多忙なシヴェルツに代わって普段のレオンの経過

観察を任されている。レオンと一緒に入院している幼なじみのメルにとっては何かと面倒を見てくれている恩人だ。

その彼のもつ謎の笑いの発作は、彼と同盟を組んでいるメルには大好評でしょっちゅう2人で笑い転げている。周りの人曰く、これでもずいぶんマシになったらしいが、レオンには未だにそのツボがよくわからない。

何とか笑いを引っこめたカイシドがベッド脇の丸椅子に姿勢よく座ると、レオンは金色の頭ごしに紙の束をのぞきこんだ。

「今日はどうだった？」

「うん、ここのところずっと安定しているよ。あとは、先生の判断次第だね」

「治療っていつでも、ずっとリムと遊んでるだけなんだけどないのかな」

「まあ、それも治療の一環だからね。できるだけ真面目にやってくればいいよ」

苦笑混じりの返事に、レオンは軽く肩をすくめた。

この施設での“ヒズミ病”の治療は、すべて“クレイドル”と呼ばれる機械で行われて

いる。管理局が長年の“ヒズミ”研究から作り出したというそれは、簡単にまとめると仮想空間の中に患者ごとに合わせた“部屋”を作り、その中ですべての治療を一手に行うという万能マシンらしい。

好きに部屋をレイアウトしていいと言われてレオンが真っ先に思いついたのは、メルの故郷——美しい海にかこまれたヒマリ島の海岸だった。豊富な風景素材とギミックの中から似たようなものを合わせただけの簡単なものだが、1日中遊んでいた浜辺を思い出す空間は懐かしく一番落ちつく場所だった。

それはシヴェルツも同じなのか、その日の分の治療が終わった後は『息抜き』と称して、レオンのお気に入りギミック——黒猫の

リムを加えた3人で時間いっぱいまで遊んでいる。最近では、むしろリムと遊んでいる時間の方が長い。そんなわけで、毎回外で黙々と分析やら観察やらをしているカイシドと会うと少々罰が悪い。

その時、金属の輪がレールを滑る音がして隣りのベッドのカーテンが開いた。中から淡い金髪を短く刈りこんだ男性が肩をほぐしながら出てくる。高い鼻で隔てられた鋭い緑色の目は今は眠たそうで、自称鷹のように精悍な顔が3割ほど間抜けになっている。

引き締まった腕を大きく後ろにそらして熊よろしくうめくと、不機嫌な顔でカイシドをにらみつけた。

「まったく、いいところでやめやがって。おい、カイ、今日はちょっと早すぎたんじゃねえのか？」

「いいえ、時間通りですよ。もっとも、レオン君はまだ子どもですから、いつも心持ち早めに引き上げています。長時間のインは体に良くないですからね」

「かーっ、細かくチェックしやがって。学校の体験授業じゃあるまいし、きっちり時間通りやらなくてもいいんだよ」

「確かに授業はある程度は放っておいても大丈夫ですが、治療での手抜きは命に関わりますから。これが今日のデータです」

氷柱のように冷ややかな声とともに分厚い紙束を押し付けられて、金髪の男性――シヴェルツは大げさに顔をしかめた。しかし、膨大なデータを毎回わざわざ印刷させているカイシドの顔を見ると、大人しくパソコンデスクから椅子を引きずってきてどっかりと腰かけた。口とは裏腹に淡い緑色の目は覚醒してすばやく紙束を追っている。

入れ違いにカイシドが隣の部屋に行くと、目上げたシヴェルツはベッドの上に座ったレオンに大げさにばやいた。

「残念だったな、レオン。今回は勝負つかずってことで、引き分け



だ」

「しょうがないよ、治療なんだし。でも、今度は絶対勝つからな」

「おう、いつでも相手してやるよ。……んで、どうなんだ、調子の方は。まだ夢は見るのか？」

「あ……うん、もう大丈夫。最近は見なくなったから」

雑談から鋭く切り込んできた質問に、むきになっていたレオンは首もとの辺りに目線を漂わせた。あいまいに答えると、間髪入れずにつっこみが返ってくる。

「お医者様に向かって嘘はいけないなあ、レオン君。昨日のプリン反乱事件のことは、もう忘れちゃったか？」

「あ、あれは、関係ないだろ！」

「まあ、あれが現実になったらさすがのオレも面倒だからな。お互い、夢の中だけのことで良かったな」

にやりと笑ったシヴェルツは、再び紙束に視線を落とす。それ以上の追求がないことにレオンは内心ほっとした。

両親と学生時代からの親友であるシヴェルツは、レオンにとっては時々ふらりとやって来るやたらと陽気な変なおじさんだった。その彼が、実は“ヒズミ”が起きた現場に向向いてサポートする医者だと知ったときには弟のヴァンと共にしばらく疑ってしまい、両親たちに大いに呆れられたぐらいだ。

ちやらんぼらんな態度は主治医になっても変わらないが、その明るさと適度な距離感がかえって不安定な自分にはありがたかった。

コマ送りのようにめくられる紙束を眺めていると、リムの画像が見えてふと昨日入りこんできた黒猫を思い出す。そういうば、あの猫はどこから来たのだろう。昨日は結局、あのままどこかへ行ってしまったが。

「そういえば、昨日昼寝してたら猫が入りこんできたんだ。リムとおんなじ黒猫だったけど、本館で飼ってるのか？」

「猫だとお！？　どこから現れたんだ？」

「知らないよ。起きたらいたんだ。アキはしばらくうろうろしてたって言ってたけど、山に住んでるのかな」

「さあな、オレは見たことねえな」

何気ない質問に一瞬ぎよっとするほど鋭い声を出したシヴェルツは、返事を聞くとお喋りな彼にしては珍しくそっけなく答えた。

アキのことといい、また何か企んでいるのだろうか。半目で見つめるレオンに「それはオレに聞くんじゃないだろ」とぶっきらぼうに言う、シヴェルツは気を逸らすように紙束をひらひらと動かしてみせる。

「今日も異常なし。少なくとも、見た目は超優良健康体だ」

「この間もそう言われた」

「お、そうか。じゃあ、今度からウルトラスーパーアルティメットエネルギーシュボーイにするか。いつでもどこでも寝レオン君じゃかつこつかねえしな」

「言ってて恥ずかしくない？」

「32歳のダンディなおじさんが、わざわざ20も下の生意気な小僧がわかるように優しくかつこよく言っちゃったんだ。ま、そう照れんな」

「33歳だろ。父さんたちと同一齢なんだから」

「おい、バカ。隣のババ……もといお姉様方の耳に入ったら、オレまでシメられるだろうが。ちったあ考えて言え」

「そっちこそ何さらつと余計なこと言ってるんだよ。今のが聞こえてたら全部シヴァのせいだからな！！」

言い返しているうちにだんだんと声が低くなっていき、最後はシ

ヤーツと獣が牙を剥くような威嚇音になってしまった。

そこで不毛な会話を打ち切ってレオンは立ち上がると、隣の小部屋に続くドアをチェックした。幸い、几帳面なカイシドはドアをきっちり閉めていてくれたらしく、今の言葉が外に漏れた可能性は低いだろう。まったくシヴェルツと喋っていると心臓に悪い。

戻ってきたレオンの恨めしげな視線をそっぽを向いて無視したシヴェルツは、床を蹴ってパソコンの方へつと滑っていった。紙束といつの間にか出したメモ帳を裏返してデスクに置くと、手に持っていたペンの芯を出しっぱなしにぽんと乗せる。

あんなところに置いたらまた失くしてカイシドに怒られるだろうな。そう思ったが、レオンはさっきの仕返しに黙っていた。彼も気にしていないらしく軽い口調で続ける。

「もう知ってるだろうが、8月の半ばに夏祭りがある。今から2週間ちよい後の土日だ。患者と家族の交流ってご大層な名目をぶち上げてるが、要はうちの人間がはっちゃけたいんだな。おまえも来るだろう？」

「うん。メルとまわるつもり」

レオンは知り合いのスタッフたちの手作りの作品を見られれば充分なのだが、今から散歩に出かける犬のようにはしゃいでいるメルは、最初から最後まで居座るだろう。飼い主よろしく引きずられていく自分を想像するとげんなりする。

それを読んだように、シヴェルツが冷やかすように口笛を吹く。  
澄んだ音色なのが余計憎たらしい。

「相変わらずラブラブだな」

「どこがだよ」

「まあ、おまえらのちまい恋愛事情はどうでもいいわ。今日の検査でも異常はなかったし、その祭りが終わったら退院だ。何回かは来

てもらうが、様子見だな」

「あ……、うん。後で、母さんに言っとく」

唐突であっけらかんとした言葉に、ふいをつかれたレオンは自分でも驚くぐらいにショックを受けた。思わずうつむきそうになって、慌てて気を引きしめる。

最初に退院の話が出たのは、2週間前だった。その頃には大分状態は安定していたし、ちょうど連休に入って家でゆっくりできるからと両親や弟が強く希望したからだ。結局、それは見送られたのが今度は確実だろう。

しかし、やっと帰れてうれしいはずなのに、心のどこかにぽっかりと穴が空いたように実感がわからない。いろんな人と過ごしたここでの生活はとても楽しいものだったが、離れるのが嫌だとだだをこねているのではない。久しぶりに日常に戻るのが不安だというのも違う気がする。

ただ、自分はまだ何かを忘れている気がする。いつから現れたのか自分でもわからないその漠然とした不安は、内に閉じこめられて延々と黒い渦を巻いていた。でも、きっと、家に帰ればそんなあまいなことは忘れてしまうだろう。そう思いたかった。

黙りこんでしまったレオンに、シヴェルツは陽気に尋ねる。

「タマちゃんがいないと寂しいか？」

「……なんでいちいちメルが出てくるんだよ」

「そりゃ、いつも一緒だからな」

「そんなことない。シオンさんと一緒にいるほうが多いよ。それに、ここって暇な人はあんまりいないから、おれぐらいしか遊ぶ人がいないんだろ」

内心の動揺を押し隠してそっけなく答えるレオンが面白くなかったのか、シヴェルツは口の端を歪めて苦い笑みをこぼした。そんな

顔を見ると妙に貫禄があるように見えるから不思議だ。

そのまま天井を仰いだ後、元に戻って自分にも他人にも余計な干渉を嫌う彼にしては珍しくお節介な言葉をかける。

「ま、どう思いかはおまえの勝手だけど、嬢ちゃんを大事にしろよ。あんなにいい子は滅多にいないからな」

背中のみずがゆさに顔をしかめたレオンに、きれいに揃った白い歯を見せて付け足す。

「それに、将来は面食いのおまえでも惚れこむような美人になるだろうしな。タマちゃんがぴちぴちのナイスバディに育ったら、オレの弟子にしようかなー」

「どさくさにまぎれてなに言ってるんだよ、変態!!」

「冗談でもそんなこと言っていると振られますよ、先生。……おつと」

真っ赤になって怒鳴ったレオンに、戻ってきたカイシドが援護するように口を挟んだその時だった。

ちょうど目の前に来た彼が急につまづく。慌ててレオンが手を伸ばしてトレーを支えると、ちゃぷんと音を立ててトレーに小さく水滴が飛んだ。それにも気づかず驚いたように床を見つめる彼につられて視線を下に落とすと、足元で何かが動いた気がした。

「あれ？」

気になってひよいとベッドの下をのぞきこむが、薄暗い闇の中は埃1つなくきれいに掃除された床とベッドの車輪だけだ。気のせいだったのだろうか。

頭に血が上って苦しくなって顔を上げると、カイシドとシヴェル

ツがやけにそっくりな顔をしてレオンを見ていた。

「ありがとう、レオン君。助かったよ」

「どうした、なんかいたか？」

かけられた言葉はまったく異なっていて、レオンは首をひねりながらシヴェルツに尋ねた。

「やっぱりなんかいた？」

「いや、オレは何にも見てないな。それよりカイ、足元には気をつけろよ」

「すみません。最近靴を替えたばかりでまだ馴染んでいなくて」

釈然としないものを感じながらも、笑顔のカイシドからお茶が入ったコップを受け取る。きっと落し物でも踏んづけたのだろう。一気に飲み干すと、小さな氷と混じって青く澄んだ冷たい液体が喉を通った。

沸騰していた頭の中が冷やされてすっきりするついでに、体も軽くなったような気がしてレオンはコップを持ち上げて底をのぞいた。

「なんか入ってる？」

「さっきアキ君にもらったハーブティーを淹れてみたんだ。疲れるときにちょうどいいって言ってたけど、味の方はどうだい？」

「うん、おいしい」

「こりゃいいな、疲れが取れる。そういや、アクセルとはもう馴染んだか？」

「アクセルって、アキのこと？　　そういえば、なんでわざわざアキを来させたんだ？」

初めて聞く名前に聞き返すとシヴェルツは大笑いした。手にした

コップがかたかたと揺れて、お茶がこぼれないか心配になる。

「ああ。あいつも自分の名前を言わない奴だったな、そういや。そちのしっぽ先生と違って齢も近いし、いい遊び相手になるだろ」  
「そうですね。もつとも、どこかの誰かが仕事以外の時間まで干渉してこなければ、僕ももっとレオン君たちと一緒にいられるんですが」

「研修ってのは将来の人間関係を築くためにあるんだ。それに、楽なもんばっかやってると、ロクに仕事を覚えねえまま1人立ちして後で泣く羽目になるぞ。今のうちに先輩方に積極的に取り入って技を盗むのも、また経験ってやつだ」

「ええ、仕事熱心な先生でも、たまには本部に行って息抜きしたくなる気持ちはよくわかります」

「サボってねーよ。リックの手伝いをしてやってるんだ」

「ついでに、更正してきてくれると助かるんですけどねえ」

「上司に向かっていい度胸だな、おまえ」

「おや、誤解を招く発言をしてしまったようですみません。僕が言いたかったのは“クレイドル”のことです。結構使いこんでいますし、最近になってギミックデータが山ほど追加されましたから、そろそろルウにメンテナンスを頼もうと思ひまして」

「……わかったよ。午後からやればいいんだろ」

空になったコップを持って足を揺らしていたレオンはにやりと笑って、目の前に立つカイシドに「勝者に乾杯」と小声でささやいた。すると、彼が手を後ろにまわしてピースをしてきて、あやうく吹きだしそうになる。きつと、シヴェルツに向けた顔は仕事用の完璧な笑顔のままだろう。

手を上げて降参したシヴェルツはデスクの引き出しから封筒を取り出した。手招きされて近寄ると、先ほど書いていたメモを入れて封をして渡される。

「お使いだ。リックパパに届けてくれ」

「なにこれ？」

「大人の男同士の秘密のお手紙だ。そんじゃ、帰っていいぞ」

「なんだよ、気持ちわるいな」

「僕はちょっと用事があるから、メルちゃんと先に帰っててくれるかい」

「あ、うん。わかった」

うなずきながらもレオンの顔は微妙に不満に歪む。

最近では本来の業務に戻りつつあるのか、カイシドは本館にいることが多い。今日はアキと一緒におやつを作ることを伝えているが、それまでには帰って来るのだろうか。

聞いてみたかったが、大の甘党のシヴェルツはこういうことに關してはものすごく勘がいいし、うるさい。考えた末にレオンは短く言った。

「じゃ、後でな」

一応目で確認すると、カイシドはわかったというようににこりと笑ってうなずいた。レオンもそれで安心してうなずきかえすと、封筒をバッグにしまってドアを開けて出て行きかけたが、ふと足を止めてベッドの下をのぞきこんだ。

だが、薄暗い闇には相変わらず何の気配もなかった――。



目的の部屋の前で立ち止まると、レオンは色とりどりのお菓子が盛られた大きな籠を左腕に抱えなおした。そっと手を伸ばしてチャームを押そうとすると、まるで待っていたかのように目の前のドアが開いた。

中から出てきたゆるく波打つ赤い髪をサイドでまとめた女性は、籠盛りを危なっかしく抱えているレオンに気づくと、しなやかな長身をかがめて籠を受け取った。その重さに切れ長の翡翠色の目を軽く開いて感心したように呟く。

「またたくさんもらってきたな。新記録じゃないか」

「シヴァの部屋を出たら、おすそわけだって籠ごとくれて、あとはもう……」

「ははは、リオとメルはかわいいからな。みんなかまいたくてしょうがないんだ」

肩をほぐすレオンを軽く笑い飛ばすと、赤い髪の女性――カリンはきびきびとした動きで中へ戻ってしまう。レオンは慌てて後を追って部屋へ入った。

管理局が運営するこの“ヒズミ病”の入院施設は、医者とそれを支えるスタッフたちの約7割が20代前半から30代半ばの若手で成り立っている。その半数以上が管理局が運営する養成学校の卒業生ということもあってか、良くいえば面倒見の良い、悪くいえば個性的なスタッフが多いのが特徴だ。

そんなわけで、レオンはここに来てからずっと同じく卒業生である両親の同期や後輩を始めとしたスタッフたちに何かと親切にしてもらっていた。おかげで本館に来ると一部の場所を除いて気を抜けない。

数少ない聖地であるカリンの部屋は、淡い色合いですっきりとまとめられていて、いつ来ても他とは違う静かで清廉な感じがする。それに加えて、今日は花のような甘い香りがただよっていた。

あちこち見まわしていると、カリンはテーブルの上に並べられた水の入った球状のポッドとラベルの貼られた小瓶の横に籠を置いた。それを見て、向かいの椅子に腰かけたセミロングの黒髪の女性が無邪気な声をあげる。

「わお、すごいわねえ、これ。やっぱりリオもパパに似てモテるのねえ。でも、いくらうちのぷちシェフでも、こんなにくさんじやお返しが大変そうね」

「それなら、クリスマスの時に特大のケーキでも作って持ってきてくれないか。うちのスタッフはイベント好きだから、賑やかで楽しいよ」

「あ、いいわねえ、それ。その時はリヴも連れてこないとね。最近じゃすっかりお留守番も飽きちゃったらしくて、帰るとうるさくてうるさくて。もう、あのしつこさ、誰に似たんだろ」

黒髪の女性――リオナが深々とため息をつく、カリンは美しい顔をゆがめて小さく吹き出した。少女のように瑞々しい笑顔でリオナとレオンを見て「リオもリヴも両親によく似てるよ」と楽しそうに答える。

メルの主治医のカリンはこの施設の中心人物の1人だ。仕事に対する真摯で厳しい態度は美しくも怜悯な顔立ちもあってきつい印象を与えがちだが、本来は情が深く優しい女性だ。その頼もしくさっぱりとした性格からスタッフからは男女問わず慕われている。

対照的に、卒業後に結婚して双子の母となったリオナは、ころころと変わる豊かな表情やのんびりした喋り方もあって、初対面ではまずおっとりとした女性にしか見えない。しかし、この仮面の裏では、卒業してから10年以上経つ今でも学校に伝わっているという

武勇伝のような“伝説”を日々築きあげている。

女傑たちの会話の邪魔にならないようにレオンがそつと椅子をひいて座ると、ふいに機嫌よく喋っていた母がぐるりと首をまわしてこちらを見た。反射的に視線をそらすと、涼やかな群青色の目を一瞬間かせて、わざわざ体を傾けてのぞきこんでくる。心の底まで見透かす視線にレオンはたじろいだ。

「リオ、ママになに隠してるの？」

「……祭りが終わったら退院していいって。父さんたちには後で自分で言うから。あとこれ父さんに渡してくれって」

「あら、そうなの」

手紙を差し出しながらおそろおそろ見上げると、母はにこにこ笑いながら受け取ったが何も言わない。レオンはがっかりして呟いた。

「それだけ？」

「だって、リオったらすごい暗いんだもん。それじゃあ、ママもテンション上がんないじゃない」

「……………悪かったな」

そっぽを向くとふいに上から「ふふふふ」と笑い声がして産みたての卵のような白い両腕がレオンを囲む。ついで、背中と頭に押し付けられた柔らかい感触にレオンは「んなっ」と真っ赤になって固まった。

息子の反応は完全に無視して柔らかい栗色の髪に頬ずりをしながら、リオナはとろけそうな声で言う。

「やくね、冗談に決まってるじゃない。……お帰りなさい、レオン。帰ってきたら、またあなたの料理が食べたいわ」

陽だまりのような優しい声の中に隠された本音が混じっているのに気づいて、思考停止していたレオンはかすかにうなずいた。

すると、それを感じ取った母は悪の魔女のような甲高い笑い声を上げた。畏に気づいて後悔してももう遅い。レオンをがっちりとホールドしたまま、老練な魔女は脳内を縦横無尽に駆け巡る考えをぽんぽんと口にしていく。

「よっしゃあ、約束ゲット！　じゃ、退院するまでにメニューを一生懸命考えておくから、帰ってきたら約束どおり作ってね。材料はママが買ってきてあげるわ。……あ、そういえば、メルはお祭りが終わったらすぐ帰っちゃうのよね。あーあ、寂しくなるわあ。せめて、リオの手料理を食べさせてあげたいんだけどなあ。ね、レナはお祭りには来られるの？」

「できる限り早く来るとは言っていたよ。落ちついたらまた連絡を寄こすそうだ」

「あいつ、やっぱり帰るのか？」

頭上から叩きつけられる言葉にげんなりしていたレオンは驚いて顔を上げた。正面に座ったカリンはレオンと目が合うと諭すように答える。

「ああ。やっと“ゲート”が回復したんだ。“ヒズミ病”は治ったが、今は早く故郷に帰ってゆっくり休む必要がある。……祭りが終わったらおまえと一緒に帰るんだよ、レオン」

「そういえば、そろそろいい時間ね。リオ、ちょっと行って起こしてきてちょうだい」

念を押すようにはっきりと呼ばれた自分の名前に、レオンは視線をそらして軽くうなずいた。やっと開放した母に押されるようにのろのろと立ち上がり、奥の部屋に続くドアを開いた――。

本館の角部屋にあるカリンの仕事部屋は、今はちょうど朝陽が射しこんできて、どこか部屋全体がまどろんでいるような空気が漂っている。女性スタッフたちが気合を入れて飾り付けたという部屋は、絵本に出てくる女の子の部屋のようにかわいらしくて、男のレオンにはまるで異世界にでも来たような気分になる。

目を凝らして部屋を見渡すと、左隅の小さなピンクの花をつけた鉢植えが置かれた出窓の下に丸い塊が落ちていた。

よく見ると、それは巨大なクッションの上で薄茶色の髪をした子どもが、ハムスターよろしく丸まっているのだとわかる。すぐ傍に座り心地のよいソファがあるのに、何で床に寝るのがレオンには理解できない。それでも、いつ見ても寝心地よさそうに見えるのだから不思議だ。

近づくともしゃもしやになった髪に埋もれてピンク色の物体が見えた。レオンはその正体に気づくと大きくため息をついて傍にしゃがんだ。

「モモが潰れて苦しいって言ってるぞ」

「……………リック？」

呼びかけに気づいて半分だけ開いた空色の目は寝ぼけているらしい。レオンが無言でのぞきこむと、メルはぽつと跳ね起きて「きゃっ、レオン」と真っ赤になって叫んだ。レオンは思わず呆れて言った。

「なにが、きゃっ、だよ。だいたい、なんで朝っぱらから寝てるん

だよ」

「レオンが来るのが遅いから眠くなっちゃったの。あ、モモちゃん、ごめん！」

やや早口で言い訳したあと、メルは寝ている間に踏んづけていたピンク色の猫のぬいぐるみ――モモから慌てて降りた。つぶらな黒い目で見上げる丸っこい頭をなでた後、スタッフに作ってもらったフリルのついた白いワンピースのしわを丁寧に直していく。相変わらずの行動にレオンはそっと微笑んだ。

今年11歳になったメルは妖精のように愛らしいが、良くも悪くも無邪気な性格が影響して、1つ年上のレオンから見てもかなり子どもっぽい。

相棒のモモは、レオンが去年の誕生日にプレゼントしたペアのぬいぐるみだ。もう1つを持つレオンの予想以上に気に入った彼女は、わざわざ専用のリュックに入れていつも持ち歩いている。最初のうちはかなり恥ずかしかったが、声をかけてくるスタッフにうれしそうにモモを自慢するメルと一緒にいるうちに、気がつくところの暮らしに自然と馴染んでいた。

元々、落ち込むことの多いレオンは、そんな彼女の持つ不思議な温かさが大好きで、うらやましい。

「ほら、変なところで寝てるから寝ぐせついてるぞ。それに、せっかくの服がしわくしゃになってる」

「あ、ほんとだ。どうしよう、せっかく作ってもらったのに。リオナさんに見つかったらまた怒られちゃう」

「だったら、もっと大事にしろよ。その服、この間母さんにももらったりボンとよく似合ってたし、アウルさんが見たらきっと喜ぶよ」

「パパはどーでもいいのっ！ あーあ、なんとかならないかなあ」

喜んだり怒ったり困ったりころころと表情を変えるメルにレオン

はこっそり吹きだした。メル父子のケンカは本人たちは真剣なのだが、見ているこっちは微笑ましい。

彼女が伸ばしている髪をとかして櫛をしまうと、そこでレオンはここに来たもう1つの用事を思い出した。吹き消されるように楽しい気分が消える。深呼吸すると自分でも気乗りがしない声で喋った。

「……あのさ、おれ、お祭りが終わったら退院することになったんだ。今日、シヴァに言われた」

心配そうに服をチェックしていたメルは大きな空色の目を丸くした。

「そうなんだ。わたしも今日帰っていいって言われたの。お祭りが終わったら、レナが迎えにくるんだって」

「そっか。じゃあ、レナはあんまりゆっくりできないな」

「でも、レオンやシマリス先生やリン先生に会いたいって言ってたから、きつと早くきてくれるよ」

「いや、そこまで会いたくはないんだけど……。あ、これ言うなよ、内緒だぞ」

悪巧みがうれしいのか「うん、秘密ね」とやけに力強くうなずいたメルに軽くなずきながらも、レオンは心に灰色の影が広がっていくのを感じた。

メルは“ゲート”でつながった異世界の人間だ。

彼女の育ての親のレナはレオンの両親と古い友人で、その縁でレオンは4年前から夏と冬にヒマリ島に遊びに行っている。異世界への“ゲート”はここ数年ずっと安定していて、渋る両親をなんとか説得して今年の夏は弟と2人で行こうと決めていた。

だが、2ヶ月前——メルが初めてこちらにやって来た今年の6月の連休、それまでの空白を埋めるように大きな事故が起きてしまっ

た。後で聞いた話によると、入り込んだ魔物<レグルス>たちは“ゲート”の一部を破壊した後、包囲網を突破した1体が避難していた人を――自分たちを襲ったのだという。

あの事故で傷つき、この2ヶ月間1人ぼっちで異世界へ引き止められた彼女のことを思うと、レオンは今でも誘ったことを後悔している。

しかし、“同じヒズミ病”に苦しむ自分の前では彼女は文句も寂しいとも言わず、逆にいつも傍にいて慰めてくれた。だからだろうか、彼女が帰ると聞いたときから、そのことを考えると無性に寂しくなる。

レオンの顔色を読んだようにメルはモモの頭を撫でながら不機嫌に言う。

「ほんととは帰る前にちょっとだけでもレオンの家に行きたかったんだけど、パパがうるさいからまっすぐ帰らないといけないの」

「冬休みにまた遊びに行くよ。父さんと母さんがうるさいから、あんまり長くはいられないかもしれないけど、なんとか粘ってみる」

「わたしもがんばってパパを説得するね。レナはいいって言ってくれると思うけど……」

心底残念そうなメルにこみ上げてくる寂しさを気づかれないように、レオンは口の端を持ち上げて笑って見せる。そこであることを思いつきぽんと手を打つ。

「そうだ、帰る前にアイス食べていこう！ それぐらいは時間ある？」

「うん、混んでるから帰る時間は遅くなるんだって。前に言ってたプリンのお店のアイス？」

「そうそう、たまに母さんがお土産に持ってくる貝殻のお店のやつ。あ、でも、限定品だからうんと早起きしないと。……メル、1人で



ちゃんと起きれるか？」

思わず心配になって問いかけると、メルはにっこりと笑って親指を立てた。

「ばっちグッス！」

「……誰に教わったんだよ、古いぞ、それ」

「ルウ君。ノリノリのときに言うんだって。カイシドさんも大うけしてたよ」

得意げに話すメルと盛大に笑い転げるカイシドの姿が目には浮かんで、レオンは苦笑いを浮かべた。すっかりおなじみとなった光景だが、ちよっぴり胸がちりちりする。

「レナ、きつとびっくりするだろうな。メルは共通語が上手くなったからさ」

「そうかな？ あ、そういえばね、この前いい物が届いたの。見せてあげる」

照れたように笑ったメルは、傍に置いたポシェットから何やら銀色のキーホルダーのようなものを取り出した。

口紅と同じぐらいの大きさの銀色の小瓶は、てっぺんにビー玉の球面を潰したような蓋がついていて、中心には輪留めから伸びた紐がポーチに繋がっている。

メルが蓋を少しだけ外側に引っ張ってレオンの鼻先で小瓶を揺らすと、花のような甘い匂いがふわんと漂った。

「いい香りだな」

どこか懐かしい香りに惹かれて、受け取って深く吸いこんだその

時だった。

視界が溶けた飴のようにぐにやりと歪んだ。驚くレオンの意識を置き去りに目の前が端から白く霞んでいく。

目眩だろうか。しびれたように反応の鈍い手を動かし床についた時、突然白く濁った視界に見慣れた風景がぱっと映った。

主人の気遣いが隅々まで行き届いた居心地のいい居間だ。

真ん中に置かれた小さな丸テーブルには手編みのカバーがかけられ、その上では5人分の赤いハーブティーが入ったティーカップが焼き立てのお菓子を待っている。すると、奥の台所に続くカーテンが揺れて、長い栗色の髪を紐で1つに結んだきれいな女性とメルが両手でパイとクッキーを盛った大皿を抱えて出てきた。

それに気づいて床に敷かれた織物の隅でまどろんでいたまっ白な小鳥が顔を上げ、寄り添っていた黒猫がレオンの方へやってきて――。

「レオン、どうしたの？」

メルの声で波紋が生じたようにふいに幻の風景が大きく揺れた。今度は引き止める間もなく泡のようにあつという間に儚く消え去っていつてしまう。

最後に見えた笑顔で何か話しかけてきたメルの顔が、心配そうに見ている今のメルの顔と重なってレオンはどきりとした。一瞬感じた強い違和感に驚きが息となってかすかに漏れる。

「メル……？」

「レオン、大丈夫？　なんだか、顔色わるいよ」

「あ、大丈夫、だ」

急に痛みを感じて下を見ると、無意識に握り締めた手のひらに小瓶が食い込んでいた。膝立ちになってのぞきこんできたメルに慌て

て謝る。

「ごめん！ その、なんか急にレナのことを思い出して、ぼーっとしちゃって……」

「レナの家……？」

その言葉にメルは怯えた様に大きな瞳を揺らしたが、慌てていたレオンは気づかず急いでバッグからハンカチを取り出して小瓶を磨く。

大事なものを汚してしまった申し訳なさでいっぱいになったレオンに、メルは「大丈夫だよ」とそっと手を押さえて瓶を受け取った。先ほどよりやや静かな声で言う。

「……その香りね、島に咲くコモモの花なんだよ。レオン、おぼえてる？」

「あ、うん、レナがよく家に飾ってた花だよな」

そう言ったメルの目は、光の角度からか今にも雨粒がこぼれ落ちそうな青灰色の空のように見えた。しかし、レオンが戸惑いながら答えるといつものようににこりと笑う。

気のせいだったのだろうか。迷いを浮かべたレオンに、メルはその顔のままと言った。

「これ、レオンにあげる」

「え？」

「レオンにはいっぱいお世話になったから、プレゼント。大事にしてね」

「でも……、いいのか？」

「うん。あのね、コモモの花にはちんせいさようがあるから、不安な時にかぐといいんだって。また夢をみて眠れないときに使ってね。」

……あ、クッション片づけなきゃ」

メルはやや早口で説明するとレオンの右手を掴んで小瓶を握らせた。跳ねるように立ち上がって使っていたクッションを片付け始める。見慣れているはずのその横顔を見てると目の奥がじんと熱く なって、レオンは手のひらの小瓶に視線を落とした。

今の幻はいつものレナの家光景だった。遊びに来たレオンとヴァンに、待っていたレナとメルがお菓子を盛ったお皿を運んでくる。そして、目を覚ました白い小鳥――フィーナがテーブルの上へよじ登るのだ。あの黒猫はよく覚えていないが、フィーナの友だちだろうか。

幻にしては鮮やかな風景だった。夢とは違ってまだ思い出せる。それなのに、なぜだろう。懐かしい記憶のはずなのにひどく悲しい。

まるで、あの夢のように。

その言葉が生生しく浮かび上がったとき、突然鋭い針にこめかみを刺されたような痛みを感じて額を押さえた。

「なんだ……？」

「痛いのか？」

顔を向けるとメルがモモを抱きしめてこちらを見ていた。不安なときの癖だ。レオンは右手を離すと安心させるように強く首を振った。痛みは一瞬だった。

「いや、気のせいだったみたいだ。……これ、ありがとな」

何とか笑顔で言ってレオンはバッグに小瓶をしまった。きつと治療で疲れたのだろう。遊びで紛らわせていても“クレイドル”に入った時は、いつも心のどこかが疲れる。

レオンが立ち上がって手伝おうとすると、メルは「先に戻って」と首を振る。少し迷ったが、レオンは大人しく戻ることにした。

「……ごめんなさい」

残ったメルの傷ついた表情と小さな言葉は、レオンに届かなかった――。

少しだけドアを開けると甘い香りが漂ってきて鼻がむずむずした。幻を見せた香りを思い出すようでなんとなく不愉快になる。

室内にいる2人はそんなレオンに気づかず半分背を向けて、お菓子の籠盛りの前に置いた20センチほどの大きさの映像端末を見ていた。

長方形の枠の中では、メルと自分が庭の大木の下に座って両手いっぱい大きなメロンを食べている写真が映っている。メルはメロンを抱えてよそ行きの笑顔で決めているが、自分はちょうど大口開けてメロンにかぶりついているところを、シオン愛用の一眼レフでばっちり撮られてしまった。

少し前の懐かしい写真だった。でも、これはただ懐かしいだけ。

先ほどの幻が引き起こした痛みは、時間が経つにつれて胸の奥にわだかまり、氷のような重い塊になっていく。あの悲しい夢と同じだった。

肺一杯に息を吸い込んで部屋に入ると、左側に座ったカリンが半分だけ振り向いて「おかえり」と言う。どこからかカイシドの声が聞こえ、ついで向かいに座ったショートカットの黒髪の女性――シオンも振り向いたが、後ろをのぞきこんで首をかしげる。

「おかえり、レオ君。メルまだ寝てる？」

「ううん。起きてクッション片づけてる」

「そうだ、あれも片付けないとね。リン先生、ちょっと失礼しますね」

身軽に立ち上がったシオンは、張りのある声で「入るよ」と声をかけてドアの向こうへ姿を消す。女性にしては高い172センチの彼女が歩く姿は、速さを極めた馬のように美しく律動的でいつ見て

も惚れ惚れする。

シオンはここでは少数の一般学校から来た看護師だ。入った時からその細やかな気遣いや快活な性格からカリンに目をかけられていたらしく、メルはメルの世話をする女性スタッフを探していた時には、カリン自身が看護師長に頼みこんだと聞いている。優しいが少々ぼんやりとしたところがあるカイシドとは、しっかり者の彼女はいいいパートナーだ。

すれ違ったときに見えたブラウスの裾のお手製の飾りボタンは、メルがこの間着ていた服についていた物と同じ飾りだった。島に帰ったらメルは彼女に教えてもらったように自分で作るのだろうか。そんなことを思いながらレオンはシオンが居た隣りに座った。

カリンは相変わらず画面を見ていたが、黙ったままレオンが座ると顔を向けてにっこりと笑いかけてくる。

「ちょうどよかった。今、珍しいお茶を淹れてもらったところなんだ。2人だけじゃ寂しいからリオも付き合ってくれ」

「お待たせしました。熱いから気をつけて飲んでくださいね」

それを待っていたように、ミニキッチンからカイシドがトレイを持ってやってきた。母がいないところを見ると、部屋に押しかけられて逃げ出してきたのだろう。

また転ばないか一瞬不安が過ぎたが、いつものように悠々と歩いてくると、カリンには温かいお茶を注いだマグカップを、自分とレオンには透明な水を浮かべたコップを置く。さつきシヴェルツの診察室で出された薄青色のハーブティーだった。

冷たい液体が喉を通るとさつきと同じく胸の中がずっと透きとおって、強ばっていた体がほぐれていく。一口飲んだカリンはカップを揺らしながら、レオンの隣りに座ったカイシドに物珍しそうに尋ねる。

「薬の材料だと聞いていたから、てっきり生薬のような味がすると思っていたんだけど、案外さっぱりしていておいしいな。元はどんな花なんだ？」

「僕も写真で見たことしかないんですが、水際に咲く青い小さな花でしたよ。アキ君の故郷では、主にリラックス目的で匂い袋やお茶として使われているそうです」

「ああ、こうして香りを嗅ぐだけでも何だかこうほっとする。今度探して買おうかな」

「今はたくさん輸入されていますから簡単に手に入りますよ。特に女性には美容と健康にいいと大好評だそうです。リン先生もこれからも大事な時期ですし、ゆっくり休んで栄養のある物を摂って、お体を大事にしてください」

少々お説教がましく言うカイシドに、カリンは渋い顔をした。

「……嫌味だな。この頃、ますますヴェルに似てきた。そんなに心配されなくても、毎日ここに来てリオとメル顔を見ているれば、お腹の子だって元気になるさ。胎児には母親の機嫌が一番影響するんだからな」

「それは精神面だけの問題でしょう。いくらリン先生の機嫌が良くても、肝心の体を損ねたらどうするんですか。……ほら、レオン君も何か言ってやってくれよ」

「あ、えっと、お腹の赤ちゃんが生まれるの、おれもメルもヴァンもとっても楽しみにしてるから、リンさんには体に気をつけて元気にしてほしい」

ため息混じりにせつつかれて言うと、カリンは柔らかく微笑んでゆったりとしたワンピースに包まれたお腹に手を置いた。その膨らみはよくわからないが、もう半年になる今は大分育っているはずだ。



「こんなに愛されているんだ。世界一丈夫で幸せな子どもを生んでみせるさ」

いくらかふつくらとした顔から紡ぎだされた静かな言葉は、深い愛情と感謝がこもっていた。レオンはその白い顔が眩くなってそつと視線を逸らした。

卒業してすぐ、21歳の若さで親になった両親と自分たちを一番に支えてくれたのは、医者としての道を選んだ親友のカリンとシヴェルツだった。両親の次に好きな人、と言われたら自分もヴァンも真っ先に彼らを上げる。その2人が長い付き合いの果てに3年前に結ばれ、今年待ち望んでいた子どもに恵まれたことは、レオンにとっても大きな喜びだった。

しかし、その矢先に起こった2ヶ月前のあの事件はレオンたちだけではなく“ヒズミ病”の医者である彼らをも容赦なく職務へと駆り立てた。その2人が主治医を引き受けてくれたときから、レオンはうれしく思いながらも、心のどこかで2人に対して申し訳なさを感じていた。

スタッフらに支えられながら仕事を続けてきたカリンは、最後の患者であるメルの治療が終わる9月からようやく産前休暇に入る。その後は、ベテランの助手のイルハたちが協力して彼女が帰るまでやっていくそうだ。

今度こそ、カリンとシヴェルツには幸せになってほしい。

2人が大好きだった。だから――これ以上迷惑をかけたくない。胸の中の氷塊がきしりと嫌な音と痛みをもたらしたがレオンはそれを無視する。すると、カイシドが珍しくまなじりを一直線に引き上げて抗議する。

「だいたい、僕のどこが先生に似ているんですか。言いがかりにしてもひどいですよ」

「そっくりじゃないか。3年前に初めてここにきた時からすいぶん

変わったよ。これで私のところに来てくれていれば、安心して留守ができたんだけどね」

「それこそわがままですよ。リン先生がそう言うたびに、イルハ先輩とシヴェルツ先生にいじめられて迷惑しているんです。もう少し、自分と自分の身内を大事にしてください」

「ははは、それは悪かったね。でも、頼もしい後輩たちがたくさんいてくれて本当に助かったよ。自分がこんなに恵まれているのが信じられないぐらいだ。……帰ってきたら医者じゃなくて、大人しく母親をやってくれとでも説教するか？」

ふと夏葉のような深緑色の目に光を躍らせて意地悪く問いかけたカリンに、カイシドは目を閉じて長い長いため息をついた。細い金色の前髪を掴んで低くうめく。

「……………どうせ誰が言ったって聞かないでしょう。最愛の夫の言うこともつっぱねるんですから。ですが、これだけはお願いします。くれぐれも体は大事にしてください」

「わかったよ。ちゃんと誰かの目の届くところにいるし、みんなの言うことも聞く。……そうそう、この間、イルハに頼んでオリジナルのアロマを作ってもらったんだ」

2人の親しげなやり取りに目を丸くしていたレオンは、カリンが手を伸ばした先に視線を向けた。

先ほど見たテーブルの端に置かれた水の入った球状のポッドだった。上部の蓋には穴が開いていて、そこから香りが出てくるのだろう。周りに並べられた小瓶のラベルには「ラベンダー」「ローズウッド」「オレンジ」など植物や果物の名前が書かれている。

カリンはそこから1つの小瓶を取って、正面の2人の目の前に置く。

「私も詳しくは知らないけど、イルハはゼラニウムにラベンダーをブレンドしてリラックス感を出したと言っていたかな。最近では、毎晩これを使ってから寝ているんだ。おかげで体調はばっちりだ」

「そういえば、さっきメルにアロマをもらったんだ。メルはリンさんにもらったって言ってたけど、これもイルハさんが作ったのか？」

もらった銀色の小瓶を出すと、視線を向けたカリンは笑みを消した。姿勢を正すと長いまつげを少し伏せて逆に尋ねてくる。

「メルは何か言っていたか？」

「え？ うん、レオンにはお世話になったから、プレゼントだったくれたんだ。島に咲くコモモの花をブレンドしたもので、大事にしてほしいって」

何かあるのだろうか。レオンの不安を読み取って、カリンはごまかすように明るい声で言った。

「それは、前にレナが作って送ってきたものを渡したんだ。メルはずいぶん気に入っていたから、大事にしてくれ」

「あ、うん……」

「レオン君、また夢を見たのかい？」

ふいに恐れていた質問がきて、レオンはおそるおそる顔を上げた。テーブルの下で持っていた小瓶を握り締める。

こういう時のカイシドの若草色の目は川のように透きとおっているのに、一切底を見せない。レオンはそれが嫌いだった。

「……ううん。最近をよく眠れてるし、特に変わったこともないから、大丈夫」

「そうか。何かあったら、すぐに言ってくれよ」

まだ心配そうに見ているカイシドから、レオンは目を逸らした。治療を始めてから、レオンはたびたび不思議な夢を見ていた。

懐かしい夢の中で自分はいつも楽しそうで、目覚める直前までは幸せだった。しかし、それは目覚めた途端に掻き消え、代わりに胸を切り裂かれるような激しい悲しみに変わる。

初めのころはわけもわからず泣きじゃくって、カイシドやメルにずいぶん心配されていた。しかし、慣れるにつれてその涙を流す力も尽きて、代わりに心に深い穴を掘って埋めて忘れることで、2人の前でも何とか普通に振舞えるようになった。それが功を奏したのか、最近はその夢は見えていない。今日の幻は完全に不意打ちだった。

この夢は、誰かに言ってもどうにもならない。そう自分に言い聞かせて逃げていた。

すると、気まずい沈黙を破るように小さな音が聞こえた。顔を上げると、カリンはさっき手に取った小瓶を鼻先に近づけている。レオンと目が合うと一瞬目を閉じて小瓶を置き、ゆったりとした声で話し始める。

「こういった香りや音といった五感に訴えるものは、体や精神に影響を与えやすいんだ。一説では、人間が1人1人持つ生命の波動に共鳴するからだといわれている。イルハがアロマを研究し始めたのも、元々はそういったものへの興味からだね。リオは会ったことがないだろうが、最近は香りを治療に取り入れているミルラ先生のところまで学びながら、こういった試作品を作っている」

「……そういえば、リンさんの治療には音を使ってるんだよね」

何が言いたいのだろう。レオンは内心の怯えを出さないように気をつけながらも、それでも彼女から目が離せない。

レオンの硬い声に、カリンは冬の黄昏のようなどこか憂鬱な笑み

を浮かべた。彼女のそんな顔は前にも見た気がする。戸惑いながらも静かに見つめていると彼女は言葉を続けた。

「そう、私はね。……そうして“ヒズミ病”の治療を続けていくと、何かをきっかけに記憶を次々と思い出し始めることがあるんだ。例えば、会話の中で急に昔の思い出が蘇ったり、いつも見ている物に妙に懐かしさを感じたりとね。……リオンが見る夢も、何かきっかけがあって思い出したものだろう」

さっき、メルにもらったアロマを嗅いだら夢とそっくりな幻を見た。言いかけた言葉は途中でふわりと消えてしまう。

ずっと前に、夢のことを話したシヴェルツにも同じことを言われた。そして、それは“ヒズミ病”が治れば終わると。辛いときはいつでも相談しろとも。

しかし、後半の言葉をレオンは無視して、隠すことを選び続けた。きた。

もうすぐこれは終わる。だって、自分は治ったのだから。もう帰れるのだから。だから、このわけのわからない辛い夢を見なくなるはずなのだ。そう言い聞かせていた。さっきまでは。

でも、今はとてもそう思えなかった。心の奥に隠したはずの夢は、レオンが油断した隙について出てきてしまった。壊された“ゲート”から魔物<レグルス>が溢れるように、また沸いてくるのだろうか。今までずっと自分は悲しい夢の正体を突き止める勇気が出せずに、ひたすら黙っていた。それを確かめるのが怖かった。

もし今、2人と、シヴェルツに言ったら、教えてくれるだろうか。それに自分は耐えられるのだろうか。

こらえきれなくなって目を逸らすと、無防備な姿で止まった自分たちの映像を見つめた。カリンは淡々と続ける。

「それが何なのかは、私にはわからない。ただ――」

映像端末の2人は笑顔だった。それを見たカリンがまた寂しげに微笑んだ気がした。

「自分の中に、強く残っている記憶が浮かんでくる。喜んだこと、怒ったこと、悲しかったこと、楽しいこと。自分が大切にしていた、一番思い出したいことを思い出すんだ」

「……それが本当の“ヒズミ病”なのかもしれませんね」

驚いてカイシドを見上げると、彼もまた映像端末に目を向けていた。そのまま宙に言葉を放り出すように続ける。

「過去の記憶を、何の予告もなしにいきなり見せつけられるわけです。でもそれは、所詮幻です。目が覚めれば自分は今の現実において、見えた景色や感触だけは生々しく残っている。……とても、残酷です」

無表情で淡々と連ねられていく言葉の、最後に付け加えられたその一言に本当の彼を見た気がして、レオンは思わずまばたきを止めていた。

気がついたのは、異常を察知したまぶたがぴくりと引きつった動きだった。すると、カイシドが振り返ってわずかに口の端をほころばせた。組んだ腕の右手首にはめた銀色の腕輪がやけにきれいだった。

「僕はそう思うんだけど、シヴェルツ先生は違うって言うんだ」

「……シヴァは、なんて言ってるんだ？」

「夢と同じで、迷っている自分の心の整理を手伝ってくれているんだってさ。過去にこんなことがあって、自分はそうやってこれまで何とかやってきたんだから、これからも頑張ればどうにかなるんだ

って励ましてるんだって、よく言っている」

そう言うときイシドは「まあ、あの人は自分にとって都合のいい記憶しか選んでいないんだろうけど」と、小声で毒吐いて残りのお茶をすすする。

レオンはしばらく澄ました顔のイシドと苦笑したカリンを見ていたが、やがてぼそりと尋ねた。

「ヴァンの作った料理を見たら、物体Xが夢に出てきたりするのかな？」

「可能性は十分あるな。……そんなに心配ならヴェルに都合のいい記憶しか見ない方法とやらを聞いてみたらどうだ？」

カリン、カイシド、シヴェルツ。初めて聞いた3人の考えはまったく違っていた。でも、不思議とどれもあの夢に当てはまるような気がする。

気がつくと胸のなかの冷たい塊は消えていた。呼吸が楽になった気がして息を深く吸うと、手のひらの小瓶が頼もしい感触を伝えてくる。

自分が見ている夢は何なのだろう。大切な思い出だろうか。残酷な幻なのだろうか。過去の自分からの励ましなのだろうか。

悲しい夢への恐怖が消えたわけじゃない。でも、これが何なのか自分で探し出す手がかりをもらえた。いつでも助けると、2人の確かな言葉とともに。

レオンは小瓶をぎゅっと握り締めた。胸が熱い。また夢を見たときに、と。ほんのりと温かくなった大事なお守りは、もう効果を発揮してくれた。

「ううん、いい。自分で考えてみる」

「そうそう。“ヒズミ病”に対する考えを述べよっていうのは、養

成学校の卒業試験に必ず出るから、今のうちに答えを考えておけば有利になるよ」

「こら、余計な悪知恵を付けるんじゃない」

いつもの笑顔に戻ってとんでもないことを吹き込むカイシドに、カリンがすかさずつつこみを入れる。

なるほど、シヴェルツに似ている。レオンは精一杯笑ってうなずいた。小さな声で2人に言う。

「ありがとう」

ふと、カリンが顔を上げて奥の部屋を見ると、最初にシオンが、後ろにメルがくつついて出てきた。

一斉に顔を向けた3人を見ると何を思ったか、シオンが顔を輝かせてぽんっとな手を叩く。

「なんかプチ家族って感じ。お母さんとお兄さんと弟でしょ。これでシヴァ先生がいらっしゃったら、一家団欒ですね」

「いっかだんらん、ってなあに？」

「家族みんなが仲良しこよしってこと。家中に愛と幸せがごっちゃになった謎の明るいエネルギーに満ちあふれてて、みんながにこにこしてるのよ」

「なんか、ブキミだね」

メルが一言で片付けると、シオンも腕を組んで「うーん、言われてみるとそうねえ」と首を傾げる。すると、例によって謎のツボにストライクを決められたカイシドがそっと立ち上がってミニキツチンに行き、シオンもそれに付いて行く。

まだ不思議そうな顔をしたメルが隣りに座ると、レオンはそっと囁いた。



「さっきのお守り、さっそく効いた。サンキュ」  
「良かった」

メルがにつこりと笑うと、カリンがふと呟く。

「これも縁、か」

レオンとメルが揃って顔を向けると、カリンは微笑んで言った。

「人と人が会うのには必ず理由がある、という古い教えだ。こうやって今私たちが出会って仲良くなれたのは、何か見えないつながりがあったかもしれないね」

「リン先生とシマリス先生が結婚したのもエンなの？」

「半分はそうかな。なにせ赤ん坊の時から長い付き合いだからな。今更あいつとの縁と言われても、複雑すぎて私にもわからない」

冷たく言い捨てたカリンに、メルはそれでも愛情を感じ取ったのか、頬を両手で包んでにこーっととろけそうな笑みを浮かべた。

「いいなあ。シマリス先生はリン先生の白馬の王子様なんだ」

「メルももう少し大きくなれば、とびっきりの縁が見つかるよ」

大好きなカリンに褒められて、メルは再びふにゃあんととろけた顔になる。レオンはそれを横目で見ながら、ふと思う。

もし、メルがいなかったら。ここにいる人たちがいなかったら。家族がいなかったら。

どれもなくても、たぶん今の自分はなかっただろう。

そう考えると、何だか心がほわんと温かくなる。メルのまぬけ顔を見て慌てて引き締めたが。

「はい、お待たせ。そういえば、そろそろお昼だね」  
「ごめんね、私もちょっと用事があるの。アキ君と一緒に食べてね」

そういえば、アキが来たのも縁なのだろうか。  
そんなことを思いながら、レオンはテーブルに置かれたコップに  
手を伸ばした――。

お菓子の籠盛りを抱えて館に帰ると、アキたちとふんわりオムライスセットのいい匂いが腹ペコの2人を迎えた。手を洗って席に着き、あいさつもそこそこに3人とも食べることに専念する。

体格のいいアキは見ているこちらも食欲がそえられるいい食べっぷりで、レオンとメルも負けじとお皿を空にしていくな。食べ終わってソファに寄りかかると、食後のコーヒーを飲んでいたアキがしみじみと呟いた。

「ここの料理、どれもうまいよなー。料理担当はクロミちゃんだけ、ぜひ一度ギルドのコックに会ってくんないかね」

「ギルドってなに？」

「どんなお料理があるの？」

ほぼ同時に反応した2人の顔を、アキは笑って交互に見やった。

「ギルドっていうのは、街を管理するお役所に食堂がくつついたでっかい建物だ。毎日人がわんさか来るから、料理の量と種類と早さは抜群で、その分ちよつとだけ大雑把なんだ。2人が見たらきつとびっくりするぞ」

「そんなことないよ。わたし、自分でお魚とか貝とか捕って食べれるもん」

「……おれだって、食べられるよ。たぶん」

元氣一杯に返事をしたメルとは対照的に、レオンの返事は少々自信がない。基本的においしければ何でも食べるが、見慣れない物はなかなか手が付けられない。

メルの返事に、アキは感心したようにうなづく。

「ああ、メルは島に住んでるんだっけ。オレの故郷は山のすぐ傍なんだ。アネルっていう花が名物なんだけど、知ってる？」

「うん、さっきカイシドさんにもらったよ。すっごくおいしかった」「おれも2杯ももらっちゃった。あれってさ、ミントみたいにするっとはするけど、全然きつくなって飲みやすいな」

「そうそう、これがまたお菓子にあうんだ。それに、香りもいいからしばらく水に浸して凍らせるととびきりうまいんだな、これが。」

「……あ、そうだ」

得意げに語っていたアキは、ふと思い出したように立ち上がってそそくさと台所に行くと、両手に1つずつガラスの器を持って帰ってきた。

テーブルに置かれた丸い器には円錐状にシャーベットが盛り付けられて、ところどころに白い果実が散りばめられている。

「お昼のデザートに作ってみたんだ。溶けないうちにどうぞ」

「これってさっき言ってた花を浸した水のシャーベット？」

「あれ、アキの分は？」

メルと顔を見合わせて尋ねるが、アキは笑って首を横に振っただけで答えない。

2人あわせて礼を言って、小さなスプーンでてっぺんの氷と白い果物の欠片をすくって口に入れると、ひんやりとした甘酸っぱさが口いっぱいに広がった。粉雪のように細かく砕かれた氷もあって、果汁の甘みは雪のように口の中にふんわりと広がって溶けていく。いくらでも食べられそうだ。

せっせと氷の山を崩していく2人に、アキは種明かしをするように人差し指を振って説明する。

「塩に漬けておいたライニの実にアネルの水で作った氷を載せて、特製のシロップをかけてみました。これも友だちに教わったんだけど、どう、気に入った？」

「塩！？　でも、全然しょっぱくない、シロップが甘いのかな。すごくおいしい」

レオンが驚くと、メルがスプーンを持ったまま手をびしっと上げて叫ぶ。

「あー、わかった。シオンがスイカにお塩をかけると甘くなるって言ってた。そうでしょ？」

「正解！　汁気の多い果物なら何でもあうらしいよ」

「あ、それもいいな。アキってなんでも知っててすごいな」

レオンも興奮して言うのと、アキは頭をかいて「帰ったら友だちに伝えとくよ」と照れたように呟いた。

個性派揃いのここのスタッフは、みな何かしらの特技を持っている。

例えば、歩く知恵袋のカイシドは異世界を含めた世界地図を暗記しているし、手先の器用なシオンはアクセサリなどの小物作りから服などの大物までお手の物だ。レオンは彼らからそういったことを教わるのが好きだった。料理に詳しいとなればなおさらだ。

のんびりと食べているレオンを置いて、一気に食べつくしたメルはスプーンをくわえてちらちら見ていたが、ふとアキに顔を向けて尋ねた。

「ねえ、アキ。リン先生はアネルの花はお薬につかうって言ったけど、お茶につかっていた葉っぱもお薬になるの？」

「ん、どうした、転んでケガでもしたか？」

「ううん。気になったから」

メルは質問にそれまで流暢に喋っていたアキは戸惑ったように軽く眉をひそめた。しかし、スプーンを止めたレオンと見上げるメルの視線に根負けして困ったように言う。

「うーん、それは普通のものだからなあ。体にはいいけど、病気を治したりする薬にはならないな」

「この花って薬草なのか？」

「特別なものはな。アネル自体は昔からどこの家でも育ててて、お茶とか匂い袋とかに使われてるんだ。環境や育て方によって形とか味ががらっと変わるから、アネルを見ればその家がどういった所かわかる、なーんて言われてるぐらいだ。ちなみに、これはうちのセネちゃんが育てたやつな」

「へええ、なんかアサガオみたいだな」

「アサガオ？」

「あれ、知らない？ 柵がついた植木鉢にからみついて育つラッパみたいな花だよ。たまに色とか形が変わってるものができるんだって、前にじいちゃんが言ってた。今、裏庭でメルが育ててるから、後で見えてきなよ」

「おお、ありがと」

確か、1ヶ月前だっただろうか。父方の祖父が朝顔を送ってきてくれた。

メルは初めて見る花がよほど珍しかったらしく、カイシドにあれこれ聞いたり、朝顔を熱心に観察していた。それに気づいてあげると驚くぐらい喜んで、以来レオンの母に買ってもらったピンク色のゾウさんじょうろを手につせと面倒を見ている。今はちょうど、じょうろと同じ色の花をたくさん付けているはずだ。

後で見に行ってみようかな。最後の一さじを口に放り込んでスプーンごとむぐむぐ動かしていると、メルが真剣な口調で尋ねる。

「アネルって、ここでも育てられるかな？」

「たぶん無理だな。アネルの花は元々山の湖に咲いてたからか、山から流れてくる水でしか育たないんだ。商人たちなら他にもやり方を知ってるんだろうけど、それはギルドの極秘事項だからなあ」

「秘密を知ったら消されるんだ」

「そうそう、おっかねえハンターさんたちが、地の果て、天の果て、見知らぬ異世界の隅々まで追いかけて……って真顔で怖いこと言うなよ、レオン。まあ、そういう人たちって苦労して資格をとった人たちだから、口も結束も硬いんだろ。何か厳しい掟もあるらしいぜ」  
「ふうん、管理局の人たちみたいだな」

何気なく言った言葉にアキは嫌そうに口をひんまげた。昨日の幽霊の話といい、大きな体に似合わず意外と臆病なのかもしれない。

「なに、あの人たちもそういうおっかねえ掟みたいなのがあるのか？」

「うん。管理局の養成学校を卒業した人って、手首に銀色のブレスレットしてるだろ？ あれは自分の持てる力をつくして“ヒズミ”と戦うことを誓う、って証なんだって。特殊な素材で作られてるか、絶対には壊れないんだけど、もし仲間を裏切ったり、やましいことしたらその人に天罰が下るんだって」

「……………」

聞いたのはシヴァだけだ。そう付け加えると、アキは硬直を解いて恨めしげにレオンを見た。知っているはずのメルも横目でレオンをにらんでくる。

「レオンのいじわる」

「なんだよ、メルだって一緒に聞いただろ。それに、シヴァがそれ

らしく言うことなんてどうせ嘘だっ」

「ほんとだよな、こんなに尽くしてる俺とメルをいじめるなんてさ。……そういえば、2人はいつから付き合ってたんだ？」

「4年前にパパの試合で初めて会ったの。それからは毎年島に遊びに来てくれるんだよ」

愛想よく答えたメルに、アキは咳払いをして重々しく言った。

「そっかあ。……まあ、お互い異世界暮らしだといろいろと大変だけど頑張れよ。オレのいとも何年も異世界に行ったままだけど、楽しくやってるみたいだから」

「うん。ありがとう？」

唐突な励ましの言葉にメルはきょとんとしながらも答えたが、その意味を悟って一気に沸騰したレオンはアキをにらみつけた。顔に集まった熱が口から吐き出される。もしそれが固形化したら、目の前で無邪気さを装ってにこにこ笑っているアキは一瞬で溶けてしまっただろう。

「どさくさに紛れてなに变なこと言ってたんだよ！」

「うっわー、顔が真っ赤だぞ、レオン君。まあまあ、ひとまず落ちついたまえ」

「なになに、なんのこと？」

「レオンとメルが大きくなっても今みたいに仲よくしてるとうれしなくなっては・な・し」

「アキ！！」

声まで煮えたぎったレオンの叫びに、アキは「ざまあみやがれ」  
とからからと笑い出す。メルはというと「そんなの、わからないよ」  
と照れるでも喜ぶでもなくそっけなく言って、膝に寄りかかせた



モモの頭を静かに撫でる。それはそれで何となく傷つく。  
ひとしきり笑うと、アキは顔をがばりと上げて言った。

「ま、困ったときはいつでも言ってくれよ。人生の先輩としてサービスしてやるからさ。……んで、お嬢さんにお坊ちゃん、本日は何をお作りしましょうか？ その籠盛り以外で頼むぜ」

アキにうやうやしく頭を下げられて、気をよくしたらしいメルは右手をびしっと上げて高らかに答える。

「わたしはフルーツゼリーが食べたいです！」

「レオンはどうする？」

「……おれもそれでいい」

「じゃあ、これで決まり！ 果物いっぱいあるから、みんなの好きな作ろう。レオンはなにがいい？」

いきなり振られたレオンは戸惑って目をしばたかせた。視線をメルの顔から引っぺがすと、膝に寄りかかったモモの頭が見えた。  
コモモ。メルの誕生日の時期に咲く花の実は、彼女たちの大好物だった。この世界でも春になると母が買ってきてくれる。今はあるだろうか。

少しの間後、モモに視線を固定したまま答える。

「ももがいいな。なんか、それ見てたら食べなくなった」

「おいおい、いくらピンクで丸っこくて名前が果物でって……やばい、オレも桃が食いたくなってきたぜ、おい」

「2人のばか！！ モモチゃんは食べ物じゃないもん」

レオンの言葉にアキまで便乗すると、メルは2人の視線から庇うようにモモを抱きしめた。さっき踏みつぶしておいてよく言う。レ

オンは意地悪く思ったが、アキはキザな悪党よろしくにっと笑ってむくれたメルに尋ねる。

「あははは、ごめんごめん。で、メルは何がいいんだ？」

タイミングは抜群だった。ぐうと言葉に詰まったメルは隙間風のようにか細い声で言った。

「……ももがいい」

「いやあ、俺たち気が合うなあ。じゃ、さっそく作るとしますかね」

アキはまるでそれを予期していたかのように言って、3人分の食器を片付けて立ち上がった――。

――十――

趣味の料理は、元々母を助けようとして始めたことだった。

学校から帰ってきたらまず冷蔵庫の食材をチェックして、レシピを確認して、5時の時報と共に作り出す。特に用事がないときはそれが当たり前だった。

しかし、ここに来てからは、毎日お手伝いロボットのクロミが無限にあるレパートリーの中からごちそうを作ってくれるおかげで、気まぐれにおやつを作るとき以外料理をしていなかった。だからか、こうして久しぶりに台所に立つと心が浮き立った。

パイン、メロン、レモン、スイカ、キウイ、マンゴー、みかん、ぶどう、りんご、さくらんぼ、いちご、梨、桃。

今朝早くに母が買ってきてくれた色とりどりの果物たちの表面に包丁を滑らせ、手際よく刻んで煮込み係のアキに渡しながら、レオ

ンは冷蔵庫とキッチンの間を漂っているメルを叱った。

「こら、そんなところろろしてると邪魔だ」

「じゃあ、わたしもそれ手伝うー」

「絶対だめだ。いいから、あっち行つてろ」

何回目かの注意をするとメルはぷーっと頬を膨らませた。一応エプロンはしているが、彼女の仕事はゼラチンと果物を型に入れて冷蔵庫に持っていく運搬係だ。

彼女の育ての親のレナはまめな人で、毎日お手製のおやつをメルにふるまっている。それが仇となって、食いしん坊専門になってしまったメルは料理が苦手だ。

手馴れたレオンにすれば見ていて冷や冷やするし、何より怪我でもされたら困る。

「ちょっと暑いけど、こっちやってみるか？」

アキが呼ぶとメルは元気よく返事をして行ってしまう。それはそれで何となく嫌だが、薄さの限界にチャレンジしていたりんごの皮を危うく切りそうになって慌てて集中する。

ひよろりとした薄皮を剥ぐと実を角形に切っていく。ついでに、1つだけ残しておいたりんごでメル用のうさぎを作っていると、ふと足元から聞き覚えのある鳴き声が聞こえた。

手を止めて右を向くと、昨日の黒猫が相変わらずさぼさの尾を振ってこちらを見上げていた。開けてあるガラス戸から勝手に入ってきたらしい。ずいぶん人懐っこい猫だ。

「おまえ、また来たのか」

うさぎりんごを置いたレオンが近づいてしゃがむと、今日は逃げ

ずに逆に鼻面を手にかけてくる。ひくひく動く鼻の周りの黒毛は艶やかで、思わず頭を撫でようとしてレオンは慌てて手を引っ込めた。いくら手を洗うとはいえ食材を扱っている今はまずい。

すると、猫は不満そうに「にゃ」と鳴いて尾を床に叩きつけた。人間でいうなら足を蹴飛ばしたとか、そんな不満を表す行動だ。何となくそれが弟のヴァンで再生されて、レオンはくすりと笑った。倒れないぎりぎりまで前かがみになると、耳をぴんと立てた猫にささやく。

「うさぎのりんご、食べる？」

「みゃあん」

うってかわって甘えるような声で返事をした猫に、レオンは「ちよつと待ってな」と声をかけて立ち上がった。

鍋の前で何事か話し合っている2人の後ろを通って食器棚から小皿を出すと、メルが不思議そうに言う。

「お皿なら出したよ」

「うん、お客さんが来てるんだ。りんご1つもらうよ」

「お客さん？」

メルは首を伸ばして見たが、猫はいなくなっていた。

急いでうさぎりんごを皿に入れて食堂を見まわすと、テラスの階段からひよっこり顔をのぞかせた。レオンに気づくと軽やかに走ってきて、前足を揃えてちょこんと座る。

無邪気なまなざしに笑いを誘われて、レオンはしゃがんで皿を置いた。しかし、食べようとしないので「どうぞ」と言うと、まるで礼を言うように愛想よく鳴いて食べ始める。

「ずいぶん行儀がいいんだな」

2年前にやってきた犬のシヨコは、元々大人しいし一通りのしつけはしてあるが、それと比べてもこの猫は妙に人間に慣れている気がした。犬と猫の違いなんだろうか。もしかしたら、誰かの飼い猫なのかもしれない。

黒猫は食べ終わると皿をきれいに舐めてレオンを見上げた。相変わらずぼさぼさのしっぽは、今や扇よろしく最大限に広がっている。彼もしくは彼女なりの精一杯の感謝だろうか。

「今、ゼリーを作ってるんだ。母さんがたくさん果物を買ってきてくれたから、みんなの好きな物を作ってるんだけど……、おまえは、なにが好きなんだ？」

「にゃう」

黒猫が小さく首を傾げるのを見てレオンは罰が悪くなった。相手は猫なんだから喋れるはずがない。

すると、黒猫は右足を上げて皿をちよんとつついた。レオンを見上げてもう一度叩く。レオンはじつと見つめて考えていたが、藍色の目と視線が合ってぼそりと呟いた。

「えっと……、りんご？」

「にゃーん」

しっぽをぶんぶん振っているところを見ると当たりらしい。何だか本当に会話をしているみたいだ。レオンは笑ってうなずいた。

「わかったよ。じゃあさ、また明日ここに来いよ。うさぎりんご用意して待ってるから。……あ、でも、玄関開いてないよな」

レオンは少し考えて、ガラス戸に気づいて言った。

「そうだ。朝だったら、カイシドっていう金髪をしっぽみたいに結んでる男の人がいるから、そのガラスを叩けばいい。そしたら、たぶん開けてくれるから」

「にゃっ」

通じたかどうかはわからないが、誰よりも早起きでついでに大の猫好きのカイシドだったら、頼んでおけば喜んで入れてくれるだろう。

黒猫が威勢よく鳴くとメルと呼ぶ声がした。すると、黒猫はお別れだとはかりに頭を軽く上下に振ると、開け放たれたガラス戸からさっさと出て行ってしまった。

森に消えるまで見送ってから戻って手と皿を洗うと、メルとアキが待っていた。

「お客さんって、だれ？」

「昨日の黒猫だった。うさぎりんごあげたら、おいしそうに食べたよ。また明日来るってさ」

「……………また来たんだ」

「レオン、目の準備はいいか？ コーヒー入れるぞ」

レオンの返事を聞くと、メルは小さく呟く。すると、彼女の言葉が終わるのを待っていたように、アキがコーヒーを抽出したカップを持ち上げる。見ると、コップにはもうミルクと氷、ストローが入っていた。

「あ、ごめん。お願いします」

「よし、しかと見届けよ」

変な掛け声と共にアキはストローを固定して、そっとコーヒーを

伝わらせていく。

2色のコーヒーができあがる頃には、レオンはすっかりメルに何を聞こうとしたのか忘れていた――。

頭上に広がる空は雲1つない晴天だった。遠くに見える隣りの島から渡ってきた風は優しく、海もそれに合わせたように静まり返っている。

1人用の卵形のサイドボードには、波がぶつかる振動や水を突っ切る感触が体中に伝わってくる。手を伸ばして透きとおった海面に触れると、連結器でつながった流線型のボートから注意が飛んでくる。

「あまり顔を出すな。好奇心旺盛なレイスに引きずりこまれるぞ」

その声に答えるようにすぐ近くで水しぶきが上がる。とっさに腕を上げて顔をかばうと、派手にしずくを撒き散らしながら小柄なイルカが飛び出してきた。レオンと目が合うと甲高く鳴いて離れたところに優雅に着水する。

「あいつ、さっきからずっとおれたちのこと付けてきてない？」

「異世界から来た客人が珍しいんだろう。あの子は島の子どもたちと仲がいいんだ。特に、メルがお気に入りだ」

すると、どこかで聞いていたのか声が返ってきた。島の周辺のレイスは人に慣れていると聞いたが、友達になれるとは思わなかった。

「じゃあ、おれたちも仲良くなれるかな？」

「お互いにその意思があればな。だいたい、レオンもヴァンも最初は怖がってオレに寄ってこなかったじゃないか」

ヴァンの質問に、後部座席に座っているルアは大きく口を開けて



笑ってみせた。2人は顔を見合わせると、意地悪な彼にぺろりと舌を出した。

ルアの口から見える小さくも鋭い歯は魚を捕食する鮫のようだ。初めはそのウーパールーパーのような独特の姿もあって怖かったが、今では丸みを帯びた三角形の顔も今にもこぼれ落ちそうな丸い青い目も、とても優しいとわかっている。

ふと彼がドレスの裾のように広がった青銀の長い尾を持ち上げると、それがあつた場所にイルカの影がすばやくよぎった。スピードを落としたボードの周りをくると回っている。

ルアは頭の青銀のヒレをざわめかせると、操縦桿を握る橙色の髪の毛の相棒に尋ねた。

「アウル、たまにはハンデをくれてやるか？」

「もちろん、いつでも歓迎ッスよ。おまえたちはどうする？」

「え、なにすんの。島まで競争とか？」

ヴァンの質問に、ルアの代わりにイルカが顔を見せてケケツと甲高く鳴いた。ついでに、後ろから派手に水しぶきが飛んでくる。どうやらからかわれているらしい。

ずぶ濡れになった2人は顔を見合わせて、空色の目を細めてにやにや笑っているアウルに言った。

「「受けてたってやる」」

「よし、陽があるうちは存分に狩りを楽しめ、だ。全力で遊ぼうじゃないか」

ルアが口癖の謎のことわざで答えると、静かだった海面がさざめいた。

海面に一定の間隔を置いて大きな気泡が2つずつ浮かび、それが時折曲がりながら浜辺から伸びた栈橋へと伸びていく。目を凝らす

と、緑がかった海中にはさっきのイルカの仲間らしき影が大勢見えた。レイスたちが使う魔法だろう。

「ここを通って先に栈橋に着いたほうが勝ちだ。ぶっとばすから、振り落とされないようにしっかりと掴まってるよ!」

アウル注意到に2人がバーを掴むと、レオンの隣にさっきのイルカがひよつこりと顔を出した。尾ひれで海面を叩いてみせたので返事のつもりで軽く手を振るとふいにボートが急発進した。濡れた髪から雫が吹き飛ばされ、勢いで頭を背もたれにぶつける。

幸い、体は固定されていたので外に放り投げられはしなかったが予想以上の速さと乱暴さだ。レオンは諦めてシートに頭を置いた。ヴァンもそうしている。

「カーブで引き離すぞ!」  
「わかった」

ハンドルを操るアウルにエンジンを担当するルアが短く答える。ほっそりした体が淡く光って動力に魔力を注ぎ込むと、機体全体がふわりと持ち上がったような浮遊感に覆われる。切り裂かれる水の速さが格段に増していく。

そのままの勢いで右カーブに向かって鋭く突っ込んでいくと、機体が傾きレオンの眼前すれすれまで気泡と水面が迫ってきた。少しでも動けばぶつかる。そう気づいていつもなら美しい海中の景色に背中が寒くなる。

イルカはどこにいるのだろう。そんなことを思うと、思い切り引き戻されて頭をシートにぶつける。最後の直線に入るとボートの周りで風と水が渦巻き、白い砂浜と栈橋がぐんぐん迫ってくる。もうすぐゴールなのに一段と速度を上げている。これが勝負なんだ。そう気づいて体中がざわりと泡立つ。――やっぱり、メル父さんは

すごい。

「メルううー！　パパが帰ったよおおおおお！」

「危ないぞ」

愛娘を見つけたアウル絶叫とルアの呆れた声とともにボートが  
栈橋に突っ込んでいく。

さっきの爽快感は消えて、このままぶつかるといけないかと冷たい汗が流れたが、さすがベテランらしく最後は減速してやや乱暴に  
停船した。

運転手のアウルはすばやくブレーキをかけると、勝負を放り出して  
浜辺に飛び出す。

「痛てて……。あちこちぶつけちゃった」

「でも、おれたちの勝ちみたいだぜ。ほら」

あちこちにぶつけた頭を押さえながら栈橋に降りると、イルカは  
カーブを曲がりきったところだった。浜辺にいる娘に襲い掛かるア  
ウルを見ると、スピードを落として水面付近をゆったりと泳いでく  
る。

栈橋に着くと顔を出して服から水気を飛ばすレオンとヴァンに鼻  
面を寄せてきた。しゃがむと目を細めて何か喋る。ルアが通訳して  
くれた。

「みんな、おまえたちが気に入ったそうだ」

「ほんと！？　じゃあ、1つ聞いていい？」

ふとレオンが顔を上げると、沖合いには仲間だろうたくさんのイ  
ルカたちが顔をのぞかせていた。思わずぽかんと口を開けるとヴァ  
ンはにこにこしながら言った。

「この辺に古い遺跡って、ある？」

――十――十――

「……で、レイスたちにもわからなかったってわけね」

4人分のリゾットをよそってお玉を鍋に戻すと、レナは振り返って水色の目を細めて言った。両手にトレーを持ってやってくるテーブルの上に料理を並べていく。

エビと貝のリゾットと根菜と卵のサラダ、それにからりと揚げられおろしが添えられた白身魚。いい匂いに丸テーブルに座った4人の子どもたちのお腹が大きな音を立てて鳴る。レナは腰に手を当てて笑った。

「たくさん食べてちょうだい。やけどしないように気をつけてね」

「「「「いただきますーす」」」」

一斉にあいさつするとそれぞれ好きなものから食べ始めた。レナが干しぶどうを入れたパンと自分の分の料理を持ってくると、台所に一番近い席の前に布を広げて座った小鳥――フィーナが、白い尾をぱたぱた動かしてせわしく鳴く。

その席に座って小皿にフィーナの分をよそってやりながら、レナは元氣のないヴァンに話しかけた。

「悪いけど、私もこの辺にまだ見つからない古代の遺跡が沈んでるなんて話は聞いたことないわ。島のレイスたちも知らないなら、確実でしょうね」

「でも、おれちゃんと聞いたんだぜ。それに、古代文明って大昔に全部まとめて海に沈んじゃったんだろ？　人が行けない深いところにまだありそうじゃん」

ややむきになって言い返したヴァンに、レナは苦笑して手を振った。

「ええ。確かに、カナサ島とコレン島の周りには観光用の遺跡があるし、ミナモ島には水上神殿もある。でも、他はほとんどがぼろぼろになった廃墟だし、ヴァンの期待してるようなお宝なんて、とっくに壊れてなくなってるわよ」

「あーあ、みんなそう言うんだ。海に住んでるんだから、レイスたちなら知ってると思ったんだけどなあ」

好奇心旺盛なヴァンは、ここに来るといつも島民のメルを案内人にしてあちこち“冒険”するのが日課だった。

ヒマリ島は浜辺から山に沿って作られた村が大部分を占めている平和な島だ。探検といっても、レナの家がある頂上付近の森や、行き止まりの断崖の下にある小さな浜辺、それにいくつかある海辺の洞窟を駆け回るぐらいで、2日もあればすべて回れてしまう。

それにも飽きたのか、今回は深い海の底に沈んでいるという“謎の遺跡”探しに精を出していた。

しかし、島の住人たちや、島一番の物知りのレナや海に住むレイスたちにも否定されて、元気の塊のような彼もさすがに自信をなくしてきたらしい。

「でも、遺跡って人がつかっていた建物の名残なんでしょう。レイスたちにとってはいい場所だし、人にはそう簡単に教えたくないんじゃないかな」

食べる手を止めて落ち込んだヴァンを励ますように、おっとりとした声が言う。

声の主は、メル of 右隣りに座った黒髪の大人しそうな少年だった。1年前に島の外からやってきたらしく、メルとよく一緒にいる弟分だ。

「そうかなあ……」

「フィーちゃんも知らないんだよね？」

メルがのぞきこむと、ぶどうパンにがついていたフィーナは短い首を傾げる。レオンたちから見るとかわいらしい小鳥だが、こう見えて島のレースたちに敬われているらしい。その彼女も知らないとなればデマだったのだろう。

メルは籠から1つパンをもらうと、半分にちぎってフィーナのお皿に置いた。もう半分は自分が食べる。

「知らないって」

「あーあ、レナもフィーナも知らないんじゃないじゃお手上げだな」

ヴァンはそう言うに残ったリゾットを勢いよくかっこみ始める。下手に口を出すとうるさいので黙っていたレオンもその言葉にぼそりと呟く。

「遺跡じゃなくて海底洞窟だったら、レースのコースになったのにな」

「そういえば、初めてのドライブは楽しかった？」

正面に座ったレナに微笑みかけられて、レオンははにかんだ笑みを浮かべた。レースの興奮だけではないのはご愛嬌だ。

「すっごく楽しかった。アウルさんとルアはほんとに息がぴったりなんだな」

メルのパパ・アウルは、この世界で人気のトライアド・レースのトップ選手だ。

レースは、“ヴィート”と呼ばれる2人乗りの機体に人間とそのパートナーのレクスが乗り込み、空・海・地の3つのフィールドを駆け抜けるものだ。その成り立ちから、操縦者と動力や機体を管理するレクエスの連携力が一番問われるといわれている。

レオンたちと同じ年齢の頃からレースに参加し、海フィールドのトップ選手として活躍するアウルは、故郷のヒマリ島だけでなくこの世界の子どもたち全員のあこがれの人だ。もちろん、異世界のレオンも。

今日は、観光用の普通のボートでの短いドライブだったが、ひよんなことでその片鱗を体感できてうれしかった。

しかし、初めての体験に興奮するレオンとは裏腹に、1人娘のメルは手厳しい。

「パパは腕はいいけどすぐ暴走するから、ルアがいつもとめるはめになって大変なんだよ。今日だってつっこんでくるし……。ルア、そのうちはげるって心配してた」

その暴走の一番の原因の心底うんざりした声に、レナをのぞいた3人は一斉に吹き出した。メルがじろりとにらみつけると、一番笑っていたヴァンが苦しい息で言う。

「だ、だってさ、ルアの頭って、魚だろ。なにがどうはげるんだよ？」

「うろこが薄くなっちゃうとか、ヒレがぱさぱさになるかもとか、とにかく大変なんだから。苦労がつもりにつもって、一気に100

歳は老けたってこのあいだ言ってた」

「それなら大丈夫だよ。ルアはレクスだから、きっと治癒の魔法であつという間に治しちゃうよ」

「そうかなあ？」

心配そうなメルに、レナも軽い口調で言う。

「ルアはアウルの子割れなんだから、あいつが元気なら大丈夫よ。なんていったって、レクスは心の鏡、もう1人の自分なんだから」

いつものセリフにメルは半分だけ納得したようにうなづく。レオンは他の2人と顔を見合わせてにやりと笑った。おなじみの反応だ。この世界の人間はみな、パートナーとなるレイスとともに生まれてくる。

彼らは“レクス”と呼ばれ、この世界に存在する動物の姿をとって人と共に生きていく。トライアド・レースは彼らとの深い絆から生まれたものの1つだ。

人よりもずっと長い時を生きているレナは、レクスのことを魂を分けあつた半身だと呼んでいた。しかし、大人の両手ほどしかない小さな体の数倍は食べるフィーナを見て、彼女が賢者として名高いレナのレクスだと最初からわかる人は残念ながらほとんどいない。

ふくれたメルににらまれて、レオンは笑いを引っこめて聞いた。

「メルもアウルさんみたいに選手になるのか？」

「え、わたし？」

メルはびっくりしたように大きな空色の目をぱちくりさせたが、ふいと顔をそむけると言い捨てた。



「やだ。ぜったい選手にだけはならない」

「メルは島を出たいんだって」

黒髪の少年はまだ続けたそうだったが、メルに憤怒のこもった目でにらまれて慌てて口をつぐんだ。育ての親のレナを見ると彼女は知っていたのか澄ました顔でお茶を飲んでいる。

そこで会話が途切れて場の空気がよどむと、罰の悪そうな顔をしていた少年が口を開いた。

「あ、そういえばさ、ヴァンはなんで遺跡を探してるの？」

「えー、前に説明してやっただろ！ もう忘れちゃったのかよ」

「聞いた気がするけど忘れちゃったんだ。ごめん、もう一度教えてください」

少年の素直な謝罪に気を良くしたのか、あっさりとヴァンはうなずいた。自分でも自慢なのだろう。語られる言葉は熱を帯びていた。

「おれが遺跡を探すのは――」

――十――十――

日付が変わって少し経った頃、月明かりに照らされた廊下から小さな物音がした。

音の発生場所は5つ並んだドアの一番奥だった。小さな手の主はドアを細く開けて通り抜けると慎重に閉めた。

隣の部屋にはさっき寝静まったばかりの住人がいる。もし、起こしてしまったらまた一晩中付きそわせてしまうだろう。それはどうしても避けたかった。

ぎこちない体に活を入れると、底の薄いサンダルを踵から下ろすようにして少しずつホールへと続くドアへ進む。いつもの倍は時間をかけてホールのドアにたどり着くと、念のため耳を当てていないことを確かめてから中に滑り込む。

頑丈なドアに背を当てるとようやく一息つけた。あとは、階段を下りて1階に下りるだけだ。ドキドキと脈打つ心臓を静めようと深呼吸を繰り返していた、何回目かだった。

———ル

「——っ」

声が聞こえた。

とっさに口を押さえても、確かに聞こえた証拠に息が漏れる。それをきっかけに閉ざそうとした耳が勝手に声を探してしまう。

逃げそうになる心を押さえつけて顔を動かす。

左手のバルコニーから射しこむ明かりは、ホールの半分のところでくつきりと境界線を作っていた。薄暗い闇の中、すぐ傍に声の主がいてこちらを見ている。そう思うと、姿が浮かんできてたまらなくなる。

「——なの？」

———メル

小さく名前を呼ぶと確かに声が返ってくる。やっぱりあの子だ。じんとしびれた心にそれが染み渡るとまぶたが熱くなる。

思わずそちらへと1歩踏み出したその時だった。ずきん。

錆びた釘で足の裏を貫かれたような痛みが走った。小さく声を上

げると膝から力が抜けて無様に床に倒れる。自分のものとも思えない鈍い音がして、遅れて痛みが襲ってくる。

それに触発されたように体中に痛みが弾けた。

「痛い……」

うめいて足を抱え込む。そこから全身に深く鋭い釘を打ち込まれたように痛みが走っていく。

「痛いよ、痛い……」

それ以上に胸をきりきりと削られていく痛みと苦しさに涙がこぼれる。それをなだめるように体がぎゅうと丸める。

あの子はまだ苦しんでいるんだ。痛がつている。それなのに、わたしは――。

「――っ、ごめん、なさい。ごめ、んなさい。ごめ……」

痛くて、苦しくて、何よりも寂しくて――。

姿を見せない相手はどんな顔をして自分を見ているのだろう。ただただ、逃げるために謝る自分をどう思っているんだろう。

ふいに痛みと圧迫感がなくなった。こぼれた涙があごに伝わりそれだけがさっきの苦痛と悲しみを思い出させる。のろのろと起き上がると気配がなくなっていた。

すると、階段から足音が聞こえてきて身をすくめる。

慌てて這って逃げようとする、足音の主はすばやく近づいてきて「メルちゃん」と低く抑えた声で呼びかけてくる。

「カイシドさん……」

「何だか胸騒ぎがしたんだ。僕の勘はいつも悪い方にだけ当たるん

だよ」

困ったように笑うとカイシドはメルの手を掴んで起こしてくれる。髪をほどこしているところを見ると寝るところだったのだろう。うつむいて謝るとハンカチを渡される。

「下でアネルのお茶でも飲もう」

何も聞かずにただ優しく促されて、メルは礼を言ってハンカチでこぼれる涙を押さえた。

まぶたをこすると目が腫れる。そう教えてくれたのもこの人だった。そう思うとまた新しい涙が出てきて自分が嫌になる。

気づいたカイシドはメルを肩を抱いて静かに階段へと向かう。降りる前にそっと振り返ったが声の主はいなかった。

落胆と安堵を抱えてメルが階段を下りていくと、メルが出てきたドアの反対側から長身の黒髪の男性が出てきた。長い足をすばやく動かして足音1つ立てずに階段に行くと、そこに佇む彼に呼びかける。

「寝るぞ」

彼が返事をしないと男性は困ったように頭をかいしたが、すつとかがんでささやく。

「まだ早いんだよ、たぶん。でも、まだ2週間もある。どうにかなるさ」

一言だけ言うとはやく踵を返して立ち去る。彼はしばらく立ち止まって虚ろな藍色の目をさまよわせていたが、やがて男性が開けておいたドアの向こうに姿を消した――。

ざっと目を通して確認を終えると、レオンはペンを挟んで日記帳を閉じた。

帽子を被ったひよこのキャラクターがプリントされた日記帳は、シヴェルツに押し付けられたものだ。頑なに夢のことを話すのを拒むレオンに、ある日「簡単でいいから夢の内容を書いておけ」と、ご丁寧と同じキャラ物のシャープペンと消しゴムもセットで渡してきた。

どう見ても女の子向けのこれらは彼なりの嫌がらせだろう。しかし、これ以上わがままを言うわけにもいかず、嫌々ながら毎回きちんと書いている。それに、書いているうちに不思議と荒れた心が落ちつく。

机の奥に日記帳をしまうと洗面所で顔を洗う。鏡に映る自分は眠たそうで、どんよりした心の中までは出ていない。念入りに表情をチェックすると、手早く身支度を整えて部屋を出た。いつもより起きるのが30分早いせいか、見慣れた館内は妙によそよそしい。

足早に1階に下りて右の細い廊下を突き進んで食堂へ行くと、開け放たれたドアの前で黒猫が座っていた。前足で顔を撫でていたが、レオンに気がつくと「ふにゃあん」と鳴く。その愛らしさに暗い顔をしていたレオンも顔をほころばせた。

「おはよう。早起きだな」

しゃがむと猫は頭をすりよせてきた。手のひらで触れると短い毛がさらさらと滑っていく。この毛並みのよさを見るとやはり誰かの飼い猫なのだろう。

一通り撫でられるとふいと身を翻して食堂へ入っていく。付いて行くとガラス戸に一番近いソファにカイシドとアキが座っていた。

テーブルの上にはゲームボードが置かれている。黒猫はどれにも興味を見せず、空いたソファに飛び乗って丸くなる。

「おはよう。猫、入れてくれてありがとう」

「ああ、おはよう。起きたらもう来ていてびっくりしたよ。よっぽど楽しmiraしいね」

「うおおはよう、レオン、頼むから話しかけないでくれっ！俺の運命がかかってるんだよ」

「大げさだねえ」

余裕たっぷりのカイシドと目をぎらつかせて唸るアキに肩をすくめて、レオンは台所に向かった。

カウンターに置かれたまな板には刻まれた野菜が山と積まれ、焼きあがったパンとスーパのいい匂いが漂ってくる。奥の冷蔵庫行くと小柄な家事ロボット——クロミがいた。

「おはよう、クロミさん。邪魔してごめん。りんご、もらっていい？」

「レオンさん、おはようゴザイマス。お客様のコトはカイシド先生から聞いてイマス。ドウゾ」

「ありがとう」

無駄のない動きで朝ごはんを作っていくクロミの邪魔にならないように、片隅で取ってもらったりんごを8等分に切ってウサギの形に整える。忙しいクロミに礼を言っ小皿を持って戻ると、アキはイカよろしく背もたれに倒れていた。どうやら負けたらしい。

2つずつりんごを載せた小皿を渡すと、レオンも残りのソファに座ってりんごをかじりながら、結果が表示された立体映像を覗き込んだ。

「カイシドの圧勝だな」

「いや、そうでもないよ。連携がうまいから、勝てると思って油断していたら一斉に反撃されて、けっこう手こずった」

「ふうん。アキってピンチに強いタイプなんだ」

「このゲーム性格が出るからね。アキ君は粘り強くて、レオン君は慎重で仲間思いってところかな」

2人がやっているシミュレーションゲームは一番古い型のもので、駒とマップは5種類だけだ。ルールも“相手のリーダー駒を探し出して倒す”というシンプルなもので、初心者でもとっつきやすい。

レオンの両親の学生時代からあるシリーズ物だが、その手軽さからか施設内ではこの型が一番人気がある。レオンも最新版を持っているが、これはこれでおもしろいので、時々カイシドと対戦している。

2人の批評に、大口開けてりんごをほおばったアキはため息をつく。

「あーあ、これで2日連続10連敗。もう俺、カイシドさんには勝てる気がしないわ」

「しょうがないよ。カイシドは何年もやってるんだし、誰にでも手加減しないし」

「おや、ひどいな。僕はいつも正々堂々と戦っているよ」

「だって、初心者相手にわざとリーダーを囚にして、まとまったところを遠くから魔術師で一掃するなんて、けっこうひどいよ」

「これも作戦だよ。それにこの爽快感がやみつきで、なかなかやめられなくてね」

わざと黒い笑みを浮かべたカイシドに、レオンもつられてくすりと笑った。ああ言ったが、様々なやり方で戦うカイシドは楽しい相手だ。聞いたことはないが、施設内でたまにやっている大会ではき

つと上位者なのだろう。

りんごを食べ終わった黒猫が寄ってきたので膝に載せる。柔らかい首の下をかいていると、アキはせこい商人のように小指を立てて言った。

「で、これの方は、今年採れるアネルでいいんですよね？」

「うん。できれば、12月の……そうだな、半ばぐらいまでには届けてほしい。だめだったら、そちらの都合がつく頃に頼むよ」

「了解。今日、ギルドの方に直接発注かけるから、希望通りの日に届けますよ」

「あれ、そんなに気にいったの？」

「リン先生にお祝いに差し上げようかと思っているんだ。日持ちするから、家でもゆっくり飲めるかと思ってさ」

その言葉に昨日の2人の親しげなやり取りを思い出して、レオンは不思議に思った。

礼儀正しいカイシドは特に女性はきちんと名前で呼ぶ。愛称を使うのはカリンぐらいだ。この気遣いといい、いったいどういう関係なのだろう。

しかし、個人的なことを聞くのも気が引けて考え込んでいると、ふいにアキが大あくびをした。

「ふあああつ。あー、眠い。レオンは眠れた？」

「……あ、うん」

いきなりの質問に少し間が空いたが、気分がゆるみきったアキは膝の上でまどろんでいる黒猫を見てうらやましそうに言う。

「いいなあ、若いつて。俺、たまに起きるとなかなか寝つけなくてさ。しょうがないからバルコニーで空見てたんだけど、それでも眠



れないからしばらく踊ってた」

「いや、なんでそうなるんだよ」

「夜は響くから、なるべく静かに頼むよ」

アキの謎の行動に呆れると、これまたカイシドがどこか見当のずれたことを言う。

見回りを担当しているクロミツは夜中に1人で踊っている男を見て何を思ったのだろう。それとも、あの能気な性格だから一緒に踊っていたかもしれない。

体をほぐすアキにつられて肩をほぐすと、首から頭がずきりと痛んだ。思わず顔をしかめてさするとカイシドが心配そうに見やる。

「寝違えでもした？」

「ううん。……今日、ヴィートに乗った夢を見たんだ。それで、体を動かしたのかもしれない」

今日見た夢は、ヒマリ島での思い出だった。

メルのパウチ——アウルに頼んで海のドライブに連れて行ってもらい、イルカの友だちができたこと。その後レナの家でみんなと昼食を食べながら話したこと。

夢の中の自分はずっとはしゃいでいたのに、起きた時には浜辺の砂のように消えてしまい、代わりにどっと涙が溢れてきた。

この2ヶ月間、特に最初は毎日見ていたこともあっていい加減慣れたと思っていたが、久しぶりに見た夢は昨日の幻のこともあって胸にこたえた。こうしてカイシドとアキと冗談を言い合っていないければ、朝から物思いにふけてメルに心配されていただろう。

遠まわしに言ったつもりだが、鋭く察したカイシドは口元を引き結んで何ともいえない表情になる。一方、アキは普通に受け取って興味を惹かれたように身を乗り出す。

「ヴィートって、もしかしてトライアド・レースのこと？」

「……あ、うん。メルのお父さんが海フィールドの選手なんだ。島に行ったときに、ドライブに連れて行ってもらったんだ」

「あー、いいなあ。俺もやってみたんだけど、レクエスがないとダメなんだってな。その人、レイスとレクエスは違うって言うってたけど、何が違うんだ？」

アキの疑問にレオンも答えられずに黙る。レナはよくレクエスは人間の片割れだと言っていたが、その違いはレオンにはうまく説明できそうにない。それにしても、アキがトライアド・レースのことを知っているなんて、意外だ。

と、なにかふわふわしたものが手に当たって下を見ると、目を閉じた猫が小さな三角の耳をぴくぴく動かしていた。うるさいのかもしれない。頭を撫でると、驚いたことにカイシドが口を開いた。

「レイスは世界を作る“レイ”が集まってできた世界の欠片だ。人と違って魔法を使えるレクエスは、確かにレイスに似ているけれど、あるところが決定的に違う」

そこでカイシドは言葉を区切り、一呼吸置いて慎重に言った。

「彼らは、人の魂から分かれて生まれてくる。いわば、その人のもう1つの心の姿なんだ。——だから、彼らのつながりは、僕たちが思っているよりもずっと深い」

レナが言っていたのとはほぼ同じだが、最後に心にしみこむような深い声で付け加えられた言葉にどきりとする。すると、カイシドは苦笑した。

「……と、僕はある人にそう言われたんだけど、ほとんどの人はそ

ここまで深刻に考えていない。生まれた時から一緒に育った家族だと思っっているそうだよ」

「そういえば、いとも似たようなこと言ってたなあ。仲のいい人間を友人と呼ぶなら、仲のいいレイスは生死を共にするパートナーだ……だってさ」

アキがその人の口ぶりを真似て言うのと、カイシドが感心したように言う。

「それはまた、ずいぶんと達観した意見だね」

「そうそう。うちのいとこ、ほんつとにひねくれてるんだ。双子の妹は天使だから、見た目はそれっぽいんだけど、中身はもう冷酷無情の皮肉屋の毒舌の好戦的で意地悪で人間不信のくせに妹大好きの墮天使野郎。でも、顔と妹が天使だからだまされる人が止まらないんだよねー」

「つまり、アキ君とはあまり似ていないけど、お互い気が合うと」

今の悪口をどう解釈したらそうなるんだよ。レオンは思わずいつもの笑みを浮かべたカイシドに心の中でつつこんだ。

しかし、アキはさほど意外そうでもなく、首をひねって答える。

「うーん、まあ、いざって時は確かに頼りになるかな。やたらと恩着せがましいのが腹立つけど」

「仲が良くてうらやましいよ。……そういえば、僕にこの話をしてくれた人もよくレクエスと喧嘩をして、時々怒ったレクエスが家を飛び出してしまいうって言っていたっけ」

「え、レクエスとケンカなんかするののか」

ヒマリ島の島民は、レクエスを“海神の子ども”としてとても大切にしている。メルの子の父親のアウルとルアが乱暴な冗談を言い合っ

ていることはあったが、本気で仲たがいするほどのケンカは見たことがない。カイシドはどこでその話を聞いたのだろう。

立てつづけに驚かされて目を最大限に丸んまるくしたレオンに、カイシドは悪戯が成功したように微笑んだ。

「レクスはその人にとって仲の良い兄弟でもあるから。たまには大喧嘩をするそうだよ。レオン君もヴァン君と喧嘩をするだろ」

「まあ、そうだけど……」

「へええ、レオンって大人しいけど、弟とケンカなんかするんだ？」  
「なんだよ、その言い方！」

「いや、うちのチビすけどもが活きが良いもんで、おまえ見てるとなんとなくな」

「2人ともしっかりしているからね」

途端にからかってきたアキをにらみつけると、カイシドがおつとりと微笑む。彼なりに含みがありそうな言葉に、レオンはそつと目を伏せた。

レオンは幼い頃から自分でできることは自分でやる癖がついていた。この習慣は、周りの大人たちの真似をすることから始まって、成長するにつれて自然と身についたものだと思う。それ以外にも、礼儀とか語彙とか人との付き合い方も、彼らから学んだものが多い。昔から、そういった面を見た大人たちから「大人びている」「しっかりしている」などと褒められるのは当たり前だった。

けれども、友だちのように仲良くしていたつもりのカイシドやアキの口から同じ言葉が出てきたのはショックだった。年齢が離れているカイシドとアキはあんなに仲がいいのに、自分だけが“賢い子ども”だと見られて仲間はずれにされている。そんな気さえしてくる。言われてみると、ここに来てからはよくふざけあっていた双子の弟と口喧嘩もしていない。みんな、あの事件が起きてから自分に気を使って、優しくしてくれている。

あんなに仲がいい人とレクスだってたまにはケンカをするのに。そう思うと、何だか無性に寂しくなってくる。今朝の夢のせいかな、どうもちょっとしたことでも落ち込んでしまう。レオンは深呼吸して気分を切り替えようとした。

すると、膝の上でまどろんでいた猫が飛び起きて、アキに向かって毛を逆立てて唸りはじめた。

「げ。起こしちまったか？」

思わず逃げようとしたアキの声にレオンの膝に小さな爪が食い込む。今にも飛びかりそうな体勢に慌てて頭を撫でると小さく鳴いて座りこむ。しかし、つりあがった藍色の目はアキをぴたりと狙っていて動かない。

人懐っこい黒猫だが、案外寝起きが悪いのかもしれない。それが、なんとなくメルと重なって沈んでいたレオンはくすりと笑った。きよんとした顔で見上げる猫に親近感が沸いてくる。

おそろおそろ座りなおしたアキを見て、レオンはふと思いついて言った。

「アキって、こんなにやくみたいだな」

「はあっ!？」 俺の頭のどこがつるつるしてんだよ。あ、もしかして、掴みどころがなくてよくわかんない奴だって言いたいのか？」

「うん。やたらと人懐っこくて、いつまでも喋ってるから、たまに言っちゃいけないことを言って大ピンチになる。でも、悪気はないからなんとか許してもらって感じ」

レオンがさっきのお返しにずけずけと言うと、アキは何かを呪うようにため息をつく。

「おまえって、かわいい顔して意外と口が悪いな」

「アキとヴァンとシヴァにだけは言われたくない」

「多すぎだろ」

シヴェルツを見習ってそっぽを向いて無視すると、カイシドがソファにうつ伏せになってぷるぷる震えている。「こんなにゃく」発言がツボにゴールしたらしい。

膝の上の猫が再びもぞもぞ動いたので背中を撫でると、あることに気づいてカイシドに尋ねた。

「そういえば、この猫、誰かが飼ってるのか？」

「あ、ああ、まだ、言ってなかった、ね。その子は、少し前に見つけて、こっそり面倒みていたんだ。よかったら、名前を付けてくれないかな？」

いきなり振られたレオンは驚いて、黒猫と必死で笑いをこらえるカイシドを見比べた。

「ええっ、いきなりそんなこと言われても困るよ」

「黒いからクロでいいんじゃないの。あ、あとはクロニャンとか」

「嫌だよ、そんな変な名前。……メルに頼んでみる。猫好きだから」

女の子の彼女の方がかわいい名前を付けてやれるだろう。そう思っ  
て、余計なことを言われる前に釘を射すとアキは軽く肩をすくめた。カイシドは任せたとでも言いたげに微笑んでいる。猫を見ると興味  
がなさそうに目をしばたかしている。

と、そこで食堂の入り口からリズムミカルな足音が聞こえて、シオン  
が入ってきた。

「おはようございます！ あら、レオ君、早いね」

「おはよう、シオンさん。メルは？」

「まだ寝てるみたい。時間になったら起こしに行くから大丈夫よ」

2人とも短いあいさつを交わしながら近づいてくると、思い出したように話し出す。

「あ、そうそう。今日“トライフル・ドリーム楽団”が来てるんだって。せっかく早起きしたなら、行ってみたら？」

「とらいふ……なんだって？」

アキの質問に、シオンはやや興奮気味に説明する。

「トライフル・ドリーム楽団。簡単に言うと、管理局の養成学校の学生さんたちが集まってできた吹奏楽団よ。20年ぐらい前からあって、毎年夏祭りと冬祭りのときにミニコンサートを開いてくれるの。今日から会場で朝練習を始めてるみたいだから、今から行けばちょうど聞けるかもよ」

「じゃあ、ランニングのついでに見てくる」

「俺も一緒に行くわ。のんびりしていると体がなまっちゃまうからな」

レオンがうなずくとアキも立ち上がる。すると、猫もレオンの膝から飛び降り、ガラス戸の前まで駆けて行ってこちらを見上げる。どうやら付いて来いと言っているようだ。

「じゃあ、メルと一緒に待ってるから。行っちゃい！」

「行っちゃい。邪魔にならないようにね」

カイシドとシオンに見送られて、レオンたちは一斉に外に飛び出した――。

競うように走り出した2人と1匹を見送ると、カイシドはお皿を集めるシオンに向き直った。途中で手を止めた彼女に声を潜めて話しかける。

「すまないけど、今日はできるだけメルちゃんの傍にいてあげてくれ」

「はい、わかりました。……あの、カイ先生、1つだけいいですか」

いつも通り素直にうなずいた彼女は、カイシドの視線を受けて珍しく歯ぎれ悪く続ける。

「……昨日、メルがこっそり写真を捨てていて、気になって後で拾ったんです」

おそらく、迷いに迷って溜め込んでいたのだろう「すみません」と頭を下げる姿は、入ってきた時の彼女とは別人のようにずっと小さくかぼそく見えた。カイシドは黙ってレオンが消えた森を見やっ

た。

彼らは2ヶ月前の事件で深い傷を負っていた。

“ヒズミ病”は傷の1つでしかない。見えないもう1つの傷は今もレオンとメルを蝕んでいて、自分はわかっていながらもずっと手を出せないでいた。

その傷はまるで無数のヒビがはしったガラスのようにもろい。自分にとっては何気ない言葉が細かい傷に触れてしまい、その痛みが必死で隠している深い傷を――辛い記憶を呼び覚ます。いつしか事情を知る自分たちは傷に関する話題を避けていた。

だが、今になってレオンは変わった。



昨日、カリンの部屋で見せた強いまなざしがそうだ。彼はもしかしたら傷の痛みを乗り越えて思い出すことを選ぶかもしれない。

しかし、彼女は――。

「僕が預かるよ。機を見てレオン君に渡す。……見つけてくれてありがとう、シオン」

「……先生」

お礼なんて、ひどいです。ぽつりと言われた言葉が胸に突き刺さる。さっき、レオンに言われた言葉と比べて苦笑いが広がっていく。

この館の人間たちの心境を思うとカイシドはコップを連想する。この2ヶ月間コップにはいつも水が注がれ、アキたちが来たことで淵いっぱいまで張られてしまった。レオンの変化はそこにコップよりも大きい氷の塊を投げ込むようなものだ。

水が溢れるだけなら――、押さえつけていた感情が溢れ出すだけならまだいい。

彼とレオンが会ってしまった以上、もう誰にも思い出すことを止められない。自分たちにできることは支えることだけだ。シヴェルツとカリンはそう気づいて、昨日あんなことを言ったのだろう。

だが、そのせいでコップが砕けることは――メルが致命傷を負うことだけは阻止しなければならない。

自分よりも少しだけ背の高いシオンを見上げると、聡い彼女は自分の意図に気づいて、悲しみを押し殺して黒い瞳でしっかりとこちらを見ていた。

シヴェルツ、カリン、シオン、レオンの家族たち、そして自分。すべてを知りながらも、今までただ2人を見守ることしかできなかった自分たちも、ようやく動き出すときが来たのだ。

「レオン君が思い出し始めたんだ。今度は、最後までやり遂げる。だから、そっちは頼めるか？」

「任せてください。今まで何もできなかった分、しっかり支えますから」

力強いシオンの声にカイシドはうなづく。過去に縛られない彼女は、誰よりも強い。

「君がいてくれてよかった」

大嘘つきの自分も、この時だけは本心からの笑顔を浮かべられた――。

季節は夏に入り、山のふもとにある施設も昼間はそこそ暑くなる。

その太陽が本格的に輝きだす前に起きて、早番のスタッフたちが出勤する施設内をぐるりと走ってくるのがレオンの日課だった。1週するのにはだいたい20分ほどかかる。気ままな1人散歩には、朝食前の腹空かしもあってちょうどいいペースだ。

館から出たとたん走り出した黒猫は、並んで歩くレオンとアキから3メートルほど先にいる。森の小道に誰もいないことをいいことに、大樹に飛びついてよじ登ろうとしたり、地面を転がりまわって見つけた小さな花をかじろうとしたり、気ままに跳ね回っている。レオンの家にも2歳になる犬がいるが、大好きな公園に連れて行った時でもまだ大人しかった気がする。猫はたくましい。12歳のレオンはしみじみと感心していた。

「朝っぱらからよくあんなに元気出せるよな。うらやましいよ」

自分は寝起きが悪い上に、夢を見た日はしばらく落ち込んでしまう。すると、アキは笑いをこらえるように口元をひきつらせた。

「ああ。ここ聖域<レドゥース>並みにレイが濃いから、あいつも気分がいいんだろうな」

「聖域<レドゥース>って？」

聞き返すと、アキは頭に手をやって説明する。

「ああ、悪い。レイが沸いてたり、力の強いレイスがいたりして、特にレイが濃い場所を聖域<レドゥース>って呼んでるんだ。どこ

の世界でもレイはすべての命の源って言われてるらしいからな。俺から見てもここは病院には最高の環境だと思うよ」

「そうなんだ……。知らなかった」

施設のあるこの山は全体が管理局が所有している土地だ。ふもとには“ヒズミ病”の入院施設があり、もっと登ったところから頂上には研究所や隊員たちの訓練所がある。理由は知らないが、これらはすべてが現施設長の一存で建てさせたと聞いている。

レオンの世界には、レイスやレイを操る素質を持った人――レイ使いくフアーベル>はほとんどいない。異世界との窓口ともいえる管理局は、昔からそういった面を補うために積極的にレイ使いくフアーベル>や異世界から移り住んだ人を招き入れている。今の施設長もレイ使いくフアーベル>だが、アキの言っている事が当たっているならこの土地の力を見抜いて選んだのかもしれない。

もしかしたら、アキもそうなのだろうか。好奇と期待をないまぜにして見上げると、顔を向けたアキは照れくさそうに頭をかいた。

「あー、悪いけど、そんなに熱心に見つめられても、俺には愛する人がいるんだ」

「俺だって男なんかに興味はない！」

条件反射で噛み付くように言い返した後、1つ息を吐き出して聞き返す。

「それにしても、なんでここがレイが濃い場所だなんてわかったんだ？」

「ああ、それな。俺の故郷は山の傍にあるって話したろ？」

「あ、うん」

「その山には昔、街を護る水の女神様がいたんだ。街の人間は生まれた時からそこから流れてくる濃いレイに触れながら育つから、こ

ういうとここに来るとなるとなーくわかるんだよ。本能みたいなものだな」

おとぎ話のような答えにレオンは目を丸くしたが、興味をひかれてゆつくりと聞き返す。

「じゃあ、アキはレイ使い<フアーベル>の一族なのか？」

「へ、なにそれ？」

さっきの真面目くさった顔から一転したまぬけな顔に、期待していたレオンはがっかりした。

しつこくせつつかれて説明すると、アキは感心したようにうなずいたが、違うと答える。

「いとは素質があるみたいだけど、俺は何も力もないよ。ただの一般人だ」

「ふうん……。おれはてつきり、アキは何か特別な力があるのかと思った」

未練がましく呟くと、アキはくしゃりと笑ってレオンの顔をのぞきこんだ。

「レオンは、こういう話が好きなのか？」

「こういう話って？」

「他の世界の話。この世界にはレイスはほとんどいないのに詳しい。普通はこんな話されたらもっと驚くか、変に思うぜ」

どうやら本気で感心しているらしいアキに、レオンは照れくさくなってぶっきらぼうに答えた。

「おれの父さん、管理局に勤めてるんだ。家にいるときはよく異世界の話をしてくれるから、自然と覚えたんだ」

「へええ、熱心だな。将来は他の世界に行きたいのか？」

「まあね。それより、アキはなんでそんなに詳しいんだ？ カイシドみたい調査でもしてるの？」

適当にはぐらかして、おもしろがるように藍色の目を輝かせたアキを見上げる。自分で言ったとおり彼はかなり変わっている。

すると、彼は小さく苦笑して言った。

「俺はおまえの言う異世界から来たんだ。水の国＜エリアス＞のルインって街から。世界の名前は、なんだったかな。まあ、とにかくここにはあんまり知られてないところからやってきました」

メルの世界とは違う、レオンが知らないまったくの異世界の人間。レオンはその言葉に足を止めた。アキも返事を待つように少し先で足を止める。

薄々、そうじゃないかとは思っていた。でも、いざ正体を言われると戸惑いの方が強くてどういう態度をとったらいいのかわからなくなる。

彼の言ったとおり、レオンは幼い頃から異世界の話を聞くのが好きだった。初めて父に連れられてメルの世界に行ったときからは、いつかここに住んでみたいと思っている。そして、その関心が他の世界へも広がったのは、メルの母親――クレスのしてくれた話だった。

レオンは胸いっぱい緑の香りがする空気を吸い込んだ。それに力づけられるように振り返った彼の前まで進んで、はつきりとした声で問いかける。

「あのさ、アキは、エールストって街を知ってる？」

「エールスト？」

その言葉を繰り返しながらアキは頭の中を探るように遠くを見や  
ったが、やがて顔をしかめて首を振る。

「ごめん、俺は知らない。でも、もしかしたらアルに聞いたら知っ  
てるかもしれない。……聞いてみるか？」

彼の返事は予想していたものだった。落胆よりもやはりそうかと  
いう諦めの方が強くこみあげてくる。

でも、最後に付け加えられた言葉に、レオンは顔を上げて慌てて  
否定した。

「あ、ごめん、いいんだ。こういったら失礼だけど、ほとんどの人  
が知らないと思うから」

「そうか。……別に、無理にってわけじゃないけど、俺の街って何  
百年も生きてるレイスとか、アルとか、物知りの奴がごろごろいる  
からさ。何か聞きたいことがあったら言ってくれよ。喜んで調べて  
くれるから」

「……うん」

鮮やかな引き際に、緊張していた体から力が抜けていく。

アキはとてもいい人だ。いろんなことを知っているし、よく喋る  
わりには自分たちの事情を探ってきたりしない。たとえば、秘密を打  
ち明けても絶対に他には喋らないだろう。

彼と気楽に喋れるのは、こういう安心感があるからだと思う。

すると、黒猫が情けない声を出しながら駆け戻ってきた。どうや  
ら思いつき頭をぶつけたらしい。星のない夜のような毛は土ぼこ  
りで汚れてきっていて、きれいに洗わないと館には入れられそうに  
ない。

ほっとしながらしゃがみこんだレオンは、しきりにすりよって痛みを訴える猫の額をちよんとつついて説教した。

「おまえな、いくらなんでもはしやぎすぎ。帰ったら、体洗ってから朝ごはんだからな」

「ふにゃあ」

「あははは、おまえ、意外とドジだな。ほれ、おいで。撫で撫でしてやる」

「そういえば、この猫、いつからいたんだろう。全然気がつかなかった」

カイシドは1階のホールを左に行った廊下にある角部屋に住んでいる。他は、滅多に使わない小会議室と空き部屋なので、こっそり面倒を見るにはちょうどいい環境だろう。

しかし、ほとんど留守にしているのに、人の眼が届かない部屋に猫を置いておいて大丈夫だったのだろうか。それとも、クロミが面倒を見ていたのだろうか。

すると、猫を抱き上げたアキが意地悪な口調で言う。

「他のスタッフにはあまり知られたくないって言ってたぜ。レオンはわりと顔に出るから、あえて内緒にしてたんじゃねえの」

「……悪かったな」

アキの言葉には腹が立ったが、確かに自分は隠し事が下手だ。

土ぼこりを払いながら大きな手に優しく撫でられると、ぺたんと垂れていたぼさぼさのしっぽが動く。そういえば、島の黒猫も臆病なわりにはやんちゃで、よく頭をぶつけてメルに撫でられていた。見た目とは裏腹に気難しいフィーナととても仲がよかったが、実のところ危なっかしくて放っておけないと世話を焼いていたのかもしれない。そういうところはレナとそっくりなのだ。



隣りを歩きながら思い出に浸っていると、猫の頭をもみくちやにしながらアキがいつもの軽い口調で話し出す。

「もう4年になるかな。15の時にギルドの運び屋になってから、ずっといろんな街をまわってるんだ。でも、まだまだひよっこだから今までは近しいところしか行ったことがなくてさ。1人でこんなに遠くに来たのは初めてだ」

「運び屋？ 仕事できたの？」

「いや、いここに会いに来たんだ。そしたら、シヴェルツ先生に頼みごとをされて、その報酬でここに滞在させてもらってるってわけ」

何を頼まれたのだろう。そう思ったが、さっきのこともあるのでレオンは違うことを聞いた。

「仕事って、誰かと一緒にあちこちに行くの？」

「ああ。俺よりでかくて3倍は生きてる狼のじいさんとな。口が悪くて、美人に目がなくて、腰の重い偏屈なレイスだけど、俺がガキの頃から付き合ってる大切な友だちだ」

「アキよりでっかいって、けっこう怖そうだな」

「あははは、大丈夫だ。じいさん、女子ども年寄りには絶対手を上げないって誓ってるからな。……はつきり言って腕っぷしは弱いしな」

「でも、レイスだから強いんだろ。そんなこと言って大丈夫なのか？」

「いいのいいの。きっと今頃、俺がいなくなってせいせいしたって言ってるから。あ、もしかしたら、セネちゃんのとこに入り浸ってるかもな。あのスケベじじい、んなことしたら土産没収だ」

勝手に決め付けて歯をむき出しにして唸るアキを、動きを止めた手の下から黒猫がきよとした顔で見上げる。ついで、レオンに

顔を向けてぺろんと舌を出す。そのすつとぼけた顔に、レオンは笑ってアキに言った。

「アキが変なこと言うから、呆れてるよ」

「んー？　なんだよ、クロニャン。いつも俺の話を聞いてくれてるのに、レオンの前だからってかっこつけてんのか？」

「話って……、猫に話しかけてんの？」

レオンが思わず呆れると、アキは小さな子供に諭すように重々しく言う。

「長生きのレイスも人間の子どもも、小さい頃は周りが面倒を見てやらんといけないのだよ。クロニャンは賢いけどまだまだ世間を知らないみたいだから、俺は大人として持てる知識を授けてあげているんだ」

「だから、勝手に変な名前付けるなよ」

「いいじゃねっかよー。本人、いや本ニャンがいいって言ってんだから。な？」

アキが同意を求めると、猫は愛らしく首を傾げて「ふにゃあん」と困ったような声を出す。レオンから見ると、アキが言っても聞かないので仕方なく呼ばれている気がした。

とはいっても、とっさのことでもいい名前も浮かばない。早くメルに頼んで考えてももらわねば。密かに決意を固めると、アキはため息をついて言った。

「まあ、実を言うと、預かったはいいいけど、どう接すればいいかわかんなかったんだ」

「え、この猫、アキが面倒見てるのか？　もしかして、シヴァに頼まれたのってそれ？」

「いや、俺はレオンとメルの話し相手を頼まれただけ。クロニヤンの相手はその後引き受けたんだ。なんかこう、お互いはぐれ者だから、妙に気が合ってたさ」

「……はぐれ者？」

妙に胸さわぎがしてレオンは黒猫を見た。猫はアキに背中を撫でられて気持ちよさそうに目を閉じている。

「クロニヤンは怪我してたところを、カイシドさんが見つけて世話してたんだってさ」

「でも、この山には動物はいないのに……」

「その辺は聞かなかったけど、仲間と一緒にたまたま立ち寄ってはぐれちゃったんじゃないかな。どっちにしても、見つけた以上放っておけないだろ」

「……1人、か」

レオンはうとうとしている猫を見つめた。そっと額を撫でると、薄っすら眼を開けたがまた寝てしまう。離れた指先には温かさと細かい毛の感触が残っている。

すっかりくつろいで丸くなった黒猫。その姿が昨日のメルの姿と重なる。

メルの世界の人間は、必ずレクエスと一緒に生まれ、一生を共にする。それが古からの決まりだった。

だが、広い世界の中には、必ずしもその決まりをまっとうできない人もいる。レクエスとはぐれて生まれてしまった人。レクエスと死別した人。だが、どちらの場合もレクエスは必ず人の元へやってくる。

メルは生まれてから11歳になった今もずっと1人だった。

流れ者<クラン>。現存する世界と繋がっていない“異世界”から“ヒズミ”に吞まれて流されてきた異質な人間。彼女の母親――

クレスは異世界から流されてきた人だった。

ほとんどの人間が命を落とす中、レナに助けられて一命を取り留めたクレスは“エールスト”という異世界の街からやって来たと話していたという。彼女が断片的に覚えていた記憶の中には、その世界にも彼女自身にもレクエスがいた。

後に、クレスは島の人間のアウルと結婚し、数年後にメルが生まれた。しかし、生まれた子を見たレナはこう言ったという。

——この子のレクエスは、この世界にはいないかもしれない。

レクエスがいない代わりに、メルは島に暮らすレクエスやレイスたちに特別好かれていた。中でも、レナのレクエスのフィーナと黒猫は、メルが一番の友だちだった。活き活きと島の話をするメルは本当に楽しそうで、レオンは内心うらやましかった。

だが、ここに来てからメルは島のことをほとんど喋らなくなった。その理由を聞くのが怖くてレオンもずっと黙っていた。

彼女を家族や仲間から離して、1人にしてしまったのは自分のせいだ。

その自分が今になってそっくりなこの猫を連れてきたらメルは何て思うだろうか。そう考えると、まるで冷水を被ったように体が震えだす。

「……アキ」

「ん、どうした？」

「メルには——」

喉の奥から搾り出した声はかすれていた。言いかけた言葉をレオンはすり替えた。

「メルがどうしてここにいいのか、聞いてる？」

「ああ。カリン先生とシヴェルツ先生からだいたいな」

あっさりと返された言葉を聞いた途端肩から力が抜ける。すると、アキはにかつと笑って言った。

「大丈夫だ。俺、口硬いから」

その力強い言葉にレオンはぱつと顔を上げた。溜め込んでいた言葉があふれ出していく。

「メルはずっと帰れなくて寂しい思いをしてるんだ。おれが誘ったからこっちに来て“ヒズミ”に巻き込まれて、だから――」  
「メルがクロニヤンに会ったら、島のことを思いだして寂しがるかもしれないって？」

アキに言いたいことを先取りされて、レオンは小さくうなずいた。すると、頭にぽんと温かい手が置かれる。顔を上げると猫を片手に抱いたアキが笑っていた。

「だったらさ、レオンがもっと話しかけてやれよ」

「え？」

アキは膝を折ってレオンと目を合わせる。その顔は不適に笑っていたが、藍色の目は真剣な光をたたえていた。

「レオンは、メルが一番仲のいい友だちなんだろう。だったら、寂しくないようにいっぱい話しかけてやれよ。これまでのいい思い出を探してさ、これからもいっぱい楽しい思い出作ろうぜ」

「……なんだよ、それ」

レオンが戸惑うと、アキは背筋を伸ばして「うーむ」とうなった。

「とりあえずレオンは周りに気使いすぎなんだよ。それで、勝手に1人で悩んでるだろ。たまには俺と喋ってる時みたいにつるつる喋ってみたらどうだってこと」

「そうできたらいいけど……。でも、メルは本当はおれのことを嫌ってるかもしれない」

「そんなの喋ってみなきゃわかんないだろ。それに、俺はレオンが暗い顔してよそよそしくなったら、それこそメルは傷つくと思うぜ？」

「うっ……」

否定できなくてレオンは齒噛みした。アキは言いたいことは終わったとばかりに立ち上がって、耳を動かす黒猫を静かに撫でている。3日前、アキがやってきたお祝いにと、珍しくシヴェルツとカリン、それにレザックというアキの知り合いらしいスタッフが夜にやって来た。

齢も出身もバラバラな大人たちはすっかり盛り上がってしまい、レオンは仕方なくだだをこねるメルを引きずって部屋まで送り届けて寝かしつけるはめになった。

だが、大人たちが誰も来ないとわかると、瞬く間にお喋りの時間に変わった。施設の7不思議、両親から聞いた冒険譚、お祭りのこと、お互いが見つけた珍しい物……。島の話はしなかったが、お互いが眠くなるまで小声の話と笑いは尽きることがなかった。

メルはあの時のように、この故郷の友だちにそっくりな新しい友だちができたことを喜んでくれるだろうか。

「……もし、泣かれたら一緒に謝ってくれる？」

「おう。でも、殴り合いになったら、俺はメルの味方だからな」

「誰がそんなことするかっ。……あ、あとさ」

「ん？」

初めて会った日と同じように満面の笑みを浮かべたアキに、レオンはぼそりと言った。

「また、いろいろ話して欲しい。メルも一緒に」

「任せとけ。……いやあ、レオンはいい子だなあ、ほんとに」

アキの大きな手に頭をくしゃくしゃとかきまわされて、レオンは慌てて逃げ出した――。

「はい、できあがり！」

弾んだ声と共に肩から手が離れて、おそろおそろ目を開けた。

正面に座ったカイシドを見ると、本を読んでいた手を止めて優しく微笑みかけてくる。それで安心して手鏡をのぞきこむと、ポニーテールにした薄茶色の髪を白桃のような淡いピンク色のシュシュで飾った自分が映った。見慣れない姿についてじろじろと見てしまう。

「似合ってるかな？」

「うん。よく似合ってるよ」

「とってもかわいいわよ。記念に写真撮らせてもらってもいい？」

シオンの言葉にはにかみながらうなずくと、メルはもう一度鏡をのぞきこんだ。

ここ最近、シオンはお祭りに出展する写真を撮っている。今年のお題は“日常”だそうで、彼女と仲のいいメルとレオンはよくモデルを頼まれている。起きた時は夜に大泣きしたせいで憂鬱だったが、彼女の“魔法の手”のおかげでもうすっかり元気になった。

シオンはメルの母と同じ不思議な力を持っている。どんなに落ち込んでいても、その手に触れると心がふわりと軽くなる。温かくて優しい手。それが恋しくてメルはまた髪を伸ばして、毎日きれいに梳かしてもらっていた。写真撮影に協力しているのは自分なりのお礼だ。

鏡を見ながら笑顔の練習をしていると、カメラを持って戻ってきたシオンが笑って言う。

「いつも通りにしてくれればいいのよ。ほんととはレオ君もいると



いいんだけど、まだ帰ってこないのかしら」

「もうそろそろ帰ってくるんじゃないかな。ちょっと電話してみよ」

「すみません、お願いします。じゃあ、先にメル1人で撮ろうか」

カイシドが立ち上がって部屋の隅に移動すると、シオンがカメラを脚立にセットして調整を始める。そこで思い出して首から下げているお守りを取り出した。皮ひもに通した透きとおった水色の丸い石がきらりと光る。

「これも一緒にいい？」

「ええ。素敵なネックレスね。アクアマリンみたいでとってもきれいい」

心からの褒め言葉に、メルは言葉少なに礼を言った。

「ありがと、ママにもらったお守りなの」

「あら、じゃあ、いつもより3割増しぐらい美人に撮れるように気合入れないとね」

「3割も増えたら、サギになっちゃうよ？」

「いいのいいの。第一印象ってのはとっても大事なんだから。それに写真はね、写す物が一瞬だけ見せた姿を切り取るから、意外な画が撮れることがあって面白いのよ」

「ふうん、どんなものが撮れたの？」

「うーん、最近だと、レオ君がメロンにかじりついたとこと、お菓子の山に釣られたとこかな。……あ、今いい顔が撮れた気がする」

喋りながら隣に座らせたモモと一緒に撮影していると、カイシドが苦笑しながら戻ってきた。そこで撮影が終わる。

「急いで戻ってくるってさ。どうも楽団の人たちと話し込んでいたらしい」

「まだ朝ごはん食べてないのに大丈夫かしら。それとも、またたっくさんお菓子をもらって喜んでたりしてね」

写真をチェックしていたシオンが悪戯っぽく言い、メルは正面に座ったカイシドと顔を見合わせて笑った。昨日スタッフたちにもらったお菓子の籠盛りはまだたくさん残っている。

珍しく早起きしたレオンは、アキと一緒に“トライフル・ドリム楽団”の朝練習を見に行ったらしい。今頃は、お菓子の名前を名乗る楽員たちに囲まれて、籠盛りを想像してよだれを垂らしているかもしれない。

「レオン君は有名人だからね」

「ねえ、なんで楽団の人はみんなお菓子の名前なの？」

メルが尋ねると、カイシドは懐かしそうに目を細めた。

「あの楽団は、バニラ・トライフルというフルート奏者と、幼なじみのギター弾きの人がコンビを組んで始めたものなんだ。みんなに夢と元気を与えてくれた2人の名前にちなんで、代々の団長はトライフルを、楽団員の人はお菓子の名前を名乗っているんだ」

「それだけじゃないのよ。その幼なじみの人の名前、なんて言ったと思う？」

「えー？」

シオンの含みのある言い方からすると、お菓子の名前に関係しているのだろう。そういえば前に誰かに聞いた気がする。真っ先に思いついた名前を答える。

「オーレン・ソルベット？」

「大当たったり！ 2人は昔から仲が良かったんだけど、演奏のほうも超一流だったの。だから、みんな密かにそっちのご利益にも期待してるのよ」

「それは知らなかったな」

「兄貴から聞いた内部情報ですから」

さらりと言ったのけたシオンに、カイシドは「責任重大だ」と額に手を当てた。

それはきれいに無視して、シオンは隣に座ってさっきの写真を見せてくれる。指で丸をつくると満足そうに笑う。

「じゃあ、これもお祭りに出させてもらおうかな。……あ、そうそう、さっきの話だけど、リン先生も楽団に入ってたのよ」

「え、リン先生はなんて名前なの。シフォン・ケーキ？」

「はずれ。正解は、フルート担当のクールビューティー、ガトー・ショコラ。歴代の楽団員の中でもとびっきり上手で、お祭りのアンコール演奏では必ずメンバーに加わってたのよ」

「シマリス先生も入ってたの？」

「いや、先生は昔から熱心なファンだったんだ。特に、リン先生が出る時は必ず聞きに行っていたよ。本人には今でも内緒だね」

「シマリス先生はローマンチストだったんだ。それで、リン先生と恋におちたの？」

すると、カイシドはしまったとでも言いたげに眉を動かした。目をきらきら輝かせたメルに「この話は内緒だよ」と唇に指を当ててぴたりと口を閉ざす。それ以上は話してくれないらしい。

がっかりすると、シオンが気を取り直すように朗らかに言う。

「そういえば、今年のお祭り、かなり凝ってるみたいよ。2日目の

演奏会には施設長やOBの人たちが特別に集まって何曲か演奏するんだって。現役の人たちも張り切ってるから、今年はいつもとよりもレベルが高いってうちの兄貴が喜んでた」

「ああ、それは知らなかったけど、劇の方は参加者たちで犯人を当てる推理物をやるって聞いたよ。見事犯人を当てたら豪華景品をもらえるみたいだ」

カイシドの情報に、しよげていたメルは再び目を輝かせた。

「わあ、おもしろそう。わたしもやってみたい」

「1日目と2日目で犯人が違うみたいだから、両方とも見つかるといいね」

「うんっ。1人で見つけて、レオンをぎゃふんって言わせてやる！」

毎週見ている探偵物の推理アニメでは、いつもレオンに負けて悔しい思いをしている。上手くいけば、毎回さっさと謎を解いてヒントを出してくる奴を見返してやれるだろう。

が、その言葉を聞いたカイシドはなぜか小さく肩を震わせて笑い出す。わけがわからずきょとんとしていると、やはり笑いながらシオンが忠告してくる。

「レオン君をやっつけるのもいいけど、お祭りはいっぱい見るものあるから、うろうろしているとあっという間に時間が経っちゃうわよ」  
「でも、2日あるんでしょ？」

「そうだけど、2日目はぐっと人が増えるから、お目当てのところは早めにまわったほうがいいわよ。欲しいものがあったら、1日目に誰かに言っておけばとっておいてくれるから」

「シオンが言うとおり、人が大勢来るから気をつけるんだよ。スタッフは腕に黄色いバンドをつけているから、何かあったら言うんだよ」

「そうそう、レオ君意外と方向音痴だから、しっかり手をつないで離しちゃダメよ？」

「……うん。大丈夫だよ、レナとフィーちゃんと一緒にいてくれるから」

2人の親切な言葉に、メルは祭りが終わってからのことを考えて肩を落とした。ほんわりとしていた心が急速に冷えていく。

毎年、夏に開かれるお祭りは、1日目は施設関係者のみだが、2日目は一般人も招かれる。初日はスタッフたちが製作した物の展示がメインだが、2日目はそれらの販売も行う。そ

の中には、ポシェットやモモの服をプレゼントしてくれた人の手作りの品物もあると聞いて、全部見て回ろうと浮かれていた。

しかし、昨日カリンにレナが迎えに来ると聞いてから、そんな甘い気分は一気に吹き飛んでしまった。代わりに、見ないようにしていた現実がじわじわと押し迫ってくる。

お祭りが終わったら、今度こそ自分は島に帰らなければいけない。不安を紛らわせようとモモの手を握り締めると、カメラをカイドに渡したシオンがあっと思いついたように口を開いた。

「ねえ、メル。1つお願いしてもいい？」

「……ん、なあに？」

シオンがお願いなんて珍しい。興味を惹かれて沈んでいた心が少しだけふわりと浮き上がると、彼女はそれを助けるように華やかな声で言った。

「昨日、みんなで集まったときに展示の話になってね。メルのモモちゃんとレオ君が持つてるトトちゃんを、お祭りで一緒に飾らないかって誘われたんだけど、どうかな？」

「モモちゃんとトトちゃんを？」

メルが目を丸くすると、シオンは熱心な声で続ける。

「そう。今までモモちゃんの服を作ったでしょ。それがみんなに大好評だね、ぜひトトちゃんとお揃いで見てみたいんだって」

そこで言葉を区切ってきらきらと輝く黒い瞳を向けたシオンに、写真から顔を上げたカイシドは苦笑に近い笑みを浮かべた。

「何で僕を見ているのかな？」

「カイ先生も見たいですよね？」

「メルちゃんがいいって言うてくれればね。……僕も説得に加わった方がいい？」

「やだ、別にそこまでしなくていいですよ」

どうやら2人にも期待されているらしい。意外な話に面食らってメルは尋ねた。

「今からでも大丈夫なの？」

「ええ。みんなが力を合わせれば余裕で間に合うって、請けあってくれたから。それに、メルの服もお揃いで作りたいんだって。むしろ、そっちの方が本命だったりしてね」

「この分だと、レオン君のほうにもオフアーがいきそうだね」

「あ、それは大丈夫ですよ。リオナさんがぼっちり手を回してくれているそうですから」

「……気の毒に」

2人のコントのようなやりとりを聞きながら、メルはぼんやりと考える。

モモはメルの宝物だ。あの日以来、ぽっかりと穴が開いた心に入

り込む隙間風を防いでくれるのは、彼も好きだったモモと母にもらったお守りだけだった。

片割れのトトと並べたら、彼は喜んでくれるだろうか。

「わたしも2人が並ぶところを見てみたい。お願いしてもいい？」

「ほんとっ！　じゃあ、さっそくみんなに連絡入れてくるね。午後にでも集まってももらえると思うんだけど……」

言い終わらないうちにシオンは鳥のように飛び跳ねて、廊下へ走っていく。

すると、それと入れ違うように森の小道からよたよたとレオンが歩いてきた。開け放たれたガラス戸の前で土を落として入ってくる。

「ただいま……」

力のない声で言うと、一番近いメルの上に倒れこむように座る。台所にいたクロミがトレーに載せてお茶を持ってくると、礼を言っ  
て一気に飲み干す。

「お帰りなさい。大丈夫？」

「お帰り。アキ君はどうしたんだ？」

「なんか用事があるって本館に行った。……あれ？」

クロミが立ち去ると、少しだけ元気を取り戻したレオンはふとメルが付けたネックレスに目を止めた。眠たそうな藍色の目が数秒の間をおいてはっと見開かれる。

反射的に掴んで隠すと、レオンは耳まで赤くなって弾かれたように大きく視線をそらした。

「ごめん、じろじろ見たりして。……あのさ、それ、前にもどっか

で付けてたよな？」

「うん。ここに来たときに、ちょっとだけ」

思いがけない言葉に心臓が跳ね上がる。なるべく小さく早口で答える合間にも鼓動はどんどん大きく速くなり、ネックレスを握る手に力がこもる。横目で伺うと、レオンは考え込んでいる。

すると、カイシドが穏やかだがわずかに硬さを含んだ声で口を挟む。

「練習はどうだった？」

「あ、うん、楽器とかいろいろ見せてもらってすっごくおもしろかった。1曲だけ特別に演奏してもらったんだけど、すごい迫力があったてしびれるかと思った。それに、いろんな話も聞けたし。……そう、3人とも朝ごはん、もう食べた？」

「うん、冷めちゃうからって。ごめんね」

「おれこそ遅くなってごめん。そうそう、楽団の人たちは昼までいるって言ってたから、メルも行かない？」

「……今日は、用事があるから」

珍しくはしゃいでいたレオンは、メルのそっけない言葉に残念そうにならず。会話が途切れた隙に、メルは石を服の中につっこんだ。肌に触れた石はほんのりと温かい。

レオンにトトを貸して欲しいと頼まなければ。そう心では思っているけど、顔を合わせるのが怖くてなかなか口が開けない。すると、それが伝染したようにレオンもおそろおそろ言う。

「あのさ、1つお願いがあるんだけど……」

「……なに？」

少しだけ目を向けると、レオンは今のメルとそっくりな顔をして



いた。お互いの顔色を伺っておびえている顔。

いつから自分たちは、こんな顔で相手を見るようになったんだろう。それに気がつく、無性にせつなくなつてモモを抱きしめる。すると、レオンはゆっくりと喋りだした。

「実はさ、おれとアキで猫の面倒を見ることになったんだ」

「猫？」

「うん。全身まっ黒くて、小さいからたぶん子どもだと思う。すごく人なつっこくて、今朝も遊びにきてたんだ。それで、よかったらそいつの名前を付けてやってほしいんだけど……」

頼りない言葉に、カイシドが助け舟を出す。

「その子は、元は僕が見つけて面倒を見ていたんだけど、アキ君が来てからは彼に預かってもらっているんだ。今まで黙っていてすまなかったね」

レオンのお願いは、なんのこともない単純なものだった。だが、その心配そうな顔に、メルは昨夜カイシドが話してくれたことを思い出した。

——レオンは黒猫に会った。

メルは目をつぶって心を落ち着かせると、レオンの顔を見てはつきりと言った。

「ううん、知ってる。青い目をした黒い猫でしょ？ しっぱがびっくりしすぎてぼさぼさになっちゃったみたいな」

「え、メルも知ってたのか」

「うん。時々、ここで見かけたから」

肯定の言葉に、レオンのまもっていた緊張のオーラがほどけてい

く。そのゆるんだ顔に心が鈍く痛んだ。

ふと昨日、小瓶を渡したときのレオンの動揺した顔を思い出す。重い“ヒズミ病”にかかったレオンは、今でも忘れてしまっていることがある。

だけど、自分は密かにそれを喜んでいた。黙っていることで思い出すことを避けて、捻じ曲げられた記憶をそのままにしていた。思い出したら自分も彼も壊れてしまいそうで、ずっと触れるのを避けていた。

それなのに、何で自分は昨日あの小瓶を渡してしまったんだろう。レナがくれた島の思い出の香りは、忘れていた記憶を思い出させた。本当は昨日すぐに謝って、このことを話せばよかったのかもしれない。

でも、もう遅い。夢を見続けている顔、昨日のレオンの動揺した顔。そして、今の気遣わしげな顔――。

レオンは思い出し始めている。今はただ、それが悲しかった。

「リムって呼んであげて」

「リム？」

「うん。なんとなくそんな気がしたから、こっそり呼んでたの。……嫌だったらレオンが決めて」

驚いたように聞き返したレオンは、口の中で転がすように「リム」と呟くと、メル顔を見て安心させるように笑った。

「かわいい名前じゃん。クロニャンなんかよりよっぽどいい」

何も知らないレオンに、メルとカイシドは静かにうなずいた。シオンがかけてくれた魔法はいつの間にか効果が切れてしまった――。

## 5 (前書き)

お気に入り登録してくださった方、いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。すぐく励みになります。  
のろのろ進んでいます。が、気長に付き合ってくださいとうれいいます。

部屋に帰ってきたレオンは、夢のことをつづった日記を読み返していた。隣では、リムと名づけた黒猫がプリンクツヨンに背中をくっつけて丸くなっている。お腹の毛をかきあげれば銀色の小瓶が包まれているが見える。その様子はまるで子どもが大事なぬいぐるみを抱えて寝ているようだ。

疲れた目をほぐそうと顔を上げたレオンは、その愛らしい寝顔に頬をゆるめた。

「ほんとに良く寝るな」

レオンの独り言にも、リムは耳をぴたりと伏せてまどろんでいる。その気ままな姿につられて、レオンは頭の後ろで腕を組んで背もたれに寄りかかった。ほどこいた糸玉のようにこんがらがった頭を落ち着かせようと、目を閉じて息を深く吸う。

一緒に散歩に出かけてから、レオンはこのどこか人間くさい黒猫とすっかり仲良くなっていた。島にいた黒猫となんとなく似ていて、懐かしいのもある。

遅い朝食を摂るアキと別れて部屋に帰るとリムは一緒に付いてきて、がらんとした広い部屋をゆっくりと見回りはじめた。この天井の高い部屋は、1人でいると音が吸いこまれてかなり物寂しい。リムと一緒に住んでくれるなら大歓迎だが、1つだけ困ったことがあった。

ソファに座って日記を読んでいると、リムはメルにもらった銀色の小瓶をくわえて帰ってきた。どうやら香りが気になるらしく、ソファに置くと前足で転がしてしきりに鼻を近づけて嗅いでいる。

しばらく経ってから気づいたレオンが慌てて取り上げようとすると、それまでは大人しかかったリムは露骨に嫌がった。終いには、小

瓶を前足でがっちりと押さえつけて抗議するようにレオンを見上げる。

「それは大事な物なんだ。返せよ」

レオンは眉間にしわを寄せてそう脅したが、リムは小瓶を押さえたままひたすら藍色の目を向けてくる。まるで懇願するようなその視線について根負けして「大事にしろよ」と言うと、うれしそうに鳴いてまた転がして遊び始める。そのうち香りにリラックスしたのか、それとも遊び疲れたのか、小瓶を抱え込んで寝てしまった。

会ってからまだ少ししか経っていないが、リムは相当賢い。好きにさせておいても部屋の中を見ているだけで、壁や物を隠したり傷つけたりは一切しなかった。カイシドがそうしつけたのかもしれないが、それだけにこの小瓶に見せた強い執着が不思議だった。

「そういえば、あいつもコモモが好きだったっけ」

再び日記帳を手にとると、ふと島にいた黒猫を思い出した。あの猫もよくレナが飾っているコモモの花にちよっかいを出して、フィーナに追い払われていた。この小瓶の中身もその香りだが、猫にとってはマタタビにでもなるのかもしれない。

どうもリムを見ていると島にいた黒猫のことをよく思い出す。ついでに、なぜ悲しくなるのかわかる手がかりでも浮かばないだろうか。レオンはそっとため息をつく、やけくそ気味にページをめくった。

だが、何度読み返しても日記にはヒマリ島で過ごした楽しい思い出しか書いていない。やっぱり“ヒズミ病”のせいで過剰に感傷的になっているのだろうか。

いい加減嫌になって日記帳をソファに放り出すと、小さなノックの音が聞こえてきた。

けげんに思いながらリムを起こさないように静かに歩いてドアを開けると、メルが困ったような顔をして立っていた。

「なんだ、メルか。どうしたんだ？」

「ちょっとお願いがあるんだけど……」

そう言いながら、メルはなぜかドアの隙間から部屋の中をちらちらと見ている。

別に見られて困るものは置いていないが何となく落ちつかない。さりげなく移動して視線を辿ると、ソファで爆睡しているリムにたどり着いた。何となく嫌な予感がしたが、レオンはそ知らぬ顔をして謝った。

「あー、ごめん。メルにもらったクッションと小瓶、さっきあいつにとられちゃったんだ」

「小瓶って、昨日あげたコモモの香りの？」

「うん。わざわざ腹の下に隠して寝てる」

さっきまでは諦めていたのだが、せっかくプレゼントしてくれた本人を前にするとやっぱり惜しくなってきた。寝ている隙にこっそり取り返そうか。メルの様子を伺いながらもレオンが密かに葛藤している、意外にも彼女はうれしそうに笑った。

「そうなんだ。2人が気にいってくれてうれしい。でも、取られちゃったなら、レナにもう1つ作ってもらおうか？」

「いいよ、大変だろうし。それにあいつ、すっごく気に入ったみたいだから」

本当は欲しかったが今はレナもメルも忙しい。未練を断ち切って肩をすくめると、なぜかメルはすまなさそうに謝る。

「ごめんね。リムは本気になるとすっごくしつこいの。この間もカイシドさんにわがまま言って、困らせてたし……」

「メルが気にすることないだろ。でも、カイシドになに言ったんだ？」

会話の流れで問いかけたのだが、とがめるように黒猫の方を見や  
ったメルが再び顔を曇らせたのを見てレオンは後悔した。やっぱり  
この話はしないほうがいいのだろうか。

「ん、ちょっとね。……あのね、リムは頭が良いからちょっと変な  
ことをするかもしれないけど、とっても甘えん坊でいい子だから。  
仲良くしてあげてね」

「そっか。わかった」

メルの心配そうな言葉に一瞬疑問が浮かんだが、慌ててそれを頭  
の隅に追い払う。

この言い方だと、リムをかわいがっているのだろう。教えてくれ  
なかったのは寂しいが、昨日からの漠然とした不安がやや和らぐ。  
少しだけ気持ちが軽くなったレオンは、暗い顔をしたメルを安心  
させるように優しく言った。

「心配しなくても、あいつすっかり居座る気だから大丈夫だよ。そ  
れより、どうしたんだ？」

「あ、そうだ。トトちゃんを貸してほしいの」

「トトを？ いいけど、なんかに使うなら洗った方がいいぞ」

モモのペアであるトトは、いつの間にか母が持ってきて以来枕元  
に飾っている。そこでメルを待たせて部屋に戻ると、レオンは新品  
のままのピンク色の猫のぬいぐるみを持ち上げて着せた服を調えた。

振り返るとメルが顔だけつつこんでソファの方をじっと見ていた。わざと気がつかないふりをして「これでよし」と声を上げると、慌てて廊下に引っこむ。

「はい。またモモと一緒に服でも作って着せるのか？」

「うん。さっき、シオンにお祭りで飾らないかって誘われたの。モモちゃんと一緒に飾ってくれるんだって。レオン、一緒に見に行こうね」

「うん。楽しみにしてる」

モモとトトが着飾るなら、うつすらと頬を赤くしたメルも一緒におめかしするのだろう。おそらく、母とシオンと女性スタッフたちがもののすごく気合を入れて。

そこでふと、髪を結んだメルが初めて見るアクセサリを付けているのに気づいた。そういうえば、さっきも珍しくネックレスを付けていたし、今朝も写真撮影のためにおしゃれをしていたのだろうか。

何となく不思議に思っ て見ていると、メルは急に慌てたように暇を告げる。

「ありがとう。じゃあ、わたしはシオンたちと部屋にいるね。そうそう、アキが1人でなにしてるんだって、レオンのこと心配してたよ」

「え、なんだよ。おれだって部屋にいるんだから、別にいいだろ」

むっとしたレオンに、メルは緊張が解けたようににこりと笑って「早く戻ったほうがいいよ。じゃあね」と言っ て背を向ける。その背中がホールに続くドアの前に着くと、レオンはゆっくりと部屋のドアを閉めた。

まったく、アキは何を考えているのだろう。どこで何をしていようが自分の勝手だろう。



お節介な彼に対して怒りと文句が浮かんできたが、わざわざメルが言うほど気にされているのなら、一応言っておいたほうがいいかもしれない。

心なしか重くなった足を引きずりながらソファに戻ると、リムが目を覚ましていた。不機嫌なレオンに気がつくど、慌てて手を引っこめて上目遣いに見上げる。その悪戯がばれた子どものような仕草に鋭くその場所をにらむと、放り出した日記がいつの間にか開かれていた。どうやら、めくって遊んでいたらしい。

「こら、この日記も大事なものなんだから、いじっちゃダメだ。まったく、なんでもかんでもおもちゃにするなよ」

「にゃあ」

「こら、叩くな！」

何を勘違いしたのか手で叩くリムから、慌ててレオンは日記を取り上げた。

幸い、開いたページは破れたり汚れたりした跡はない。レオンはリムの視線から隠すように急いで日記を閉じた。すると、コモモの甘い香りがふわりと漂ってくる。

「あーあ、匂いがうつっちゃった。ちょっとその小瓶貸して」

もしかしたら、アロマが漏れたのかもしれない。小瓶を取り上げるとリムはすねたように鼻を鳴らしてレオンを見上げた。だが、叱られたせいかわしもっぱもぺたんと垂れている。その団子みたいな姿につい笑いそうになってレオンは背を向けた。

幸い、中の液は漏れてはいないようだ。開けたときに淵に付いてしまったのかもしれない。ついでに、蓋を開けて香りを嗅ぐが、昨日のように幻が浮かんでくることはなかった。

動きもせずに見守っているリムにきっちり蓋を閉めて返すと、

また小瓶を転がして遊び始める。レオンはため息をついて言った。

「まったく。おまえといい、島の猫といい、なんでそんなにコモモが好きなんだよ？」

だが、思わずこぼれ出た言葉に、ふとレオンは違和感を感じて首をかしげた。

何回かゆっくりと繰り返すと、それに気がついて頭の中がまっ白になる。

額を押さえてきつく目を閉じると、レオンはおそろおそろ小瓶を転がすリムを見た。ふと猫が顔を上げると、すべてを見透かすような藍色の目がレオンを捉える。その深い色の瞳に吸いこまれそうな気がして、一瞬背筋がぞつとする。

「リム……。おまえはリムだよな。メルがそう呼んでって言った」

そして、それは自分が“クレイドル”の黒猫のギミックにも付けた名前だった。その時は、何となく思いついて付けたものだが、音が気に入っていた。

でも、メルと仲が良い島の黒猫。あの猫は、何て名前だったんだろうか。それに、あの少年は。

しかし、それを考えるとなぜか頭の奥が鈍く痛んで考えが上手くまとまらない。苛付いて額を揉むと、ふとコモモの甘い香りが漂ってくる。指先に付いていた物だろうか。

その甘く懐かしい香りを嗅ぐと、痛みが静まって深いところからふわりと何かが浮かんできた。

気がつくと、目の前にヒマリ島の黒猫がいた。

離れたところにいるメルを呼びながら走っていく。レナにねだって焼きたてのクッキーをもらっている。白い小鳥を背に乗せて歩いているところを村人に声をかけられる。

そして、レナの家に入ると、勢いよく走ってきて飛びついてくる。追いかけてきたメルがむくれて、その声に黒髪の少年とレナが台所から顔をのぞかせて微笑む。

——ああ、そうだ。彼と黒猫も自分の友だちだった。

「みゃあ」

そこで鈴を転がすようなきれいな声が聞こえて、レオンははっとした。

レナの家もそこにいた人たちも消えて、黒猫だけが残って心配そうにレオンを見上げている。昨日見た幻と同じだった。

「おれ、また幻を見てたのか？」

「にゃ？」

思わずリムに聞くと不思議そうに小首を傾げられる。その無邪気な仕草に、ぼうっとしていたレオンは我に返って「ごめん、なんでもない」と頭を振った。昨日のことといい自分はいったいどうしてしまったのだろう。コモモの香りには幻を見せる効果でもあるのだろうか。

すると、右の頬の上を何かが滑っていく。手で触るととろりとした水滴がついた。

涙だ。それに反応したように胸が悲しさと焦りできゅうつと締め付けられる。

やっぱり、あの夢と同じだ。そこでレオンははっと気づいた。

もしかしたら、これは黒猫の名前を忘れてしまったことと関係があるのだろうか。

左の目からも雨粒のように涙が垂れて真下でポツンと硬い音を立てる。視線をやるとそこにはヒヨコの絵がプリントされた日記帳が置いてあった。

「もしかしたら、これに書いてあるかな……」

手の甲で涙をぬぐうと、レオンはもう一度それを手に取った。さつきから何度も読み返しているが、何かを見落としていたかもしれない。だが、触った部分が涙で濡れてふにやりと曲がる。思い出さないほうがいい、そう声が聞こえた気がして開くのをためらう。

すると、小瓶を離してリムが身軽に膝に乗ってきた。その洗い立てのふんわりとした温かさに勇気付けられてレオンはそろそろとページをめくり始めた。

しばらくした後、ある一文に目がひきつけられて手を止めた。

そこもさつきまで読んでいた文だ。だが、今は心が高かおかしいと訴えてきている。

まるで間違い探しのように丹念に読んでいくと、レオンはやつとそれに気づいた。同時に、驚きと恐怖で手がじんとしびれる。霧で包まれたように体が冷えて強ばっていく中、目だけはプログラミングされた機械のように動いて、その文字列をくつきりと浮かび上がらせる。

昨日、昼ごはんを食べて一旦部屋に戻ったときに、自分は確かにこう書いた。

メルにもらったコモモの香りをかいだら、レナの家 of 幻を見た。懐かしかったけど、またあの夢みたい to 悲しい感じがした。メル of 様子も変だった気がする。それにあの痛みはなんだったんだろう。

カイシドとリンさんは、夢は何かをきっかけに思い出したものだと言っていた。おれ of 見ている夢は、懐かしい思い出なのか、悲しい過去なのか、それとも今悩んでいる自分へのメッセージなのか。明日は暇だし、調べてみよう。

そういえば、あの黒猫は誰だったんだろう。フィーナと一緒にいたし、レイスの友だちかな。すごく懐かしい気がする。でも、メル

には聞けない。

何で今まで気がつかなかったのだろう。

ふと島の黒猫を思い出したのは、夕方とうさぎりんごを作っている時だった。

そういえばヒマリ島にも黒猫がいて、自分が台所にいるとやって来てずっとそばにいた。時々、味見をしてもらっていたが、中でも果物を使ったものが好きだった。そんな風に軽く思ったのだ。

自分たちはいつも4人と1匹で遊んでいた。

それなのに、どうして2人の名前を忘れてしまったのだろう。どうして幻に出てきた黒猫を“知らない”と書いているのだろう。

レオンはさすがのような思いで、もう一度日記をじっくりと読み返した。

夢はここに来たばかりのころは毎日つづられていた。最初は、メル以外の人は名前がわからないが、夢を見るたびに徐々に人が増えていく。レナ、フィーナ、ルア、アウル、島の人たち。

だが、その中には一緒にいたはずの黒猫と少年はいなかった。

レオンは手にした日記を思いっきり放り投げた。壁にぶつかったそれが嫌な音を立てて跳ね返り、膝の上で寝そべていたリムが抗議の声を上げるが、ぽっかりと開いた心の穴がそれらを吸収して呑みこんでいく。

吸い込まれるように目を閉じた闇の中には、さっき話した少女が秋の黄昏のような陰のある笑みを浮かべていた。

「メル……」

この2ヶ月間、レオンを励ましてくれたメルはいつも笑顔だった。他愛のない話をしては笑い転げ、見知らぬ物や話に目を輝かせて、この広い敷地内をレオンと一緒に隅々まで駆けまわっていた。彼女が傍にいてくれたから、レオンは“ヒズミ病”を乗り越えられた。

彼女はいつも明るかった。ただ1つ、島の話を除いては。

今までは、自分はメルが帰れなくて寂しがっているのだと思いいんでいた。でも、それは違うのかもしれない。

昨日、夕食の前に島の黒猫のことを尋ねた時、メルは「知らない」と言っていた。島のことを一切話さない彼女は、その時も何かをこらえているように苦しそうだった。

さっきも彼女はあの時と同じ顔をしていた。リムのことを悲しそうに見ていた。

どろどろと渦巻いていた不安が熱を帯びてレオンをじりじりと焼いていく。

メルは何であんなに仲が良かった島の黒猫の話をしないのだろう。家族と引き離れた上に大切な友達のことを忘れてしまった自分を、本当はどう思っているのだろう――。

「思いださなきゃ……」

小刻みに震える膝の上で様子を伺っていたリムが手を伸ばしてレオンの腕に触る。それにも気づかずレオンは虚ろな目でぶつぶつと呟き続けた。

あの2人の名前を思い出さなければ――。

「お、レオンか。いいところに来たな」

レオンの顔を見るとシヴェルツは細く開けたドアを肘で押しやった。そのからりとした笑顔に何だかほっとして緊張していたレオンは肩の力を抜いた。

「いきなりごめん。聞きたいことがあるんだけど、今いい？」

「なんだ、妙にかしこまって。まあ、いいや。ちょっと付き合え」

手招きされて中に入るとスタッフたちは珍しく全員出払っていた。キッチンに立ったシヴェルツに言われて適当な椅子に座ると、肩から提げたバッグからリムがひょっこりと顔をのぞかせる。まん丸の藍色の目を辿るとテーブルの中央には6つに切り分けられたチョコレートロールケーキが鎮座していた。

つまみ食いでもしようとしていたのだろうか。そんなことを思うと、レオンの反応を待っていたように背を向けたままシヴェルツが喋りだす。

「そのケーキはさっきリンが持ってきてくれたんだ。1人で食うとまたうるせえから、おまえにも分けてやるよ。ありがたーく味わって食べろよ」

「全部食べたって、このでっかいのと同じのを？」

「ああ。さすがに何回かに分けたけどな」

あっけらかんとした声に、レオンは思わずぼそりと言った。

「いくら好きだからって、お腹こわすぞ」

「そりやまずいもんを見境なくがつがつ食うからだろ。うまいもんを味わって食ってんなら大丈夫だ。うちの奥様はそこそこをなかなかわかってくれなくて困る」

言葉とは裏腹に盛大ににやけながら、シヴェルツはアイステイーが入ったコップと皿とフォークを運んできてレオンの正面に座る。札を言って大皿からケーキを取り分けると、ふいにリムが膝に飛び乗ってきらきらと輝く目でレオンを見上げた。どうやらケーキをねだっているらしい。

縦に割って半分あげるとぺろりと食べてしまう。ふと気づいたようにシヴェルツは緑色の目を細めてそれを見やる。

「なんだ、猫を連れてきたのか？」

「うん。一応バッグに入れてきたけど、やっぱり連れてきちゃだめだった？」

レオンが謝るとシヴェルツは困ったように「いや、気にすんな」と言った。だが、一瞬よぎった影に気づいてしまいレオンはうつむいた。

そのまま黙ってケーキを口に運ぶ。甘さが控えめなのかほとんど味がしない。ふっくらとしたスポンジとチョコクリームを機械的に口に運びながら、レオンはまだ聞くのをためらっていた。

あの後、いくら考えても2人の名前は思い出せなかった。彼らがいたことは確かなのに、詳しく思い出そうとすると頭の奥が鈍く痛んで邪魔をする。

焦りと苛立ちばかりが募っていくその時だった。

ふいにテーブルの上で携帯端末が鳴り響いた。慰めるように頭をすり寄せていたリムが耳を立てたが、レオンはわずらわしくて放っておいた。しかし、音は一旦途切れてはまた鳴り出し、それが5度目になった時ついに観念して出た。



相手はヴァンだった。つながった途端にいつものように一方的に喋りだしたが、いくらもしないうちに黙りこくったレオンに勘付いて尋ねてくる。

「どーしたんだ、アニキ。メルとケンカでもした？」

「いや、ちょっと考え事してた」

「ほうほう。じゃあ、このヴァン先生が悩める兄弟を助けてしんぜよう。ささ、どーんと話すがいい」

早く終わらせたい一心でレオンはそっけなく答えたが、夏休みに入って退屈していたらしいヴァンはしつこく食い下がってきた。

こうなると白状するまで解放してくれない。電話が嫌いらしく苛々としつぽを振るリムをなだめながら、レオンはため息混じりに言った。

「メルには内緒だからな」

「お、やっぱりメルのことじゃん。今度はなにやったんだ？ はっ、ついに浮気しちゃったか!？」

「……今朝、カイシドから黒猫を預かったんだ。メルは前から知ってたみたいんだけど、なんとなくそいつを見てるときに寂しそうにしてる気がしてさ」

自分のことは隠して言うのとヴァンの頬が引きつる。すぐに隠したが反応を伺っていたレオンはそれを見抜いてしまった。

ヴァンが答えるより早く、自分でも驚くぐらい尖った声で尋ねる。

「猫がいるの、知ってたのか？」

すると、ヴァンは強く首を振って逆に尋ねてくる。

「えー、知らないよ。でも、猫なんてどっから拾ってきたんだ？」  
「わからない。カイシドが拾って世話してたんだって。……ほら、こいつがそうだよ」

ヴァンは明らかに動揺していた。だが、リムがいたことは本当に知らなかったらしい。端末のカメラをリムに向けると、歯をむき出して威嚇した後顔を伏せてしまった。

どうやら完全に機嫌を損ねてしまったらしい。仕方なく端末に顔を戻すと画面の中でヴァンが口を尖らせて文句を言う。

「どこ映してんだよ。なんにも見えなかった」

「え？ リムは黒いからカメラじゃ見えにくいのかな。おまえがうるさいから嫌がって顔隠しちゃったし」

レオンが嫌味を言うのとヴァンの顔が今度ははっきりと引きつった。さっきとは一転して気遣うようにおそるおそる尋ねる。

「思い出したのか、その名前？」

そう言ったきりヴァンは口を閉ざしてしまい、名前しか聞き出せなかった。

島の黒猫はリム、少年はリックといい、やはり自分たちの友だちだったという。だが、その名前とヴァンが言った「思い出したのか」という一言は心の穴にすとはまった。

“ヒズミ病”にかかった自分は多くのことを忘れてしまった。

治った今もあの事件の日のことやここに来てから初めの頃のことはい思い出せない。でも、それは病のせいだから仕方がないと諦めていた。そうやって、いつからか見始めたあの悲しい夢も“ヒズミ病”のせいにして、今までそれに向き合うことから逃げていた。そして、友だちだったはずの島の黒猫と少年のこともきれいに忘れてい

た。

電話を切るとレオンはリムを連れてシヴェルツに会いに本館を訪れた。彼なら話してくれると信じて。

「で、今日はどうしたんだ？」

相変わらず軽い口調で尋ねられて、物思いにふけていたレオンははっと顔を上げた。彼の分のケーキはまったく手が付けられてなかった。

シヴェルツは自分が切り出すのを待っていてくれる。それに気がつくど、レオンは自分でも情けなくなるぐらい力が抜けていくのを感じた。

家族もカイシドもシオンも、そしてメルでさえも、いつだって迷惑しかかけない自分に優しかった。何層にも重なった真綿のように自分をくるんで、傷が癒えるまで外から守ってくれた。

だから、自分は2人のことを忘れていられた。また傷つくのが嫌で2人を思い出そうとしなかった。

でも、このままじゃいけない。メルはあと少しで帰ってしまうのだから――。

「……シヴァ、お願いがあるんだ」

「なんだ？」

何て切り出せばいいのだろう。再びすくんだ心に呼応するように、握りしめた手が震えだす。すると、膝の上でレオンを見守るリムがぼんっと手を乗せてくる。その頼もしい手に励まされてレオンは勇気を振り絞って言った。

「なんで、リムとリックのことを忘れてたのか、思い出したいんだ」

自分の声は情けないほど小さかった。

だが、確かに聞こえた証拠にシヴェルツは笑みを消して底の見えない緑色の目でレオンを見据えた。少し間をおいて聞こえた深い声にはわずかに苦さがにじんでいた。

「そうか。思い出したか」

強ばったレオンの顔に一つうなずくと、シヴェルツはポケットから携帯端末を出した。黙って立ち上がりレオンの隣に座りなおす。レオンが身じろぎもせず待っていると、それをいじりながら「まずはあの日のことから話さないとな」と告げる。無機質な声にレオンも意識を集中させた。

「あの日はオレもちょうどターミナルに人を迎えに行ってたな、ちようどおまえたちと会ったんだ。その時メルはあのぬいぐるみじゃなくて、リムっていう黒猫を抱えてた」

あの日、リムも一緒にいた。その残酷な事実にはレオンは思わず身震いしたが、1つだけ疑問を感じた。

「……リツクはいなかったのか？」

すると、シヴェルツは一瞬目を閉じた。だが、レオンの目をまっすぐ見てうなずく。

「ああ。オレが見たのは黒猫だけだ。これがその時に撮った写真だ」  
受け取った端末には、ターミナルのロビーで撮った写真が映っていた。

真ん中に黒猫——リムを抱えたメルがいる。その両側には自分と

ヴァンがいて、後ろには父とシヴェルツとカイシドが映っている。  
小さく写った黒猫から目を移すと、膝の上でレオンを見上げるリムがいる。その姿はやけにそっくりだった。改めてそれに気づいて心がちくりと痛む。

端末を返すとシヴェルツはそれを片手でもてあそびながら淡々と続ける。幼い頃から知っているはずなのに、その無表情はまるで別人のようだ。

「事故が起きた時、オレとリック——ラルクスは、おまえたちを警備隊に預けて他の客たちと避難させた。だが、その途中でどこかのバカが仕留めそこなった魔物<レグルス>に襲われたんだ。……オレたちが駆けつけた時には、おまえたちは“ダスト”にやられて倒れていた。誰も怪我は負ってなかったのが幸いだった。魔物<レグルス>が弱っていたから運よく助かったんだろう。オレも最初はそう思ってたよ」

一息で済ませようとしたシヴェルツの声が途中で一瞬だけ昂ぶる。ざらついた低い声にその時の彼の慟哭が聞こえた気がしてレオンは身をすくませた。

それを勘違いしたのか、シヴェルツは短い金髪の頭を軽く叩いて「悪かった」と謝る。幾分表情を和らげたが、それは悲しさとやるせなさのこもった弱々しいものだった。

「逃げた魔物<レグルス>は見つけた時には既に死んでいた。おまえたちを襲った時にそいつに反撃されたのが致命傷になったんだ。……必死だったんだろうな。ずいぶん離れたところにいた」

「そいつ？」

レオンがいぶかしがると、軽く指を組んだシヴェルツは胸に染みとおるような静かな声で言った。

「リムはメルのレストランだった。あの時、リムは魔物<レグルス>と戦って奴を倒したが、代わりに大怪我を負った。今も治療中だ」  
「……リムが？」

全身傷だらけになって倒れている黒猫。その場面が生々しく浮かんで声が情けないほど震える。泣き出しそうな顔をしたレオンに、シヴェルツは口の端を引き上げて笑ってみせた。

「大丈夫だ。今は、オールドー先生——施設長のところにいる。あの人はレイスやレクエスの治療もやってる人でな、時間はかかるが必ず治るって請け負ってくれた」

「本当に？」

「ああ、おまえの大好きな銀ヒナも信頼してる人だ。大丈夫に決まってるだろう？」

かぼそい声で尋ねたレオンにシヴェルツは急におどけたように言う。その仕草に口元を引き結んだレオンはたと気づいた。

シヴェルツはリムは治療中だと言っていた。でも、メルは来週帰らなければいけないのに。嫌な予感が膨らんでレオンはシヴェルツを見上げた。

すると、彼はそれを読み取ったように静かに続ける。

「この土地はレイが沸いている特殊な場だ。弱った生き物にとっては、傷を癒すために必要なレイを吸収できる治療の場だといってもいい。……だが、この世界の他のところはそうじゃない。今のリムには世界を渡るだけの体力は戻ってない。このままの状態だと、来週帰るのは難しい」

シヴェルツの言葉に手を乗せているリムの体が震える。それとも

自分が震えているのだろうか。喉の奥が熱くなってまるでそこに塊ができたように息が苦しくなる。

彼はまた冗談を言っているのだろうか。いつものように笑ってくしゃくしゃと頭を撫でまわすのだろうか。でも、いつもなら自分の考えなどお見通しだと威張る彼は、いつまで経ってもそうしてくれなかった。

声が出たのはそれを否定して欲しかったからだだった。

「それでも、メルは帰るのか？」

「……ああ。あの子ももう帰らないといけないんだ」

短い肯定の言葉にレオンは強く目をつぶった。でも、その言葉は消えずに頭の中で繰り返し響く。触れているはずのリムの温かさが急に遠ざかる。

メルはいつそれを知ったのだろうか。どんな思いでその残酷な事実に耐えたのだろうか。

いつも一緒にいたはずの自分は、そんな大切なことにも気がつかなかった。

ふいに、頭に温かい手の感触が触れた。目を開けるとシヴェルツがのぞきこんでくる。その緑色の目は優しかった。

「そんな顔すんな。おまえのせいでも、誰のせいでもない」

いつものように温かい言葉と髪をくしゃりと掴んだ手のひらは、だが自分の醜さを知った今もうれしかった。レオンはそれに引きずり出されるようにもやもやをぶちまけた。

「……おれ、最低だ。メルが苦しんでるのに全然気づけなかった。そんなことがあったなんて思い出しなくなかったんだ。“ヒズミ病”のせいにして逃げてたんだ」

どうしてもっと早くあの悲しい夢の正体に気がつかなかったのだろう。

リムのこともリムの友だちだったリックのことも、そしてメルさえも。臆病で卑怯な自分は嫌なことをすべて忘れて、自分だけ傷の痛みから逃げ出していた。最低だ。

だが、続けられたシヴェルツの一言はレオンの迷いを断ち切った。

「メルも同じことを言ってた」

おそろおそろ顔を上げると、シヴェルツは口の端を歪めて苦笑した。

「あの子はな、おまえにはリムのことは黙っててくれて言ってくれた。だから、オレもおまえがこうして思い出すまで黙ってたんだ」

「……なんで、そんなこと？」

「さあな。こればかりはオレにはわからん」

そこでふーっと長いため息をつくとき、シヴェルツはレオンの膝の辺りを見つめた。それは、レオンではなくじっと見守っているリムに言い聞かせているようにも見えた。

「ただな、メルはリムと同じぐらいお前のことも大切に思ってる。それは、メルの片割れであるリムも同じだ。だから、メルの方はせめて自分が帰るまでは、おまえをそっとしておいてやりたかったんじゃないねえかな」

だったら、いつも自分を励ましてくれた彼女は誰に頼っていたのだろう。

それを考えるとレオンはたまらなくなつた。膝の上のリムがぼや



けてにじむ。

結局、自分はメルにずっと守られていたのだ。だったら、思い出さなければ良かったのだろうか。彼女の願いどおりこのままずっと忘れていればいいのだろうか。

「……このまま忘れていけばよかったのかな」

ゆっくりと頭が下がっていきゆるんだ唇からぼつんと言葉が零れる。すると、シヴェルツが静かに言うのが聞こえた。

「そんなことはない。おまえもちゃんと思いついて出そうとしていたんだ。その証拠に、今ちゃんと自分で思い出して、その上でメルのことを心配してるだろ。……でもな、なにもかも頑張ろうとすんな。オレはおまえのそういう一途なところ好きだけだな。混乱した頭で頑張ってたって、焦るだけでなーんにもいいことはねえ」

そう言うのと「こんな風にな」とシヴェルツは両手でいきなりレオンの頭を鷲づかみにした。逃げる間もなくシャンプーよろしく乱暴に頭を撫でまわす。悲鳴を上げるレオンを無視してひとしきり撫で回すと、彼はにかつと笑って言った。

「この先どうするかはおまえ次第だ。ただな、人とレクエスの絆はオレたちが考えているよりずっと深く、互いにいつも影響しあってるんだ。もし、タマちゃんに何かしてやりたいなら、まずはおまえ自身が気持ちを整理しろ。それで、落ちついたらまた来な」

「わ、わかった……」

目を回したレオンがうなずくとシヴェルツがぱつと手を放す。やっと平衡を取り戻すと頭の中の血が音を立てて流れていく。軽い目まいを覚えてレオンは背に寄りかかった。膝の上のリムと目が合う

と気が抜けたように「ふにゃあ」と鳴く。

すると、シヴェルツは「あー、腹が減って死にそうだ」と急に情けない顔になって腹を押さえた。向かい側にあった皿を引き寄せる、何を思ったかリムに皿を出して「おまえさんも食うか？」と聞く。すると、リムも「にゃあん」とご機嫌で返事をする。

そのまま猛然とケーキを平らげていく2人に、あまりの変わり身の早さにぼかんとしていたレオンはシヴェルツに抗議した。

「シヴァ、猫にこんな甘いのやるなよ!!」

「ああ？ 若いのに硬いこと言うなよ。根暗レオンを立ち直らせてくれたネコ様に、オレからのささやかなプレゼントだ。たーっぷり食べていいからな」

そう言いながらシヴェルツはケーキを2つ載せてリムにやる。ふと見ると、大皿にはもうケーキは残っていなかった。自分のお皿にはリムにやったせいで半分しか残っていない。慌ててリムを見るとレオンから守るように急いで平らげてしまう。

しよげていたレオンは怒りに震える声で言った。

「……こ、この、もうおやつ作ってやらないからな！」

そう言うと、レオンは残ったケーキをいきおいよく頬張った――。

島中で一番高いその場所の淵につま先をかけると、目の前に広がる青空と海に視線が吸い込まれる。手を伸ばすと遙か彼方から渡ってきた風が全身を包み込む。気まぐれな風の尾が足をくすぐり浮き上がるような高揚感を感じる。

この風に乗れたら、遠くに見える隣の島まで飛んでいけるだろうか。島の中で一番高いここに立つたびにレオンはそう思う。しかし、いつもの空想は少女の大声でかき消された。

「リムー、レオンー！」

その声にレオンは藍色の目をしばたたかせた。落ちないように慎重にしゃがんで下をのそきこむと、左下の小さな浜辺からメルたちが手を振っている。それに応えて手を振り返すと、両手で口を囲って叫ぶ。

「もうちょっと待ってて！」

聞こえなかったのかメルは急かすように飛び跳ねる。その子どもっぽい仕草に思わず笑いそうになって慌てて背を向けると、レオンは置いておいた浮遊石板<セルフィン>のところへ戻った。コントロールリングを両手首にはめてすべすべとした円形の石板を軽く叩くと、軽い振動音とともに地面から50センチほど浮き上がる。

それを確認すると、レオンは大木の根の間でうずくまっている黒猫のところへ向かった。しゃがみこんでなるべく優しく言う。

「ほら、メルが呼んでるぞ。行こう」

「ふにゃ……」

だが、リムの返事は相変わらずだった。手を伸ばすと嫌がって後ずさってしまふ。その頑なな拒絶にレオンは困り果てた。

レナの家裏のコモモの森を抜けると空と海の狭間に立つ島の頂上に出る。下草の生えた地面の先端は海へと続く険しい崖になっていて、一部が途中で分かれて左下に見える白い浜辺へと伸びている。誰も来ないことをいいことに、レオンたちは毎日ここで浮遊石板<セルフィン>の練習をしていた。

浜辺へと続く岩肌は一部が平らに削られていて、ちょうど人が1人通れるぐらいの道になっている。まだ慣れていないレオンとヴァンは誰かが作ったこの坂で練習をしているが、幼い頃から浮遊石板<セルフィン>で遊んでいるメルはごつごつとした岩肌の上を軽やかに滑っていく。だが、彼女のレクエスのリムはその大胆な滑走が苦手で、いつも置いていかれてしまふ。結局、今日も最後に残ったレオンがリムを説得していた。

「でも、リムだって1人でここにいるの、嫌だろ？」

「みゃあう」

どうやら置いていかれると勘違いしたらしい。今にも泣き出しそうな声で訴えられてレオンは降参した。

とりあえずもう少しだけ待ってみるか。浮遊石板<セルフィン>を停止させてリムの隣に座って大木に寄りかかる。おそろおそろ見上げたリムの背中を撫でながら「もうちょっとしたら行くからな」と言う、小さく鳴いてレオンの隣に座り込んだ。

そのいじけた姿に苦笑しかけて、ふとさっきのメルのうつぶんを晴らすような荒々しい滑走を思い出す。あの物凄い剣幕ではただでさえ怖がりなリムは近づきたくもないのだろう。レオンはぼさぼさの黒いしっぽを見やりながら同情をこめて言った。

「おまえも大変だな」

「にゃ」

「ああ、ここにいたんだ」

横目で見上げたリムが気だるげにしっぽを一振りすると、ふいに声が聞こえてレオンは跳ね起きた。崖の方を見ると、黒髪の少年が浮遊石板<セルフィン>に乗って上がってきたところだった。地面に降り立つとその場に停めてやって来る。

メル代わりにリムを迎えに来たのだろうか。一瞬そう思ったが、彼はリムをちらりと見て苦笑すると静かに腰を下ろした。どうやら自分と似たようなことを思っているらしい。レオンはリムの代わりに一応事情を話した。

「メルゴンが暴れてて怖いから、近寄りたくないんだって」

リックは一瞬きよんとしたが、誰のことかわかると笑って答えた。

「もう大丈夫だよ。一滑りしたらけろっとしてたから」

「そっか。良かったな、リム」

「ふふ、さっきルアも同じことを言ってたよ。暴れて忘れられるんだったら最初からケンカなんかしなけりゃいいのに、ってさ」

近頃ますます愚痴っぽくなってきたルアを思い出してレオンは心底同情した。いつだったか、レナの家でルアの頭のことを笑い話にしたことがあったが、本当にそうなるかもしれない。レオンは心の中でルアに詫びた。

メル父子のケンカの原因は、自分たちがメルを初めての異世界旅行へ誘ったことだった。

レオンたちの世界では、6月に長い連休がある。それを聞いてう

らやましがるメルに、リムと一緒に家に遊びに来ないかと誘ったのだ。

元々、レオンたちは父に連れられてとはいえ8歳の頃から異世界のここへと遊びに来ている。最初は外の世界に戸惑っていたメルもすぐに乗り気になった。

そして、3人が驚いたことに、メルの面倒を見ているレナはあっさりと許してくれた。このところ“ゲート”は安定しているし、女の子とはいえメルももう11歳になり傍にはレクスエスがいる。彼女はレオンたちの父親が迎えに来ることを条件に、渋るメルの父親と島長と交渉してくれて話は一応まとまった。

だが、1人娘を溺愛しているアウルはやはり心配でたまらないらしい。あの手この手で引きとめようとするのでメルに嫌がられている。最近では、徹底的に無視しているので、ルアがとぼちりをくらっているらしい。

「このままだとほんとははげるかもな。今度来る時はなんか体に良さそうな物持ってくるよ。レクスエスに効くかはわかんないけど」

「ふにゃあん」

「なんだよ、リムの分はないぞ」

2人のやりとりに耳を立てていたリムは、ごちそうだと思ったのか目を輝かせてレオンを見上げる。レオンが呆れると何を思ったのかいきなり膝に飛び乗ってきた。

「のわっ！」

完全にふいをつかれたレオンは悲鳴を上げて背後の大本に頭をぶつけた。さすりながらリムをにらみつけると、すねたように鼻を鳴らして伏せてしまう。

「大丈夫？」

「痛てて……。このバカ猫、もう置いてかれても待っててやらないからな」

脅してもリムはぴくりとも動かず目を閉じている。優しいリックが来たので安心して居るのだろう。レオンはむっとしたが、その案外かわいらしい寝顔に免じて一度だけ許してやることにした。

絹のようにつやつやした黒毛を撫でていると、浅い海のような碧色の目を細めてくつろいだリムを見ていたリックはふと懐かしそうに言う。

「クレスもここがお気に入り場所だったんだ。ここは空と海が一番きれいに見えるからって、毎日やって来ていつまでも景色を見ててね。メルが生まれてからも、いつもここで子守歌を歌って寝かせていたんだ」

「……そっか。クレスさん、ここのコモモの花が好きだったもんな」

リックの静かな言葉にレオンは手を止めて、寄りかかっている大木と森を見上げた。今は緑の葉を繁らせた木々に、少し前の桃色の花々を咲き誇らせていた姿が重なる。記憶の中の瑞々しいコモモの甘い香りは、あの夕日に照らされた海岸でのほろ苦い思い出を思い起こさせる。

去年のメルの誕生日はやって来たばかりの黒い子猫を歓迎するように、コモモの花が時期を少しだけ早めて華やかに咲き誇っていた。レオンのプレゼントはちょうどコモモと同じ色の猫のぬいぐるみで、メルもリムと名づけられた彼女のレクエスも大喜びだった。

だが、そのたった3週間後、散り始めたコモモの花に付き添われるようにメルの母親は突然亡くなった。

連絡を受けた母にそれを告げられた時、レオンは最初はそれを信じられなかった。それがやっと現実だと受け止められたのは、主を

失って抜け殻のように静まり返ったメルの家に着いてからだった。

久しぶりに会ったメルは心を閉ざしてしまったように虚ろな顔をして、ずっとレオンが贈ったぬいぐるみを抱きしめていた。その足元にはメルを護るように気を張ったリムがびったりと寄り添い、忙しい大人たちに代わってメルや自分と同じぐらいの黒髪の少年——リックが2人を見守っていた。

リックはクレスとは深い縁があったらしい。この後、島に移り住んでからは彼女の分もメルを見守っている。そのせいか、メルは留守にしがちな父親よりもずっと彼を慕っていた。母を失った悲しみからメルが立ち直れたのは彼のおかげだ。

すると、同じように思い出に浸っていたのだろうリックは自分の失敗に気づいたように、レオンをはっと見る。その顔にレオンはふと気の毒になる。彼はいつも自分よりも他人の心配ばかりしている。彼だってメルと同じぐらい傷ついただろうに、いつもメルを支えていた彼は誰に悲しみを打ち明けたのだろうか。

「……ごめん、嫌なこと思い出させちゃったね」

「そんなことないよ。リックこそ、この1年ずーっとメルのお守りしてて大変だっただろ？ リムもいるから苦労も2倍だし」

レオンがわざとまぜっかえすとリムが腹にパンチをしてくる。だが、予想していたレオンは腹筋を固めて耐えると、逆に膝を揺らし、リムを振り落としてやった。情けない悲鳴を上げて転げ落ちたリムとにらみ合っていると、リックは小さく吹きだした。笑いながら言う。

「そんなことなかったよ。強いて言うなら、アウルとのケンカが絶えないのが悩みだけど、これはルアとリムも一緒だから。あとは、そうだね、メルがどんな人が好きになるのか気になるかな」

「なにそれ。メルってもう好きな人いるのか？」



「うん。それにね、本人は気にしてないけどけっこうもてるんだよ。でも、ちょっとでも気に入らない人はリムが飛びかって追い返しちゃうんだ」

「へええ、おまえって意外と気が強いんだな」

思わずリムの顔をのぞきこむとそっぽを向かれる。その子どもっぽい仕草に「悪かったよ」と謝ると、また膝の上に乗ってきて座り込む。そんなに居心地がいいのだろうか。レオンが首をかしげると、リックが真面目な彼にしては珍しく冗談めかして言う。

「メルに好きな人ができたら一緒にここに来てほしいな。ここの浜辺から見る夕焼けはとてもきれいだから」

「じゃあ、こっちに來たら変な虫が付かないようによく見張っておかないとな」

「うん、そうだね。……リム、メルのことよろしくね。あと、はしやぎすぎて無茶をしないようにね」

「よろしくねって、リックも来るんだろ？」

まるで他人事のような口調にレオンは不安になる。すると、リックは答えずに迷うように目を伏せてしまう。その何かを考える表情にレオンは問いかけた言葉を呑み込んで彼の返事を待った。

やがて、重くなった空気を破るようにいつものように穏やかな声が聞こえてくる。

「……僕も元の場所へ帰らないといけないんだ。だから、今度の旅行には一緒には行けない。せっかく誘ってくれたのに、ごめんね、レオン」

「元の場所って、故郷に帰るのか？　でも、またここに戻って来るんだよね？」

「ううん、すごく遠いところだからもうここへは戻って来れないん

だ。今度の旅行からメルが帰ってきたら、すぐに行かないといけない。だから、君とヴァンと会えるのもあとちょっとなんだ。もっと早く言えばよかったけど、なんだか寂しくて言えなくて。本当にごめんね」

弱々しい笑みを浮かべて謝る彼に、却ってレオンは彼の本心がわかってしまった。

本当は彼は帰りたくないのだ。でも、何がしかの理由があってそうしなければいけない。それはとても切実で、自分もおそらくメルでさえも引きとめることは叶わないのだろう。でも、それを知られたくなくて、いつだって優しすぎる彼はこんな時でも不器用な嘘をついている。

リックがなぜそうしなければいけないのかはレオンには全くわからない。聞けば教えてくれるかもしれないが、でもそれは知らない方がいい。そんな気がした。

だから、レオンは大きくため息をついて言った。

「……わかった。でも、メルが帰ってくるまではちゃんと待っていてくれよな」

「うん。大丈夫だよ、その時までにはちゃんといるから」

「絶対だからな」

念を押すとリックは困ったように首をかしげた。その頼りない表情にレオンはむっとして言った。

「お・み・や・げ。メルに預けるからちゃんと受け取ってくれよな。ヴァンと相談してとびっきりの物を選ぶから」

リックの顔を見ずにわざと乱暴に言うのと、まるで怒っているように陰のある口調になってしまう。本当はもっと丁寧に言いたいのに、

こんなときに限っていい言葉が浮かばない。内心頭を抱えているが、顔はどんどん怖くなっていく。

すると、膝の上のリムが顔を上げて澄んだ声で「にゃあ」と鳴く。その視線の先を見ると、気がつくトリックは顔をくしゃくしゃにしていた。レオンと目が合うとほんのりと笑う。初めて見るその泣き笑いのような顔は、齢を経た人特有の力強さと温かさがこもっていた。

「……ああ、君もヴァンもメルも本当に大きくなったね。短い間だったけど、君たちと会えて本当に良かった」

「え、もしかして、トリックは前からおれたたちのこと知ってたのか？」  
「ふふっ、初めてここに来たときから知ってたよ。この姿で会うのは去年の送りの儀が初めてだったけどね。あの時は、メルを励ましてくれてありがとう」

思いがけない言葉にレオンがぼかんとすると、トリックはリムを見て言った。

「リム、メルのことをお願いね」

トリックがいつも首から提げている透きとおった水色の石のペンダントを軽く握ると、リムは顔を上げて「にゃん」と力強く鳴く。トリックは安心したように笑うと、戸惑うレオンにいつものように微笑みかけた。

「お土産ありがとう。楽しみに待ってるよ。……さて、そろそろ行こうか。メルがきつと下で心配しているだろうから」

そう言ってくるりと向けた背中では、いつもよりも大きく見えた――  
――。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6876w/>

---

帰るための言葉

2011年12月3日17時56分発行